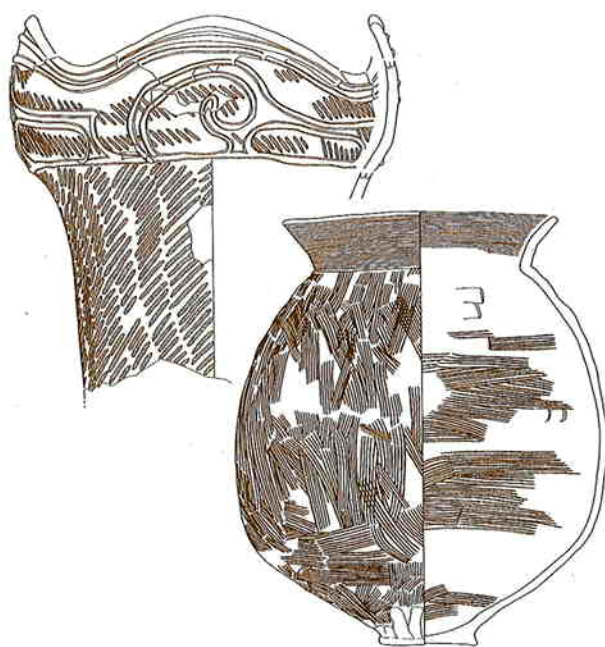


小屋塚遺跡

—第1～27次発掘調査報告—



1995.11

盛岡市教育委員会

小屋塚遺跡

—第1～27次発掘調査報告—

1995.11

盛岡市教育委員会

例 言

- 1 本書は、岩手県盛岡市大新町所在の小屋塚遺跡第1～27次発掘調査報告である。
なお関連遺構として、未報告の大館町遺跡1973年調査および第37次調査検出の古墳～平安時代の竪穴住居跡もあわせて収録した。
- 2 遺構の平面表示は、平面直角座標第X系を座標変換した調査座標で表示した。
調査座標方向軸 第X系に準ずる
調査座標原点 X-32 000.000 Y+24 500.000
- 3 高さは標高値をそのまま使用した。
- 4 土層図は堆積のあり方を重視し、線号の太さによって堆積の違いを表した。土層注記は層理ごとに本文に記載し、個々の層位については割愛した。
- 5 遺構記号は次のとおりとした。

	遺 構	記号	遺 構	記号	遺跡・時代	番 号	
記 号	竪穴住居跡	R A	溝 跡	R G	番 号	縄文時代	1000～7999
	建 物 跡	R B	配石・集石	R H		小屋塚遺跡	7000～7999
	柱 列	R C	井 戸 跡	R I		大新町遺跡	6000～6999
	土 壇	R D	遺物集中区	R P		大館町遺跡	2000～5999
	竪 穴	R E	そ の 他	R Z		弥生時代以降	8000～8999

- 6 本書の執筆編集は、教育委員会文化課 八木光則、室野秀文、三浦陽一、千田和文、似内啓邦、藤岡光男、津嶋知弘、神原雄一郎、黒須靖之が担当した。

目 次

例 言	
目 次	
I 遺跡の環境	
1 位置と地形	1
2 周辺の遺跡	1
3 現況と文化層	4
II 調査経過	
1 調査経過	6
III 調査成果	
1 縄文時代の遺構と遺物	8
(1) 小屋塚遺跡南部	8
(2) 小屋塚遺跡北部	30
2 古墳～平安時代の遺構と遺物	47
(1) 小屋塚遺跡	47
(2) 大館町遺跡	49
IV 調査のまとめ	
1 縄文時代の遺構と集落	65
(1) 小屋塚遺跡の様相	65
(2) 縄文時代中期遺跡の類型	66
2 古墳～平安時代の住居跡と土器	69
(1) 竪穴住居跡の特徴	69
(2) 古墳～平安時代の土器様相	70
付章 『盛岡市下厨川小屋塚遺跡調査略報』	75

図 版 目 次

第 1 図版	小屋塚遺跡	第 9 次調査
第 2 図版	小屋塚遺跡	第12次調査
第 3 図版	小屋塚遺跡	第14次調査
第 4 図版	小屋塚遺跡	第14次調査
第 5 図版	小屋塚遺跡	第15・16次調査
第 6 図版	小屋塚遺跡	第20・22次調査
第 7 図版	小屋塚遺跡	第25次調査
第 8 図版	小屋塚遺跡	1968年調査

挿 図 目 次

第 1 図	小屋塚遺跡の位置	3
第 2 図	小屋塚遺跡の調査位置	5
第 3 図	小屋塚遺跡南東部の遺構	9
第 4 図	R D7101・7102土壇	10
第 5 図	R A7101竪穴住居跡・R D7110~7122土壇	13
第 6 図	R A7101竪穴住居跡・R D7110~7122土壇土層断面	14
第 7 図	R A7101竪穴住居跡出土遺物	15
第 8 図	R D7110・7111土壇出土遺物	16
第 9 図	R D7114~7120土壇出土遺物	18
第10図	R D7122土壇出土遺物	20
第11図	R D7123~7125土壇	21
第12図	第 9 次調査遺物包含層出土遺物(1)	22
第13図	第 9 次調査遺物包含層出土遺物(2)	23
第14図	第 9 次調査遺物包含層出土遺物(3)	24
第15図	第 9 次調査遺物包含層出土遺物(4)	25
第16図	第 9 次調査遺物包含層出土遺物(5)	26
第17図	第 9 次調査遺物包含層出土遺物(6)	27
第18図	第14次調査遺物包含層出土遺物(1)	28

第19図	第14次調査遺物包含層出土遺物(2)……………	29
第20図	小屋塚遺跡北東部の遺構……………	30
第21図	R D7103・7104土塚……………	32
第22図	R D7105～7109土塚……………	33
第23図	小屋塚遺跡北西部の遺構……………	35
第24図	R D7126土塚出土遺物……………	37
第25図	R D7127・7128土塚・柱穴R F7001出土遺物……………	38
第26図	第25次調査遺物包含層出土遺物(1)……………	39
第27図	第25次調査遺物包含層出土遺物(2)……………	40
第28図	第25次調査遺物包含層出土遺物(3)……………	41
第29図	第25次調査遺物包含層出土遺物(4)……………	42
第30図	第25次調査遺物包含層出土遺物(5)……………	43
第31図	第25次調査遺物包含層出土遺物(6)……………	44
第32図	第25次調査遺物包含層出土遺物(7)……………	45
第33図	第25次調査遺物包含層出土遺物(8)……………	46
第34図	R A8713竪穴住居跡……………	47
第35図	R A8713竪穴住居跡出土遺物……………	48
第36図	R A8714竪穴住居跡……………	48
第37図	R A8714竪穴住居跡出土遺物……………	49
第38図	大館町遺跡の古代遺構……………	50
第39図	R A8701竪穴住居跡……………	50
第40図	R A8702竪穴住居跡……………	51
第41図	R A8702竪穴住居跡出土遺物……………	52
第42図	R A8703竪穴住居跡……………	53
第43図	R A8703竪穴住居跡出土遺物……………	54
第44図	R A8704竪穴住居跡……………	55
第45図	R A8704竪穴住居跡出土遺物……………	56
第46図	R A8711竪穴住居跡……………	58
第47図	R A8711竪穴住居跡出土遺物(1)……………	59
第48図	R A8711竪穴住居跡出土遺物(2)……………	60
第49図	R A8712竪穴住居跡……………	62
第50図	R A8712竪穴住居跡出土遺物(1)……………	63
第51図	R A8712竪穴住居跡出土遺物(2)……………	64
第52図	盛岡周辺の縄文時代中期の主要遺跡……………	68
第53図	大館遺跡群の土師器(1)……………	72
第54図	大館遺跡群の土師器(2)……………	73

I 遺跡の環境

1 位置と地形

小屋塚遺跡は盛岡市の北東部の火山灰砂台地（滝沢台地）に立地する。火山灰砂台地は東を南流する北上川、南を東流する雫石川と砂礫段丘、西を隆起による南北の篠木山地によって画されている。北上川と篠木山地との距離は約5 kmあり、北上川沿いの東西1.5 km、南北2 kmの範囲で南に張り出しており、遺跡はこの張り出しの南縁に位置している。篠木山地の西には岩手山南麓の小岩井付近には広範な泥流地形が広がっている。

遺跡の立地

火山灰砂台地（滝沢台地）は表土下に渋民火山灰や分火山灰がみられる。その南西の砂礫段丘は基本的にそれらの火山灰を欠き、シルトや粘土が堆積しているが、一部残丘状に分火山灰が残るところもある。砂礫段丘の南側は雫石川氾濫原となる。火山灰砂台地と砂礫段丘面の比高差は本遺跡付近では2 m程度であり、緩やかな傾斜で移行しているところが多い。

遺跡の地形

火山灰砂台地には、北上川と平行するように南に流れる諸葛川、木賊川、菓子川などで開析されるほか、地表ではほとんど確認できないいくすじもの埋没谷が刻み込まれている。

小屋塚遺跡は、火山灰砂台地が北上川沿いに張り出す部分の南縁に立地する。台地南縁には、西から大館堤・大館町・大新町・小屋塚・前九年・安倍館・館坂遺跡がならんでいる。各遺跡の境は埋没谷をもって分けられるが、現在の地表観察では不明確である。埋没谷には縄文土器がみられるところもあり、縄文時代には低湿地であったと考えられる。

2 周辺の遺跡

火山灰砂台地南縁にならぶ小屋塚遺跡を含む7遺跡は縄文時代以降の遺跡である。大館堤遺跡は調査面積が小さく全体像は明らかではないが、縄文時代中期の竪穴住居跡が1棟確認されており、希薄ながらも集落遺跡ととらえられる。大館町遺跡は中期の竪穴住居跡が数百棟検出されている拠点集落である。集落の形態は馬蹄形に竪穴住居群が配置され、中心部は遺構が希薄となっている。時期は大木7 a～9式で、特に8 a～8 b式に集中している。また7世紀から10世紀の竪穴住居跡も確認されている。

遺跡の立地

大新町遺跡は縄文時代草創期の爪形文土器や早期の押型文・沈線文土器が多量に出土しており、早期の竪穴住居跡も確認されている。また8世紀や11世紀の竪穴住居跡や掘立柱建物跡も検出されている。

前九年遺跡では縄文時代中期大木9式期の竪穴住居跡1棟、前期～中期のフラスコ形土壇や陥し穴状土壇数基が調査されており、また縄文時代早期の遺物包含層も確認されている。

安倍館遺跡は中世の大規模な館跡で、深く幅の広い堀が現在も市街地の中に残っている。縄文時代のフラスコ形土壇や陥し穴状土壇も数基検出されており、館坂遺跡では旧石器時代の石器、縄文時代早期の土器が表面採集されている。

また台地南西の砂礫段丘面に立地する境橋遺跡では、縄文時代の陥し穴状土壇、弥生時代の遺物包含層、平安時代以降の河道跡など、幅Ⅰ～Ⅲ遺跡では7世紀の竪穴住居跡1棟が調査されている。

稻荷町遺跡では縄文時代の陥し穴状土壇、中～近世の掘立柱建物跡がまとめて確認されている。さらに里館は中世の館跡で、堀や数多くの掘立柱建物跡や竪穴が、また里館東側の権現坂地区では縄文時代後期の竪穴住居跡1棟も確認されている。宿田遺跡では7世紀頃の遺物などが出土している。これらの南側の遺跡では縄文時代の陥し穴状土壇や遺物の散布が認められるが、集落はほとんど形成されず、おもに古代以降に占地されている。

なお境橋遺跡と諸葛川をはさんで火山灰砂台地の南縁に立地する滝沢村高柳・諸葛橋・室小路遺跡では7世紀の竪穴住居跡が確認されており、広範囲におよぶ集落が形成されていたようである。このほかにも未調査の遺跡が多くあり、市内および周辺でも遺跡が比較的密集している地域である。

北上川以東

北上川の東では小鳥沢遺跡群（B遺跡）や松屋敷遺跡、西黒石野遺跡から縄文時代中期の竪穴住居跡が多数確認されている。それぞれ全体規模や構造が明らかではないが、短期拠点集落と推定される。また東黒石野遺跡では縄文時代のフラスコ形土壇約60基が西緩斜面に集中して検出された。さらに同遺跡の一角にある上田蝦夷森古墳群では、7世紀の古墳から衝角形冑などが出土し、注目された。

また庄ヶ畑遺跡では縄文時代早期の竪穴住居跡数棟が周辺を丘陵に囲まれた洞状の地形の微高地から検出されている。

	遺 跡	時代・種別		遺 跡	時代・種別		遺 跡	時代・種別
1	けやきの平	縄文・平安 集落	18	館 坂 遺 跡	旧石器・縄文包含	35	大 宮 遺 跡	中世 集落
2	外山Ⅰ遺跡	縄文・平安 集落	19	前九年遺跡	縄文 集落	36	小 幅 遺 跡	平安 集落
3	耳取遺跡	縄文 遺物包含地	20	小屋塚遺跡	縄文～平安 集落	37	熊 堂 遺 跡	平安 集落
4	室小路遺跡群	縄文～平安 集落	21	大新町遺跡	縄文～平安 集落	38	野 古 遺 跡	平安 集落
5	諸葛川遺跡	古墳～奈良 集落	22	大館町遺跡	縄文～平安 集落	39	台 太 郎 遺 跡	奈良～平安 集落
6	高 柳 遺 跡	古墳～奈良 集落	23	大館堤遺跡	縄文～平安 集落	40	南仙北遺跡	平安 集落
7	境 橋 遺 跡	縄文～平安包含地	24	宿田南遺跡	平安～近世 集落	41	永福寺山遺跡	古墳 遺物包含地
8	松屋敷遺跡	縄文 集落	25	里 館 遺 跡	縄文～近世 複合	42	落 合 遺 跡	縄文 集落
9	小鳥沢遺跡群	縄文 集落	26	稻荷町遺跡	縄文～近世 複合	43	大 塚 遺 跡	縄文～近世 集落
10	庄ヶ畑遺跡群	縄文 集落	27	幅 遺 跡	古墳～奈良 集落	44	柿の木平遺跡	縄文～近世 集落
11	上田蝦夷森古墳群	古墳 古墳	28	館 遺 跡	平安～近世 複合	45	稲久保遺跡	縄文 集落
12	西黒石野遺跡	縄文・平安 集落	29	八 卦 遺 跡	奈良～平安 集落	46	盛 岡 城 跡	平安集落近世城郭
13	黒石野平遺跡	縄文・平安 集落	30	志 波 城 跡	奈良集落平安城柵	47	大慈寺町遺跡	平安 集落
14	東緑が丘遺跡	縄文 遺物包含地	31	新堰端遺跡	縄文～平安 集落	48	小 山 遺 跡	縄文集落中世館跡
15	氏子橋遺跡	縄文 遺物包含地	32	田 貝 遺 跡	平安 集落	49	砂 溜 遺 跡	縄文～近世 集落
16	上堂頭遺跡	縄文・平安包含地	33	高 館 古 墳	奈良 古墳	50	仁反田遺跡	縄文集落中世館跡
17	安倍館遺跡	縄文～近世 複合	34	林 崎 遺 跡	平安 集落	51	立 石 遺 跡	縄文～平安 集落

周辺遺跡一覧（住居跡等が発掘された遺跡）



第1図 小屋塚遺跡の位置 (② 1:50,000)

市の中心部でも盛岡城跡や大慈寺遺跡から平安時代の竪穴住居跡が数棟づつ確認されている。現況では遺跡の確認が困難であるが、城下町形成以前から微高地は利用されていたことが次第に明らかになってきている。

雫石川以南 雫石川の南の低位砂礫段丘面上には、古代の遺跡が数多く分布している。これまで7世紀代の遺跡は未確認で、8世紀の八卦遺跡などの集落や太田蝦夷森古墳群が知られている。9世紀以降になると志波城跡や多くの集落遺跡が営まれている。縄文時代の遺構は陥し穴状土壇などが散発的にみられるものの、竪穴住居跡をもつ集落遺跡はさらに南の猪去から飯岡山麓にかけての山沿いに分布している。

3 現況と文化層

遺跡の現況 小屋塚遺跡の範囲は、南限が調査座標RX±0付近で、遺跡中央を南北にとおる市道の西側に比高2mほどの段丘崖が残されており、南の里館遺跡（西権現坂地区）と画されている。西は大新町遺跡と埋没谷で画されるが、遺跡の東側はやや低くなるも前九年遺跡とはほとんど地形の区切りがない。また遺跡の北側も次第に高くなるもほぼ平坦面が続いている。これらの地形やこれまでの調査結果をみると、遺跡範囲は東西約250m、南北約150mの規模と想定される。

小屋塚遺跡の中央部は市道が南北にとおっており、その両側には肋骨のように私道がつけられ、ほとんどは隙間なく宅地化されている。このため、発掘調査は住宅の建て替えや増築あるいは道路改良など小面積の調査となっている。

ところで、大館町～小屋塚遺跡にかけての平均的な土層は、次のとおりである。

遺跡の土層

I層－耕作土、攪乱土、盛り土など。

II層－黒色～黒褐色土、縄文時代中期～後期の遺物包含層で、大新町遺跡東側から小屋塚遺跡西側にかけて厚く形成されている。

III層－黒褐色～暗褐色土、縄文中期中葉の大量の遺物廃棄による包含層で、大館町遺跡南～西部に分布し、大新町や小屋塚では形成されていない。

IV層－黒色土、おもに縄文中期前葉の遺物包含層で、小屋塚遺跡南東部にもみられるが、大新町遺跡では形成されていないようである。

V層－暗褐色土の漸移層、大新町遺跡では縄文時代早期の遺物（押型文・沈線文土器群）が大量に出土している。

VI層－分火山灰層、大新町遺跡では縄文時代草創期の遺物（爪形文土器群）が大量に出土している。

この下に赤褐色や青灰色スコリア（小岩井浮石）があり、さらにその下に白桃色の渋民火山灰が堆積している。これまでのところ小岩井浮石以下に遺物は確認されていない。

遺構掘り込み面は、縄文中期がⅢ～Ⅴ層上面から掘りこみ、古代の遺構はⅡ層を掘りこんでいる。



第2図 小屋塚遺跡の調査位置 (1:2,000)

Ⅱ 調査経過

1 調査経過

本遺跡の最初の発掘調査が行われたのは1968年である。遺跡の中央を南北に縦断する道路改良工事の際、フラスコ形土壇6基が確認され、その西側の10aの畑で縄文中期の竪穴住居跡1棟とフラスコ形土壇8基が検出された（付章『盛岡市下厨川小屋塚遺跡調査略報』参照）。

その後発掘調査が行われないまま市街化が進んでいたが、盛岡市教育委員会の発掘調査体制の充実とともに住宅建築などの事前調査を1984年から実施するようになった。これまで27次にわたる調査を行っているが、調査原因は住宅建築関連24件、道路整備関係3件である。

次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構・遺物
1968	大新町20-11 外	宅地造成	不詳	68. 5.14 } 68. 7.31	縄文中期竪穴住居跡1棟、フラスコ形土壇14基
1	大新町168-5	住宅新築	48	84. 5. 9 } 84. 5.10	縄文中期遺物包含層（土器少量）
2	大新町68-8	住宅新築	30	84. 6.25 } 84. 6.26	縄文中期遺物包含層（土器少量）
3	大新町地内	道路改良	—	84. 6.30	縄文中期竪穴住居跡（断面のみ）
4	北天昌寺町4-23	住宅増築	17	85. 4.13 } 85. 4.16	遺構・遺物なし
5	大新町68-2	住宅新築	81	85. 5.15	遺構・遺物なし
6	大新町168-9	住宅新築	21	85. 5.20	遺構・遺物なし
7	大新町68-18	住宅新築	19	85. 6. 4	遺構なく、遺物は縄文土器・土師器数点が出土
8	大新町169-19	住宅改築	25	86. 4.18	遺構なく、遺物は縄文土器・土師器数点が出土
9	大新町168-11	住宅新築	50	86. 6. 2 } 86. 6. 9	縄文時代土壇2基、遺物包含層、奈良時代竪穴住居跡1棟
10	大新町1-35	住宅新築	52	86. 6. 9 } 86. 6.10	遺構なく、遺物は縄文土器数点が出土

次 数	所 在 地	調査原因	面 積	期 間	検 出 遺 構 ・ 遺 物
11	大新町20-3	宅地造成	137	86.10.17 } 86.10.18	遺構・遺物なし
12	大新町3-26	住宅改築	330	87.4.28 } 87.5.8	縄文時代土壇7基、柱穴8口
13	南青山町243-20	店舗新築	16	87.7.31	遺構・遺物なし
14	大新町10-10	住宅新築	90	87.8.17 } 87.9.21	縄文時代中期堅穴住居跡1棟、フラスコ形貯蔵穴など13基
15	大新町167-14	住宅改築	131	87.11.2 } 87.11.27	縄文時代遺物包含層
16	大新町168	市道改良	116	87.10.8 } 87.10.21	縄文時代土壇3基、遺物包含層
17	大新町4-8	住宅新築	23	89.6.30	遺構・遺物なし
18	大新町20-1	私道改良	12	90.7.25	遺構・遺物なし
19	大新町169-17	住宅改築	40	91.5.21	遺構・遺物なし
20	大新町19-7	住宅新築	72	91.9.17 } 91.9.18	平安時代堅穴住居跡1棟
21	大新町20-42	事務所改築	80	92.12.	遺構・遺物なし
22	大新町168-14	住宅改築	48	93.6.7	遺構・遺物なし
23	大新町168-14	住宅新築	38	93.6.7	遺構・遺物なし
24	大新町20-1	住宅新築	20	93.6.7	遺構・遺物なし
25	大新町20-40	住宅改築	53	94.5.25 } 94.6.6	縄文時代土壇3基、柱穴18口、縄文時代遺物包含層
26	大新町168-8	住宅改築	40	94.10.12	遺構・遺物なし
27	大新町169-4	住宅改築	45	94.10.12	遺構・遺物なし

Ⅲ 調 査 内 容

1 縄文時代の遺構と遺物

(1) 小屋塚遺跡南部

小屋塚遺跡南部の調査はこれまで、1968年の調査を最初に、84年度以降に1・2・3・4・6・7・9・14・15・16・22次調査、また遺跡南西部の調査は大新町遺跡24次調査として調査を実施している。

遺跡中央部

1968年に遺跡の中央を南北に分断する道路改良工事の際、竪穴住居跡1棟（R A 7001）、プラスチックピット14基（R D 7001～7014）が検出され、1・2・7・15次調査では、やや希薄な縄文中期の遺物包含層が確認された。9次調査では縄文時代の土壇2基（R D 7101・7102）のうちひとつは溝状の、ひとつは円形の陥し穴状のものである。また比較的遺物が多い包含層も確認され、7世紀代の竪穴住居跡1棟（R A 8701）も検出された。

3次調査では縄文時代中期の竪穴住居跡断面を検出し、14次調査でその竪穴住居跡（R A 7101）、プラスチック貯蔵穴10基、ピーカー形などの土壇3基（R D 7110～7122）、小ピット6口を確認した。このうち竪穴住居跡はその南東部を検出し、埋設土器や大きい柱穴などを確認している。時期は大木8 b式期である。プラスチック貯蔵穴10基は上端径1.7～3.1m、深さ1.3～2.3mの大形のものである。ほとんどは底が平坦であるが、中央にピットがあるもの、中央のピットから放射状に溝が掘られるものが各1基ずつみられる。時期は下層から大木8 b式の浅鉢を出土するものがあり、ほかのものも概ねその時期と考えられる。なお住居跡と重複する貯蔵穴は住居より古いので、大木8 b式の中での遺構変遷が考えられる。

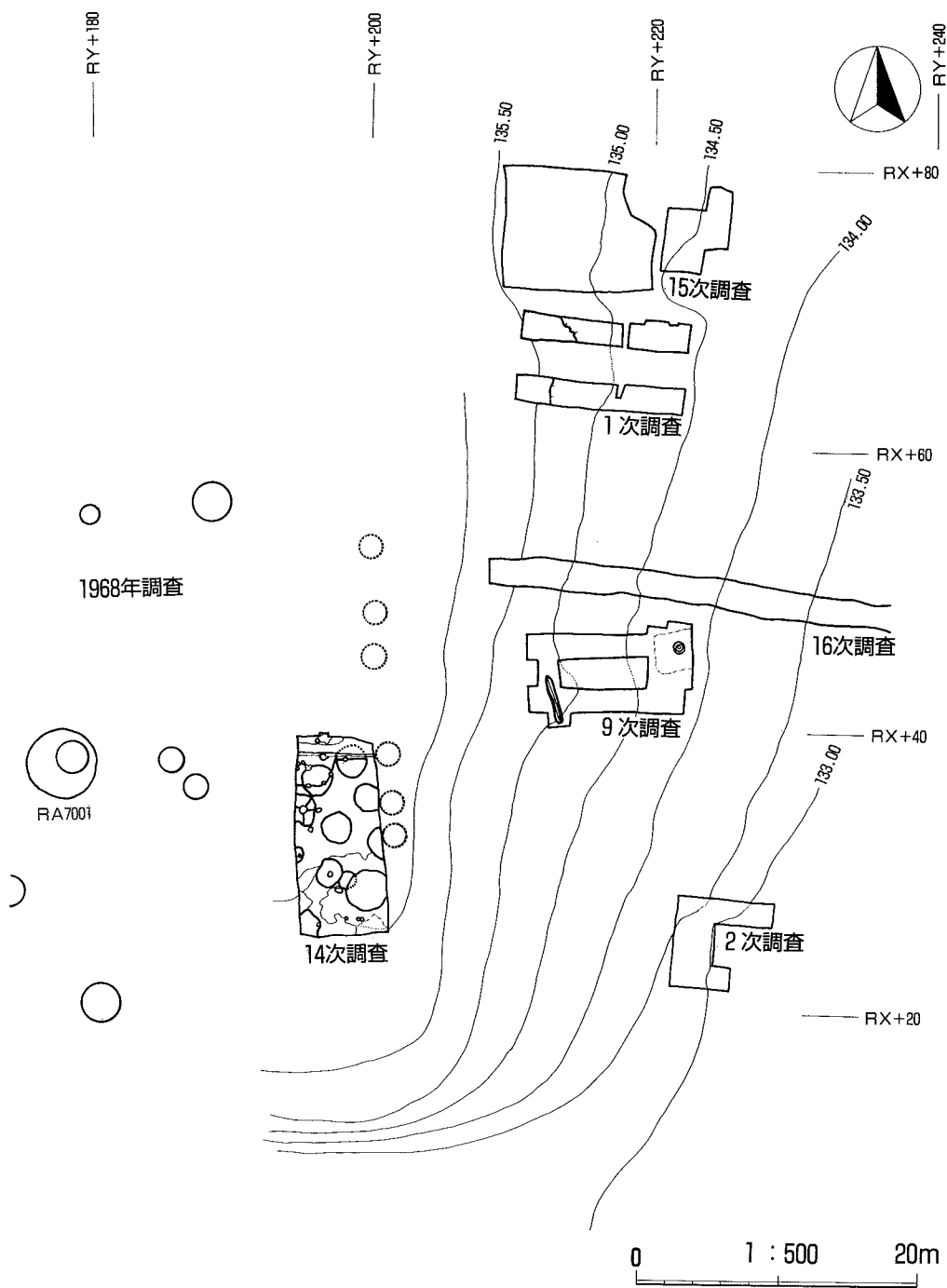
15次調査区は1次調査区の北に隣接する宅地で、遺構は確認されなかったが、遺物は縄文時代中期前半を中心とする遺物包含層が形成されていた。

16次調査区は9次調査区の北側市道の改良工事にとまなうもので、幅2 m長さ56 mのトレンチ調査となった。その結果不整形な土壇3基と縄文時代中期の遺物包含層が確認された。東側ほど遺物は少なくなっている。

4次調査区は遺跡南縁の段丘崖の下に位置し、低湿地にみられるグライ化層が確認された。6・22次調査では遺構遺物とも確認されなかった。

遺跡南西部

遺跡南西部の調査は大新町遺跡第24次調査として1987年に実施した。大新町遺跡の東端はゆるやかに東に傾斜しながら、黒色土が深くなって湧水するようになる。地表ではほとんど確認できない埋没谷で、これが大新町と小屋塚遺跡を分かちものである。24次調査はこの埋没谷でおこなったもので、5×12 mの調査区はやはり黒色土が深く、地表から0.6 mほどで湧水した。このため調査は黒色土Ⅱ層のうちⅡ c層上面までおこなった。Ⅱ c層は北東から



第3図 小屋塚遺跡南東部の遺構

南西にかけてゆるやかに傾斜し、また地山の黄褐色土も北東隅が一番高く確認された。このことから24次調査区は埋没谷の東端に近い位置と考えられ、したがって小屋塚遺跡の西端にあたるものととらえられた。

調査では遺構は検出されなかったが、黒色土のⅡb～c層から縄文後期前半の多量の遺物が包含されていた。特に湧水位下のⅡc層から完形に近い土器も多くみられた。この後期の包含層はさらに西に広がり、大新町遺跡の東側にも形成されている。大新町では後期の遺構は、竪穴住居跡1棟、径1.2m前後の断面がすり鉢形を呈する土壇30基ほどが検出されている。小屋塚遺跡側での遺構のあり方はまだ不明であるが、大新町側からの遺物の投棄または両遺跡からの投棄が想定される。なお第24次調査は『大館遺跡群—昭和62年度発掘調査概報』に報告している。

次に遺構の検出された9・14・16次調査について記述をすすめる。

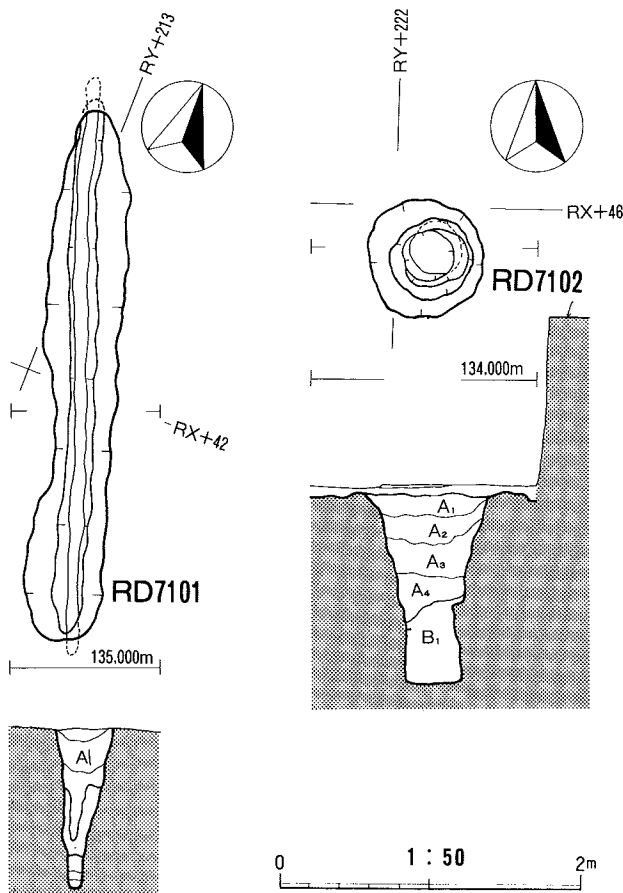
RD7101土壇（第4図）

検出遺構

第9次調査区の西端で検出されたいわゆるTピットである。埋土上面は過去の宅地造成時に削平されている。地山の分火山灰層を掘り込む。長軸方向N18°W、長軸3.5m、短軸0.35～0.5m、深さ1.05mで、底面から0.25mのところまでやや傾斜をもつ直壁であるが、その下は完全な直壁となる。

埋土はA層が黒褐色と黒色土の混合土、B層が黄褐色土主体、C層が黒色土で、全体にしまりがなく、軟らかい。

遺物は第13図3・4が出土している。3は口唇部に指頭圧痕が連続施文され、口縁部以下に不鮮明に単節縄文が施される。4は口縁部以下に1個の結節をもつ綾線文が縦回転される。



第4図 RD7101・7102土壇

RD7102土壇（第4図）

RD7101土壇の9.5m東に位置し、古代の竪穴住居跡RA8713に上面を削平され、RD7101検出面より1.4m低い。地形が東に傾斜しているため、検出面は地山漸移層中である。平面形はほぼ円形を呈し、中段に3段ほどの不整な段が認められた。底面はほぼ平坦であるが、底面の施設は湧水のため確認できなかった。

規模は上面で径0.8m、底面で径0.35m、検出面からの深さ1.25m、現地表からの深さ2.45mである。埋土は最下層が粘質化した暗褐色土を塊状に含む褐色土、上層は黒褐色土と黄褐色土の混合土である。遺物は第15図15の片面

調整の削器がみられた。

RA7101 竪穴住居跡 (第5・6・7図)

第14次調査区北西隅に位置し、全体の南東部の検出にとどまった。検出は遺物包含層Ⅳ層 検出遺構
下の地山漸移層上でおこなったが、耕作土Ⅰ層下のⅣ層を掘り込むことが確認されている。
RD7121・7122の上面を切る。埋土は大きく2層の分かれ、A層は黒褐色土、B層は黒～黒
褐色土で、床面近くに炭化物や焼土が多く混入されている。

平面形は南壁がやや直線的で、東壁がゆるやかな弧を描く。規模は不明であるが、深さは
Ⅰ層下から0.5m、漸移層から0.2mである。壁下に幅0.2m、深さ0.15m前後の周溝がめぐり、
ところどころに浅い柱穴状のくぼみがみられる。主柱穴は4'で、径0.5m、深さ0.77m、断
面で柱痕跡が確認される。1'～3'は径0.2m、深さ0.1m前後の小ピットである。炉は確認
されていないが、床面が3ヵ所焼けて赤変し、埋設土器や柱穴4'の上面にかぶさっている。
また調査区北端では土器を正位に埋設している。

出土遺物は第7図1が埋設土器で、体部下半が欠失している。4個の波頂をもつキャリパー 出土遺物
形深鉢の波状口縁部で、隆線貼付により未発達渦巻文を展開させる。大木8a式の特徴を残
す8b式の古段階に位置付けられる。このほか中期前葉の土器も混入して出土している。

石器では2が筥状石器で、基部をやや尖頭状に突出させ、側縁を入念に調整剥離している。
3～6は削器である。3は直線の1側縁を、4は腹背異なる側縁を両面調整したもの、5は
腹面側を連続する剥離で調整したもの、6は1側縁の両面に非連続で不整の剥離を施したも
のである。図示したもの以外に使用痕ある剥片14点、敲石破片2点、砥石破片2点、フレイ
クがある。

RD7110 土坑 (第5・6・8図)

調査区南東部に位置するフラスコ形土坑である。遺物包含層Ⅳ層を掘り込むが、遺構検出 検出遺構
は漸移層上面でおこなった。RD7114に切られる。埋土は自然堆積で、5層に大別される。
A層は埋土上部を構成する黒褐色～褐色土層で、B層は埋土中部を埋める黒褐色土主体の層、
C層は壁の崩落によるもので凹レンズ状に堆積する褐色～黄褐色土、D・E層は壁崩壊前の
中央部が盛り上がる片凸レンズの埋土であるが、D層は黒色土、E層は黄褐色土主体で上面
が平坦になっていることから人為的に地均しされた可能性もある。

平面形は円形で、規模は上端径2.9～3.2m、中端径2.4～2.5m、下端径2.9～3.0m、検出
面からの中端までの深さ1.2m前後、底面までの深さ2.2mをはかる。上端に比し下端がわず
かに南西に偏している。底面はほぼ平坦である。

出土遺物は、A層から第8図1の楕円に区画される大木8b式のキャリパー形口縁部、B 出土遺物
層から3の隆沈線施文の大木8a式のキャリパー形口縁部、C層から2の口縁部に未発達
渦巻文を展開させる大木8b式の浅鉢が出土している。石器では5の削器がA層から、4の
削器、6・7の敲打磨石がC層から出土している。6は厚みのある円礫を、7は扁平な礫を
素材にしている。このほか使用痕ある剥片11点、敲石破片2点、フレイクがある。

RD7111土坑（第5・6・8図）

検出遺構

調査区南西隅に位置するフラスコ形土坑で、全体の1/4程度を検出した。遺物包含層Ⅳ層を掘り込み、RD7112を切る。埋土は自然堆積で、4層に大別される。A層は埋土上部の褐色土主体、B層は埋土中部を埋める黒褐色土主体、C層は黒色土で凹レンズ状の堆積、D層は黄褐色土主体の片凸レンズ状の堆積土である。

東壁に径0.2m、深さ0.25mの小ピットがみられるが、この土坑にともなうものかはっきりしなかった。全体規模は不明であるが、検出面からの中端までの深さ0.7m前後、底面までの深さ1.25～1.15mをはかる。底面はほぼ平坦であるが、北側がやや低くなっている。

出土遺物

出土遺物は、B層から第8図8の両面異なる側縁を調整した削器、9のバチ形の篋状石器が出土している。土器は縄文中期前葉の破片数点がみられた。

RD7112土坑（第5・6図）

検出遺構

調査区南西部に位置するフラスコ形土坑で、西半はさらに調査区外にのびる。遺物包含層Ⅳ層を掘り込み、RD7111に切られる。埋土は自然堆積で、5層に大別される。A層は埋土上部の黒色土、B層は埋土中部の褐色土、C・D層は壁の崩落によるもので凹レンズ状に堆積する黒色土をはさむ黄褐色土、E層は壁崩壊前の中央部が盛り上がる片凸レンズ状に堆積する黄褐色土である。

規模は、上端径1.65m、中端径1.55m、下端径1.95m、漸移層上面の検出面がほぼ中端にあたり、底面までの深さ1.4mをはかる。上端に比し下端が北に偏している。底面はほぼ平坦である。

出土遺物

出土遺物は中期の土器片数点が見られた。

RD7113土坑（第5・6図）

検出遺構

調査区南半部に位置するフラスコ形土坑である。RD7114を切る。埋土は6層に大別されるが、C～E層は南方向からの人為堆積で、A・B層は人為もしくは自然堆積である。A層は褐色土主体、B～E層は黄褐色土主体で、層相はあまりかわらないが、層の堆積状況から層をわけた。F層は底面中央のピット埋土で黒色土である。

平面形は不整な円形で、南側の崩落が著しい。底面は北東～南西方向に長い楕円形を呈する。規模は上端径1.75～2.2m、中端径1.4～1.8m、下端径2.05～2.4m、検出面からの中端までの深さ0.6m前後、底面までの深さ1.6mをはかる。底面中央に径0.4m、深さ0.15mの小ピットがみられる。出土遺物は中期の土器片数点が見られた。

出土遺物

RD7114土坑（第5・6・9図）

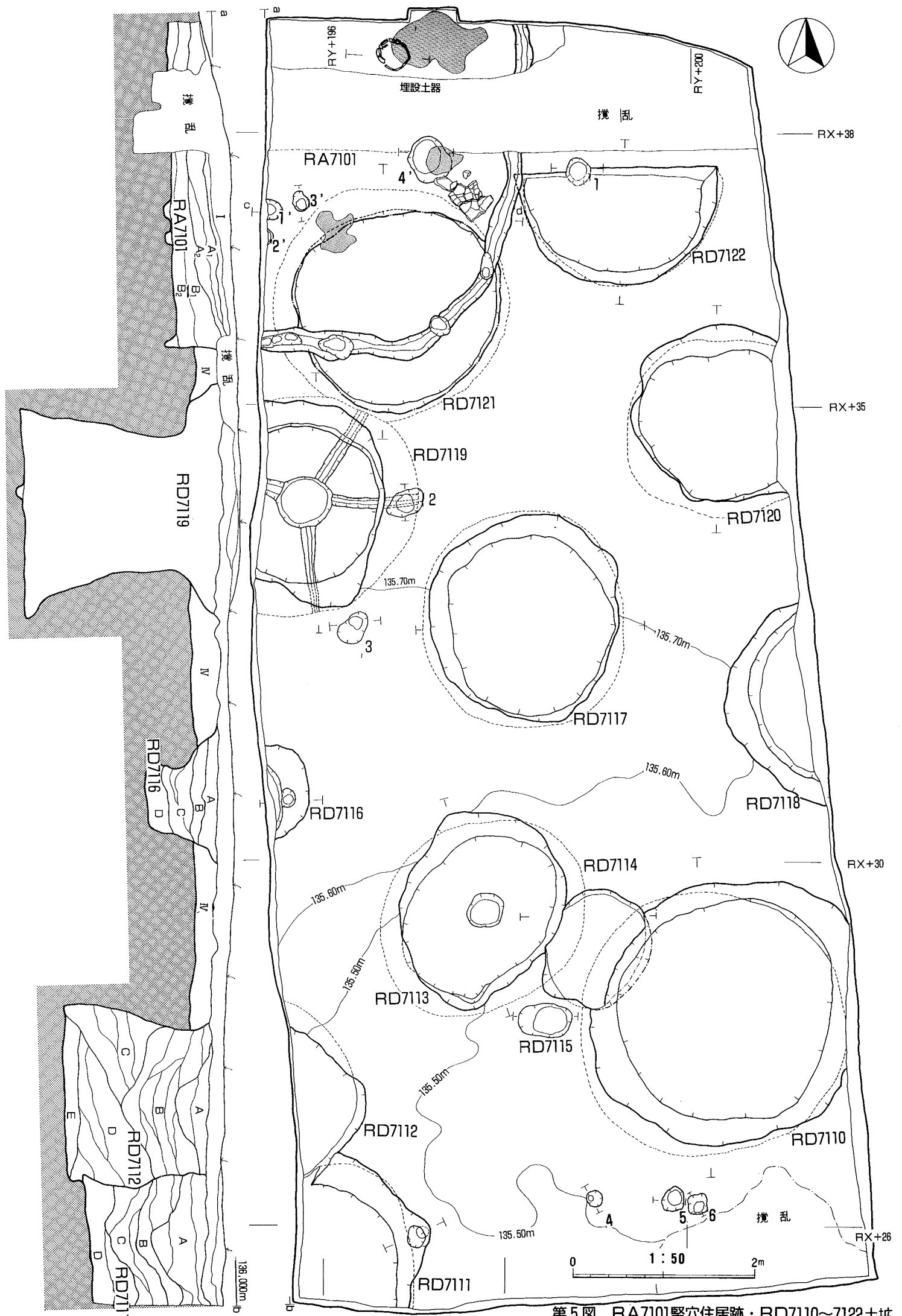
検出遺構

調査区南半部に位置するフラスコ形土坑である。RD7110を切り、7113に切られる。埋土は人為堆積とみられ、全体に暗褐色土で、下層は黒褐色土と暗褐色土の混合土である。

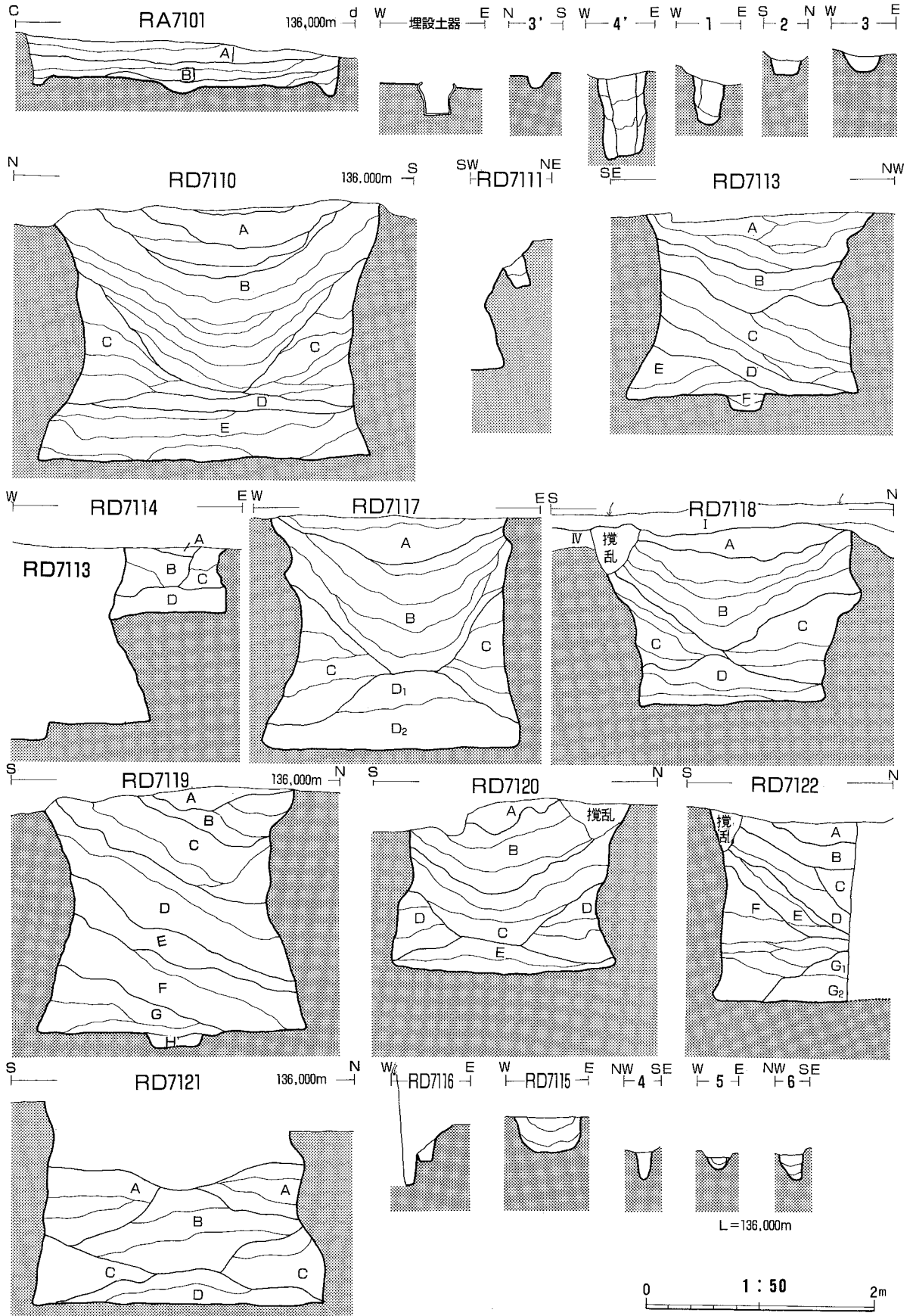
平面形は円形で、規模は上端径1.25m、下端径1.25m、検出面から底面までの深さ0.55mをはかる。底面はほぼ平坦である。

出土遺物

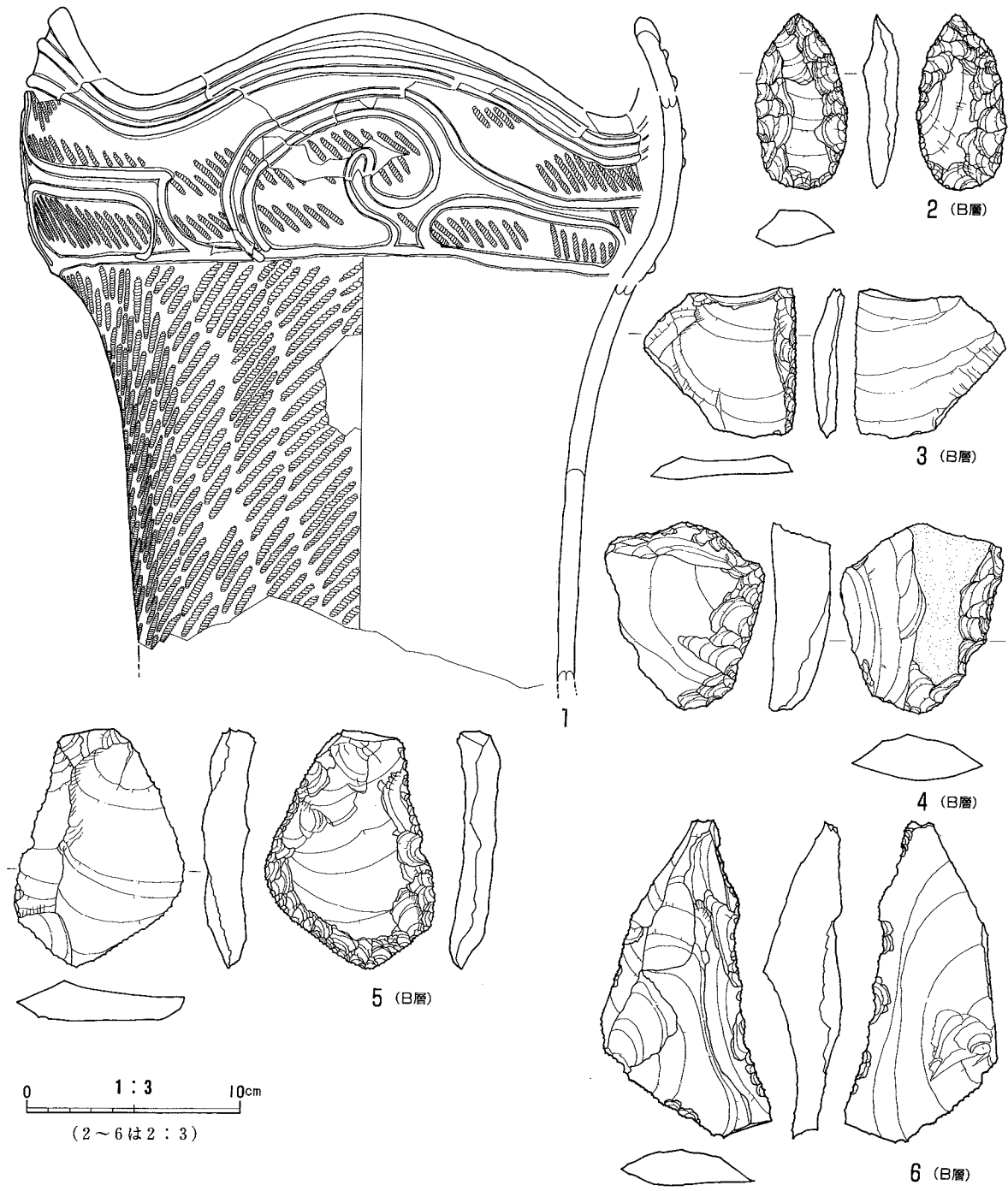
出土遺物は第9図1の削器がA層から出土している。



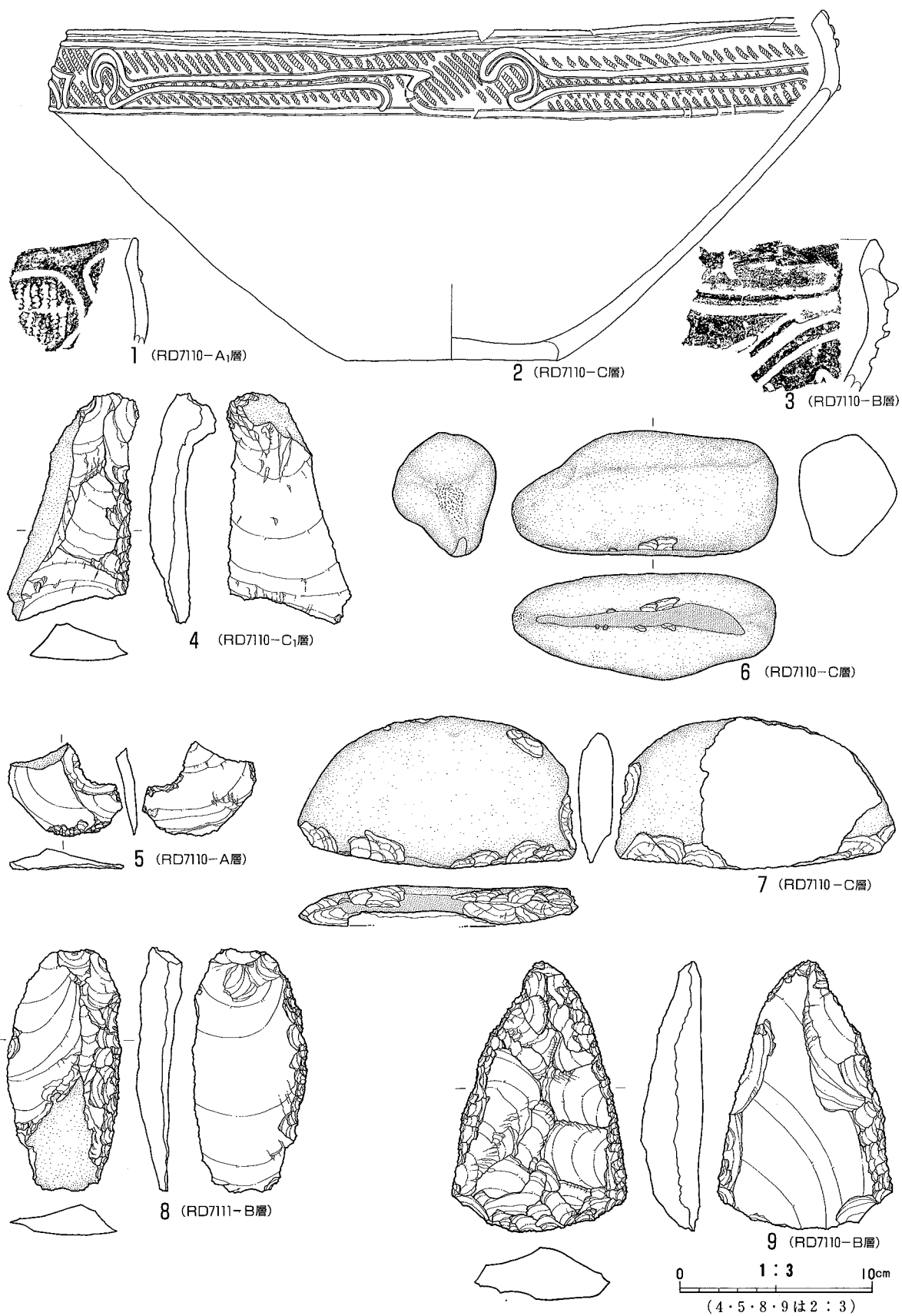
第5図 RA7101竪穴住居跡・RD7110~7122土坑



第6圖 RA7101竪穴住居跡・RD7110~7122土坑土層断面



第7図 RA7101竪穴住居跡出土遺物



第8図 RD7110・7111土坑出土遺物

RD7115土坑（第5・6図）

調査区南半部に位置する小土坑で、重複はみられない。埋土は黒色土～黒褐色土主体である。 **検出遺構**

平面形は楕円形で、規模は上端長軸0.6m、短軸0.35m、下端径0.35m、検出面から底面までの深さ0.3mをはかる。底面はほぼ平坦である。出土遺物は使用痕ある剥片2点がみられた。 **出土遺物**

RD7116土坑（第5・6図）

調査区西端に位置する土坑で、半分以上がさらに調査区外にのびる。遺物包含層Ⅳ層を掘り込むが、遺構検出は漸移層上面でおこなった。埋土は4層に大別される。A層は黄褐色土主体、B層は黒褐色土主体、C層は黒～黒褐色土主体、D層は黒褐色土主体の層で、下層ほど堅くしまっている。 **検出遺構**

平面形は円形と思われ、検出範囲内での規模は上端径1.5m、中端径0.7m、下端径0.6m、検出面から底面までの深さ0.55mをはかる。土層断面では上端が大きく開いていることが確認される。東壁に深さ0.35mの柱穴があるが、本土坑にともなうものではない。出土遺物は中期前葉の土器片、使用痕ある剥片1点がみられた。 **出土遺物**

RD7117土坑（第5・6図）

調査区中央部に位置するフラスコ形土坑である。遺物包含層Ⅳ層を掘り込むが、遺構検出は漸移層上面でおこなった。他の遺構との重複はない。埋土は自然堆積で、4層に大別される。A層は埋土上部を構成する褐色土主体の層で、B層は埋土中部を埋める黒褐色土主体、C層は壁の崩落によるもので凹レンズ状に堆積する黄褐色土主体、D層は壁崩壊前の中央部が盛り上がる片凸レンズの埋土で、黄褐色土である。 **検出遺構**

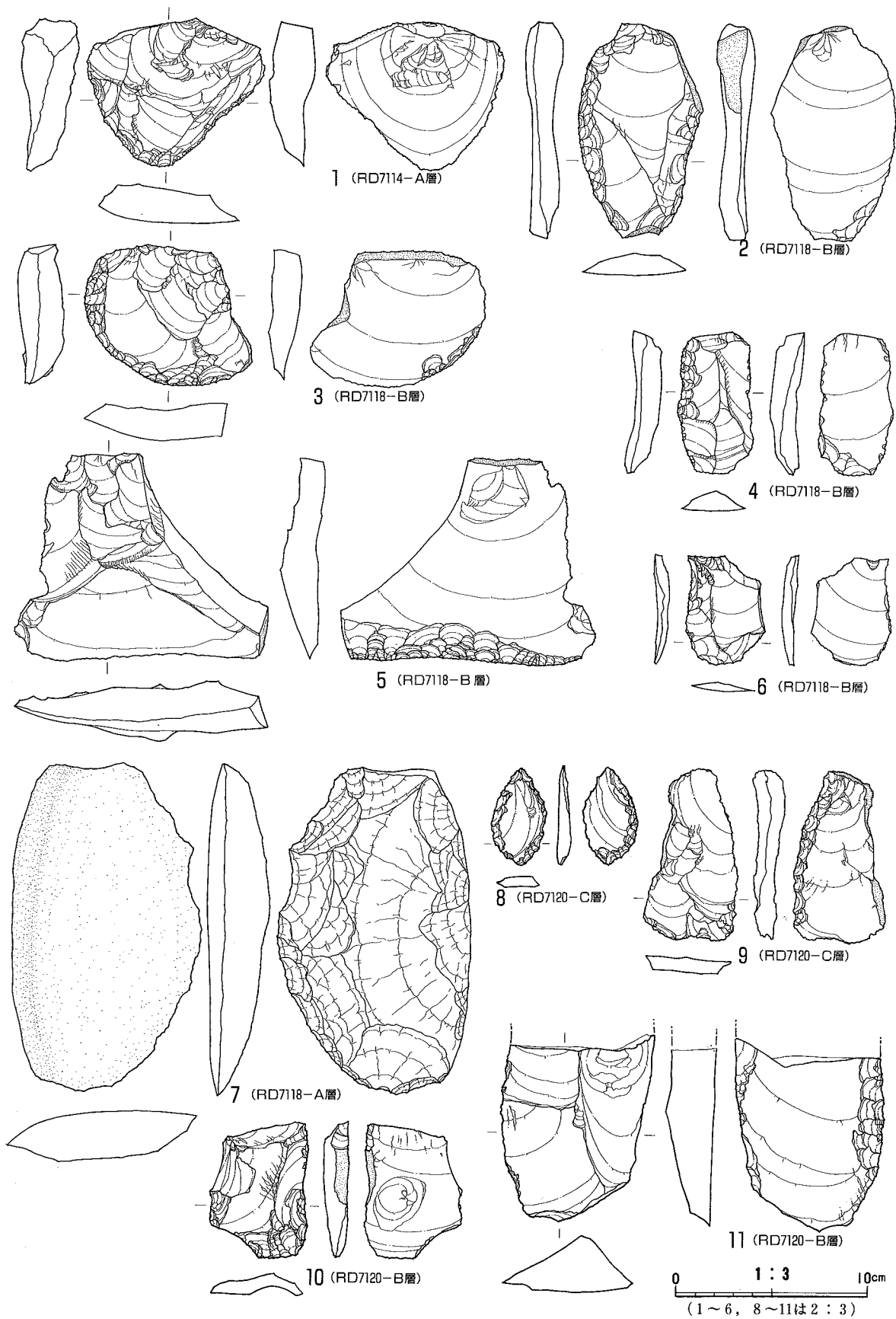
平面形は円形で、規模は上端径2.1～2.5m、中端径1.7～1.9m、下端径2.2～2.4m、検出面からの中端までの深さ0.8m前後、底面までの深さ2.05mをはかる。南壁が直壁に近く、底面はほぼ平坦である。遺物は中期の土器片数点が出土している。 **出土遺物**

RD7118土坑（第5・6・9図）

調査区東端に位置するフラスコ形土坑で、全体の西1/3程度を検出した。遺物包含層Ⅳ層を掘り込むが、遺構検出は漸移層上面でおこなった。他の遺構との重複はない。埋土は自然堆積で、4層に大別される。A層は埋土上部を構成する褐色土主体の層で、B層は埋土中部を埋める黒褐色土主体、C層は壁の崩落によるもので凹レンズ状に堆積する黄褐色土主体、D層は壁崩壊前の中央部が盛り上がる片凸レンズの埋土で、D₁層が黒色土、D₂層が黄褐色土である。 **検出遺構**

平面形は円形と推定され、規模は上端径2.25m、中端径1.85m、下端径1.6m、検出面からの中端までの深さ0.5m前後、底面までの深さ1.35mをはかる。壁上半はやや外傾し、下半が直壁に近く、フラスコ形となっていないが、埋土堆積状況はフラスコ形と共通し、上半が大きく崩壊したものである。底面はほぼ平坦である。

出土遺物は土器では中期の土器片数点が、石器では第9図2～6の片面調整の削器、7の **出土遺物**



第9図 RD7114~7120土坑出土遺物

片面自然面で腹面の周縁を調整する礫器である。このほか使用痕ある剥片4点、石皿破片1点がみられた。

RD7119土坑（第5・6図）

調査区西端に位置するフラスコ形土坑で、全体の西2/3程度を検出した。遺物包含層Ⅳ層を掘り込むが、遺構検出は漸移層上面でおこなった。他の遺構との重複はない。埋土は人為堆積で、8層に大別される。A層は黒褐色土、B層は褐色土、C層は黒褐色土～褐色土、D層は黄褐色土、E層は黒褐色土、F層は黄褐色土、G層は黄褐色土～暗褐色土をそれぞれ主体にする。H層は底面のピットの埋土である。

検出遺構

平面形は円形と推定され、規模は上端径2.25m、中端径1.85m、下端径1.6m、検出面からの中端までの深さ0.5m前後、底面までの深さ1.35mをはかる。壁上半はやや外傾し、下半が直壁に近く、フラスコ形となっていないが、埋土堆積状況はフラスコ形と共通し、上半が大きく崩壊したものである。底面中央に径0.6m、深さ0.1mのピットがあり、放射状に4条の溝が掘られる。溝は幅0.1～0.2m、深さ0.05mほどである。出土遺物は中期前葉の土器片が各層にわたってみられた。

出土遺物

RD7120土坑（第5・6・9図）

調査区東端に位置するフラスコ形土坑で、全体の西2/3程度を検出した。遺物包含層Ⅳ層を掘り込むが、遺構検出は漸移層上面でおこなった。他の遺構との重複はない。埋土は自然堆積で、5層に大別される。A層は埋土上部を構成する褐色土で、B・C層は埋土中部を埋める黒～黒褐色土で、D層は壁の崩落によるもので凹レンズ状に堆積する黄褐色土、E層は壁崩壊前の中央部が盛り上がる片凸レンズ状に堆積する黒色土である。

検出遺構

平面形は円形と推定され、規模は上端径1.9m、中端径1.55～1.75m、下端径2.0m、検出面からの中端までの深さ0.65～0.9m前後、底面までの深さ1.55mをはかる。上端に比し、下端が南にかたよっている。底面はほぼ平坦である。

出土遺物は中期の土器片数点、第9図8～11の削器があり、8は両面調整、9～11は片面調整である。このほか使用痕ある剥片2点が出土している。

出土遺物

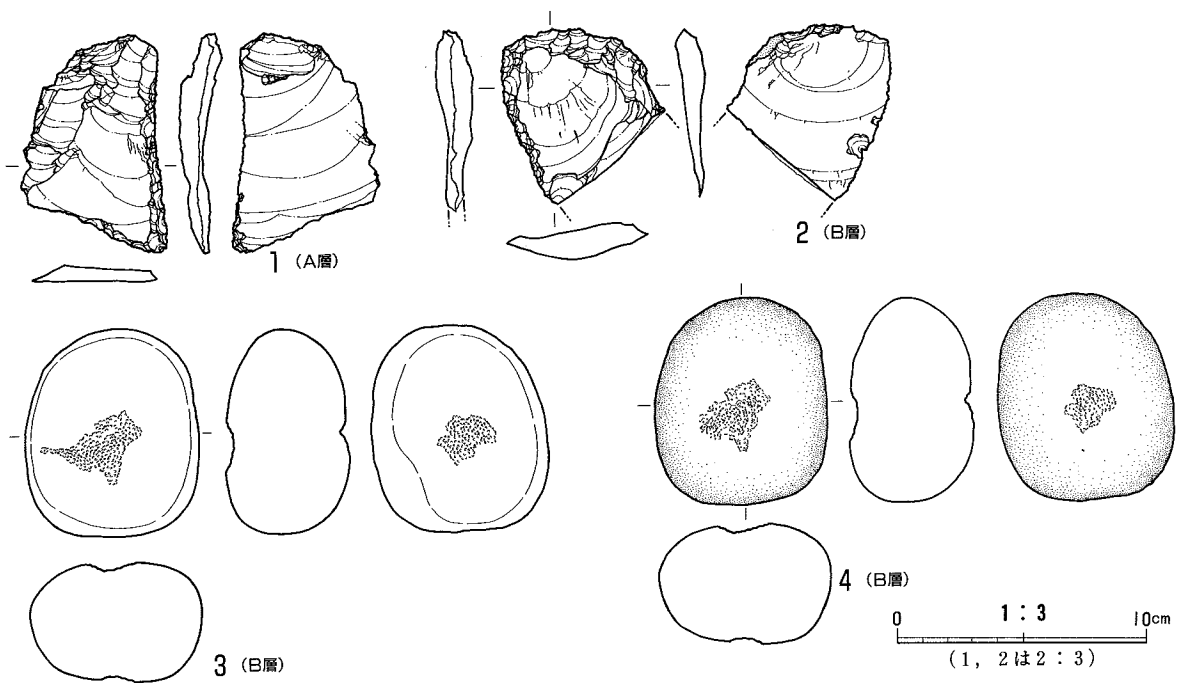
RD7121土坑（第5・6図）

調査区北西部に位置するフラスコ形土坑である。遺物包含層Ⅳ層を掘り込むが、遺構検出は漸移層上面でおこなった。RA7101に上部を切られる。土層断面の観察は中途からであるが、埋土は自然堆積で、4層に大別される。A・C層は壁の崩落によるもので凹レンズ状に堆積する黄褐色土、B・D層は壁崩壊前の中央部が盛り上がる凸レンズ状堆積で、B層は黒色土と黄褐色土の互層、D層は黄褐色土主体の埋土で、壁が2回にわかれて崩壊したことがわかる。

検出遺構

平面形はほぼ円形で、規模は上端径2.2～2.3m、中端径2.2m、下端径2.6m、検出面からの中端までの深さ0.3前後、底面までの深さ1.7mをはかる。底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

出土遺物



第10図 RD7122土坑出土遺物

RD7122土坑 (第5・6・10図)

検出遺構

調査区北部に位置するフラスコ形土坑である。遺物包含層IV層を掘り込むが、遺構検出は漸移層上面でおこなった。RA7101とピット1に上部を切られ、また北半を水道工事による攪乱でこわされている。埋土は自然堆積で、7層に大別される。A層は褐色土、B層は黒色土、C層は黄褐色土、D層は黒褐色土、E層は黄褐色土で、埋土上～中部を構成している。F層は壁の崩落によるもので凹レンズ状に堆積する黒褐色土～黄褐色土、G層は壁崩壊前の中央部が盛り上がる片凸レンズの埋土で、G1層が黒色土、G2層が黄褐色土である。

平面形はほぼ円形で、規模は上端径2.25m、中端径1.95m、下端径2.15m、検出面からの中端までの深さ0.65前後、底面までの深さ1.7mをはかる。底面はほぼ平坦である。

出土遺物

出土遺物は第10図1・2の片面調整の削器、3・4の凹石がみられる。3は全面の磨石にもなっている。このほか使用痕ある剝片2点が出土している。

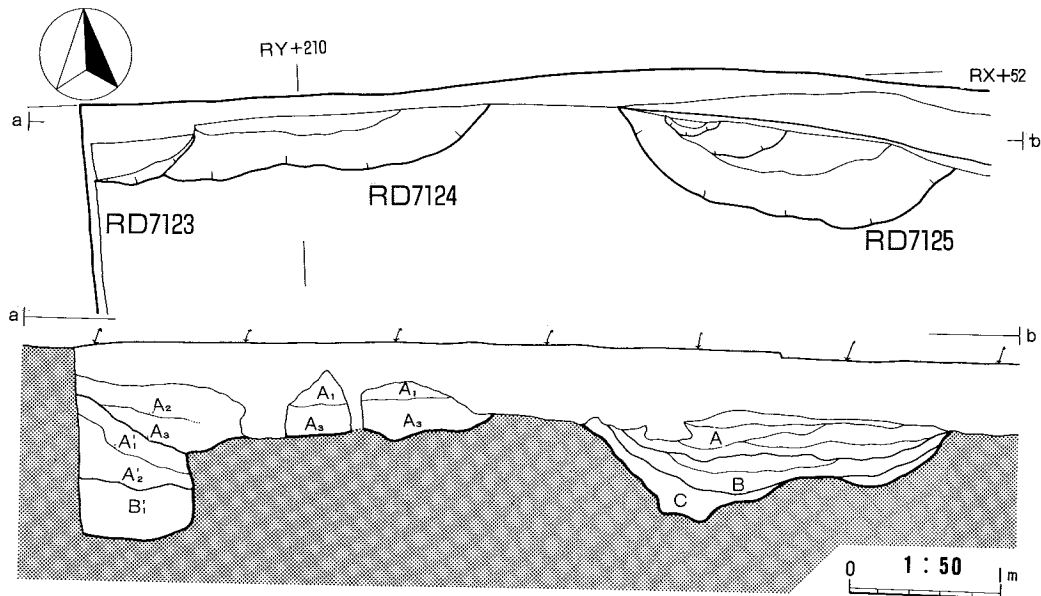
ピット群

第14次調査区からピット6口が検出された。規模は1が径0.25m深さ0.45m、2が径0.27～0.45m深さ0.13m、3が径0.23～0.4m深さ0.13m、4が径0.18m深さ0.25m、5が径0.25m深さ0.15m、6が径0.2m深さ0.23mをはかる。埋土は黒色土～黒褐色土である。

RD7123土坑 (第11図)

検出遺構

第16次調査区北西部に位置するフラスコ形土坑で、大半は調査区外にのびる。RD7124に



第11図 RD7123～7125土坑

上部を切られる。埋土は自然堆積で、A層は褐色土、B層は黒褐色土である。

平面形は円形と想定され、RD7124底面から底面までの深さ0.93mをはかる。底面はほぼ平坦である。出土遺物は中期の土器片数点がみられる。

出土遺物

RD7124土坑（第11図）

第16次調査区北西部に位置する舟底形の土坑で、大半は調査区外にのびる。表土直下で検

検出遺構

出され、RD7123を切る。埋土は自然堆積で、黒褐色土～暗褐色土である。平面形は円形と想定され、表土直下から底面までの深さ0.4mをはかる。底面は深さが一定していない。出土遺物はない。

出土遺物

RD7125土坑（第11図）

第16次調査区北西部に位置する不整形な土坑で、大半は調査区外にのびる。埋土は自然堆

検出遺構

積で、A層は黒褐色土～暗褐色土、B層は黄褐色土、C層は黒褐色土主体である。平面形は円形と想定され、表土直下から底面までの深さ0.4～0.7mをはかる。底面は深さが一定せず、不整である。出土遺物は中期の土器片、使用痕ある剥片2点、砥石破片1点がある。

出土遺物

遺物包含層（第12～19図）

遺物包含層は遺跡南東部の東側への緩やかな傾斜面に形成されている。1・2・16次調査

遺物包含層

でも包含層は確認されているが、その量は希薄である。9・14・16次調査でややまとまって

出土しており、それらについて述べる。包含層は14次調査で0.2m、9次調査東端で0.8mの厚さで、黒褐色土～暗褐色土である。第12～17図は9次調査出土の遺物である。第12図1は口唇部に竹管による刻み目が施され、

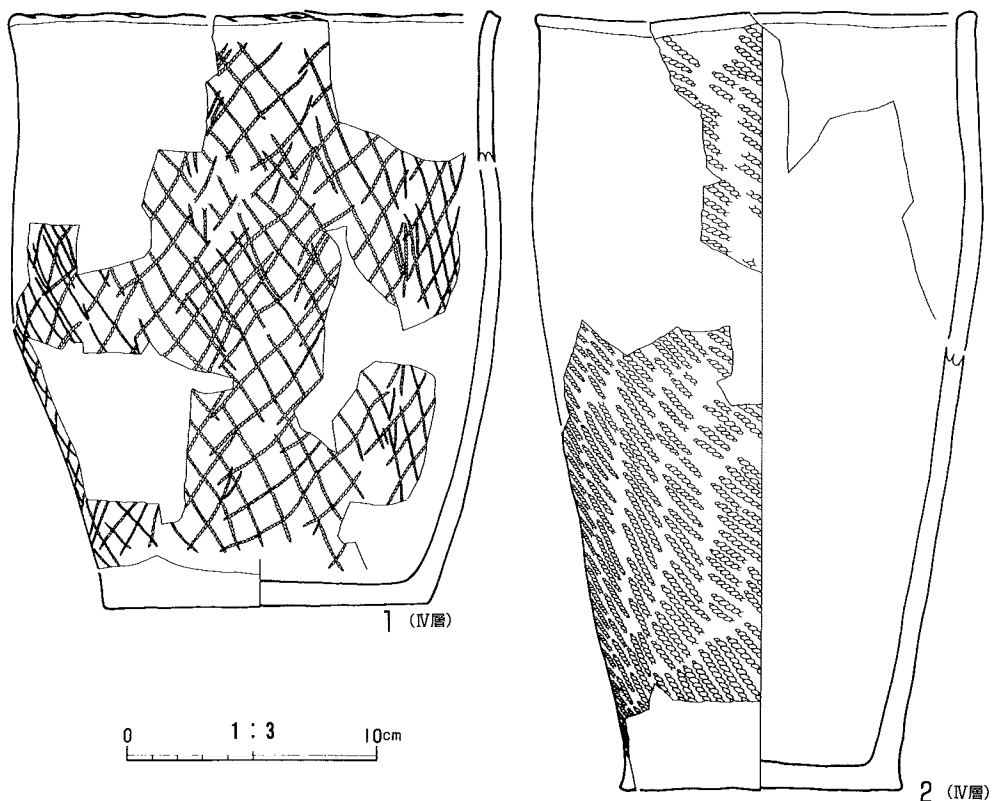
出土遺物

口縁部から体部下半まで網目状撚糸文が施される。2は口唇部がやや肥厚し、体部全面に単

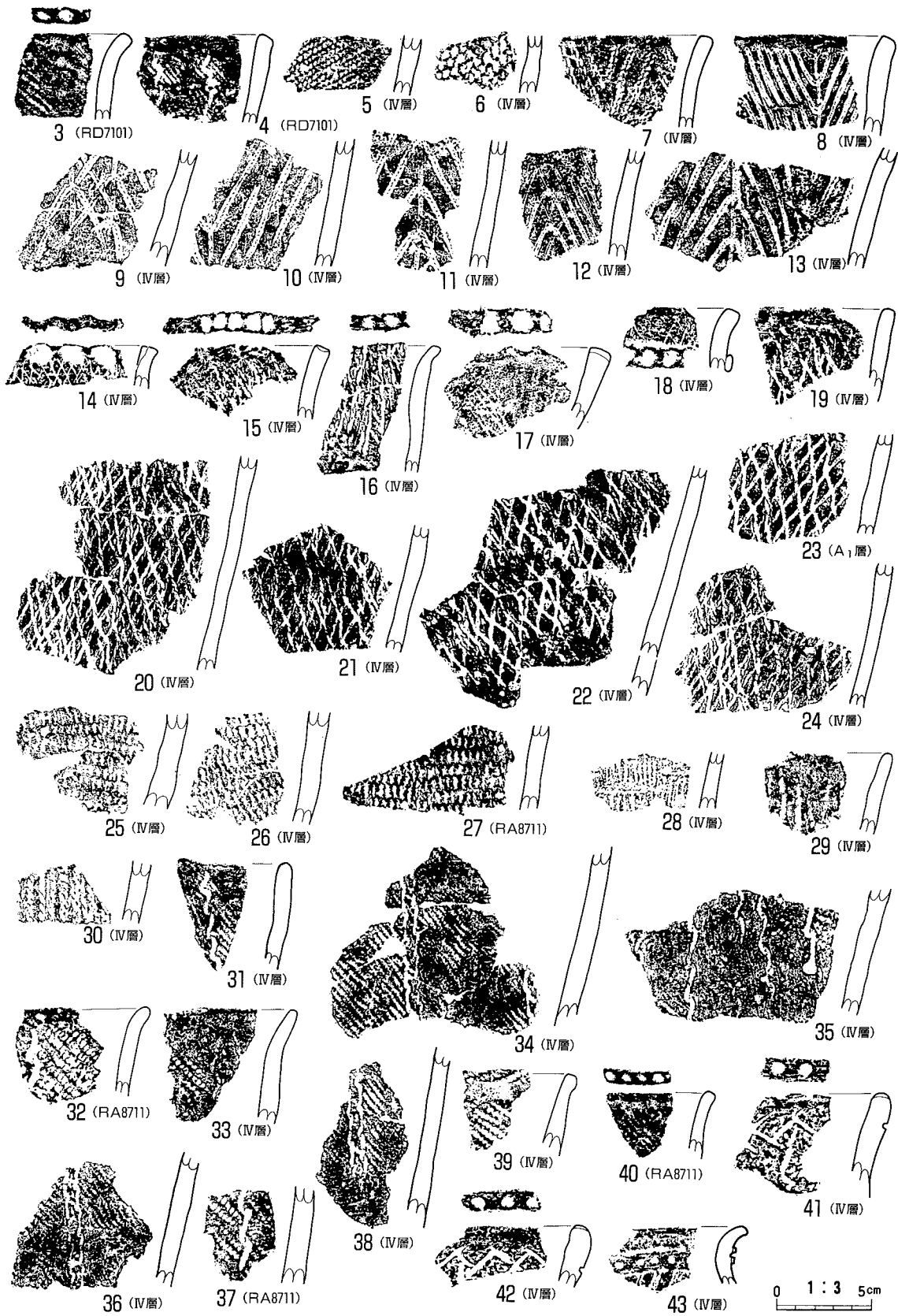
節縄文が施される。第13図3・4はRD7101土坑出土で、既述した。5・6は胎土に繊維を含む縄文施文のものである。7～13は木目状捺糸文で、7・8は口縁部から捺糸文が施される。14～24は網目状捺糸文で、14～17は口唇部に、18は頸部に貼り付けされた隆帯上に指頭圧痕が施される。25～27は多軸捺糸文、28～30は捺糸文が施文されている。31～38は2個の結節をもつ綾線文が施され、32・33は口縁部直下から綾線文が縦回転される。39・40は口縁部以下に縄文、41～43は竹管文が施文され、40～42は口唇部に指頭圧痕が施される。これらの土器は繊維を含むものを除いて、口唇部の指頭圧痕などの共通性があり、大木6式前後のものと考えられる。

第14図1～8は石鏃で、無柄凹基～平基で、8は基部調整があまりみられないものである。13は縦形の石匙、9・10・14は横形の石匙である。11・12・15～27は削器で、11・12は両面の異なる辺を調整したもの、15～24は背面に、25～27は腹面に調整剥離を施すものである。28～31は縁辺にやや部厚な剥離が施される。33・35は側縁に連続する整った部厚な刃部を有する。34は主要剥離面の打面に細かな剥離が加えられたものである。36は石核石器であるが、目的的形状かはっきりしない。37は偏平な敲打磨石、38も偏平な円礫を使用した礫器である。

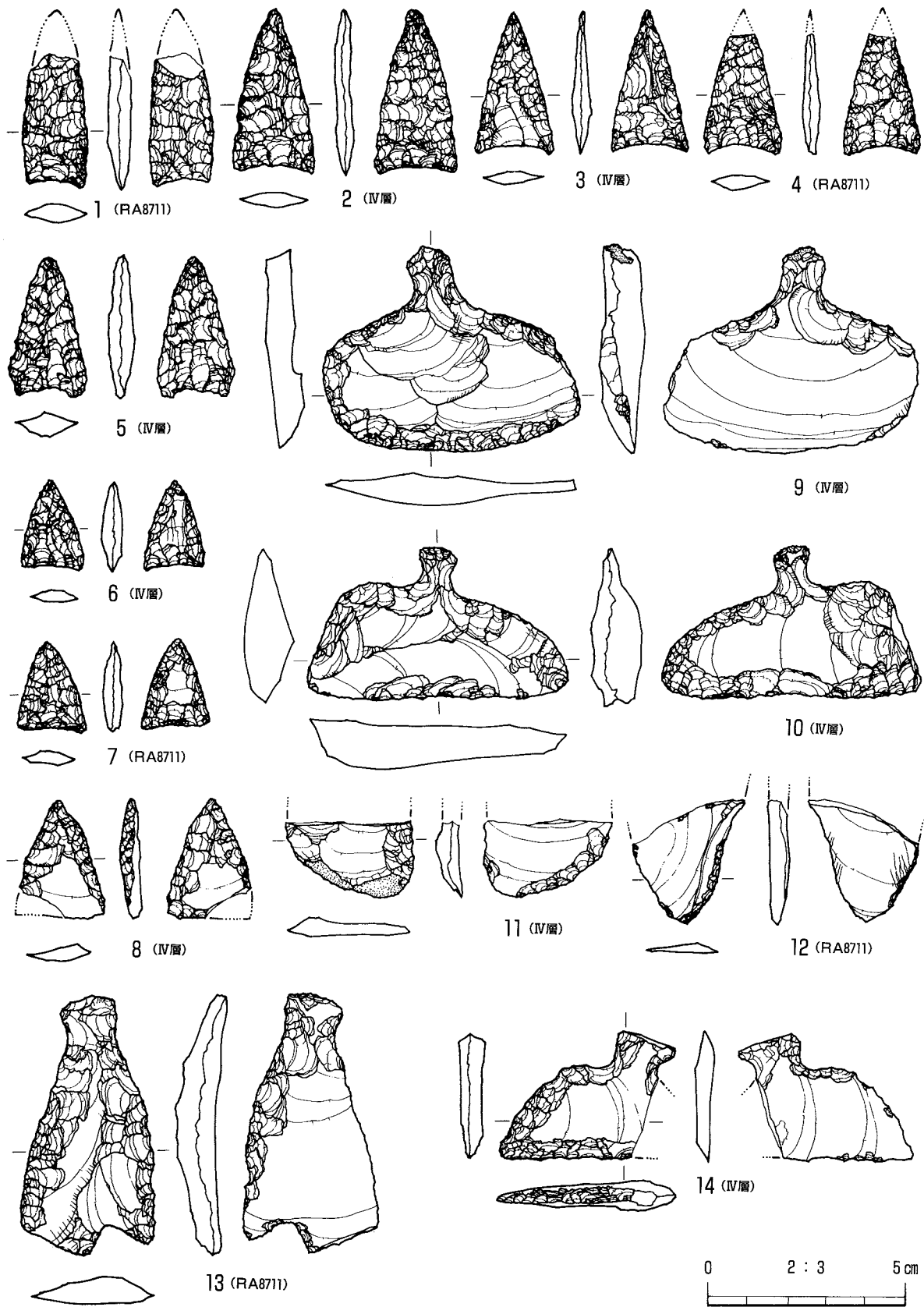
第18・19図は14次調査出土の遺物である。第18図1～18は胎土に繊維を含む縄文施文の一群で、1は内外面に縄文施文するもので、口唇部に刻み目を有する。2も内外縄文を施文する。1・2も内外面の原体が異なっている。4は内面に不鮮明な条痕文を施す。5～8は組紐縄文の一種で、9～14は節の細かい単節縄文、15・17・18は単節縄文であるが、個々の縄文原



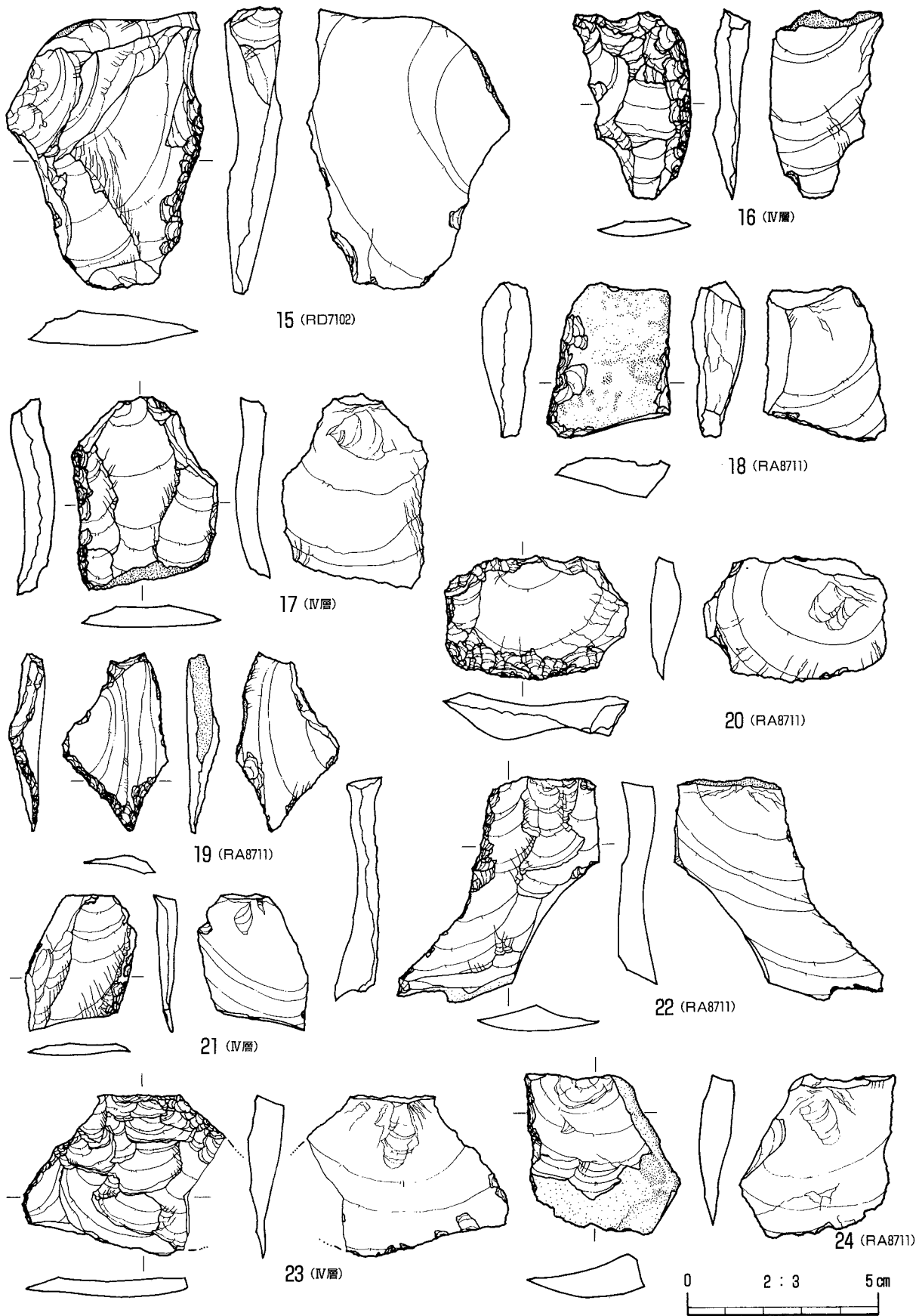
第12図 第9次調査遺物包含層出土遺物(1)



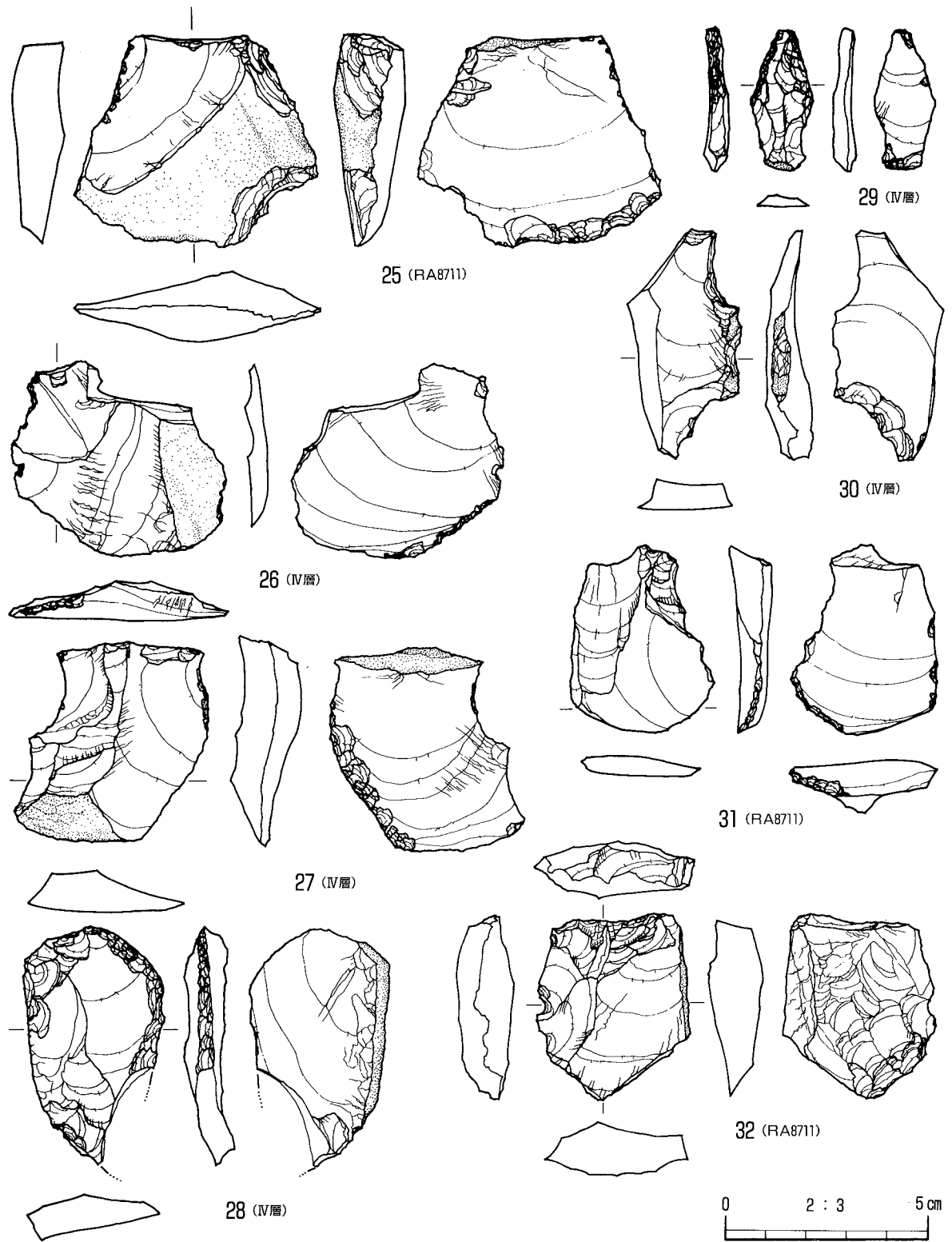
第13図 第9次調査遺物包含層出土遺物(2)



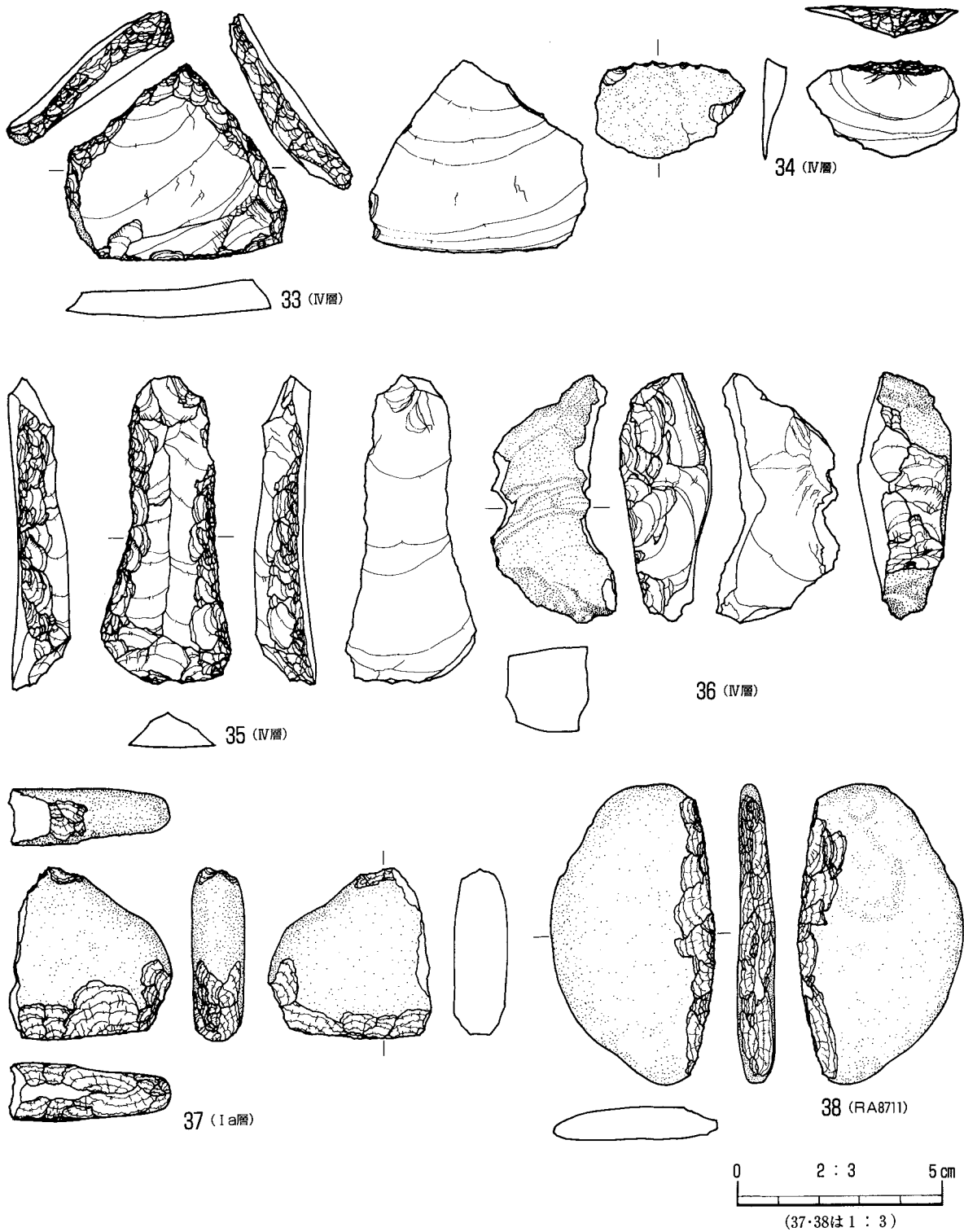
第14図 第9次調査遺物包含層出土遺物(3)



第15図 第9次調査遺物包含層出土遺物(4)



第16図 第9次調査遺物包含層出土遺物(5)



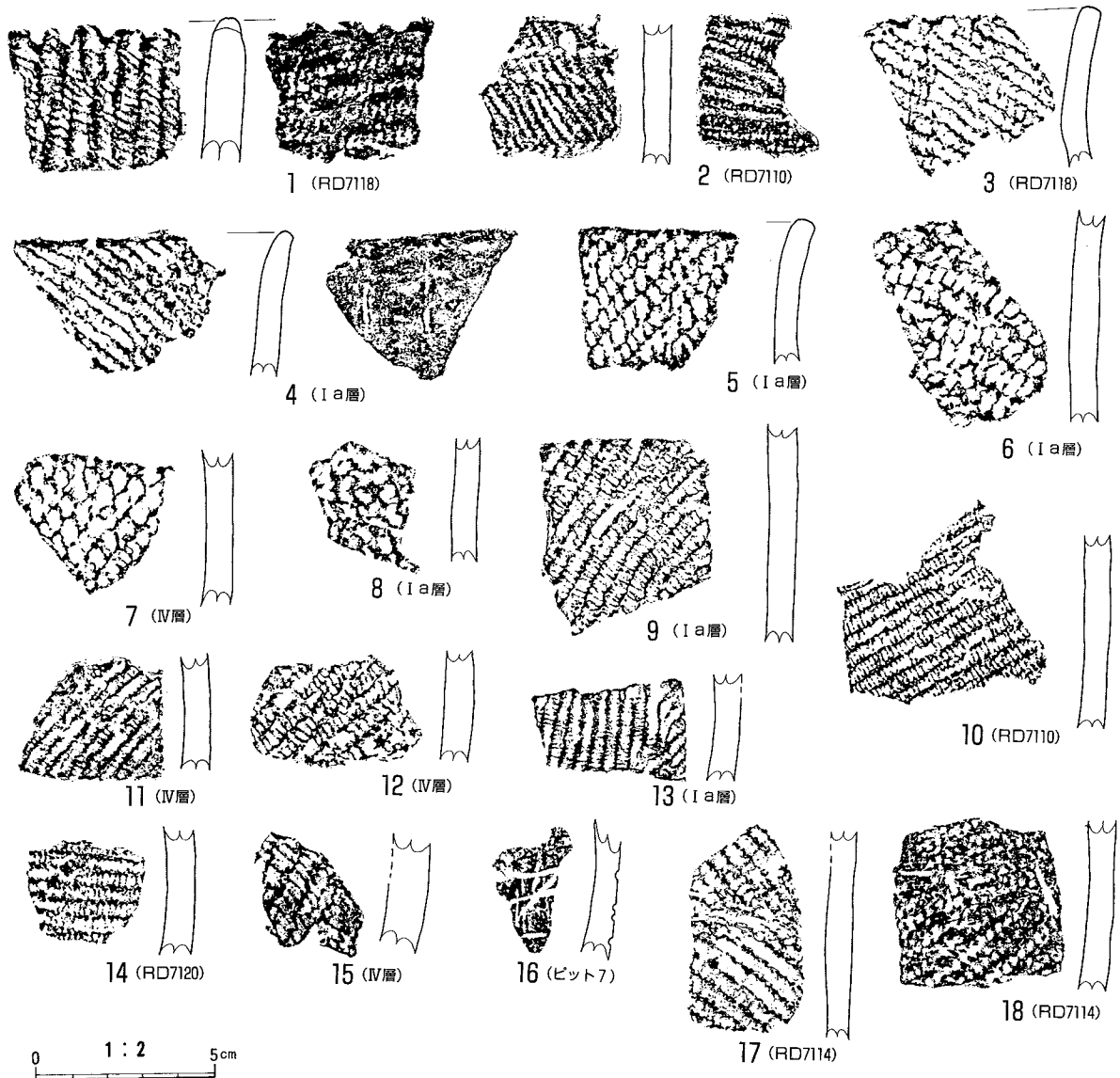
第17図 第9次調査遺物包含層出土遺物(6)

体は今後検討したい。16は条痕文である。

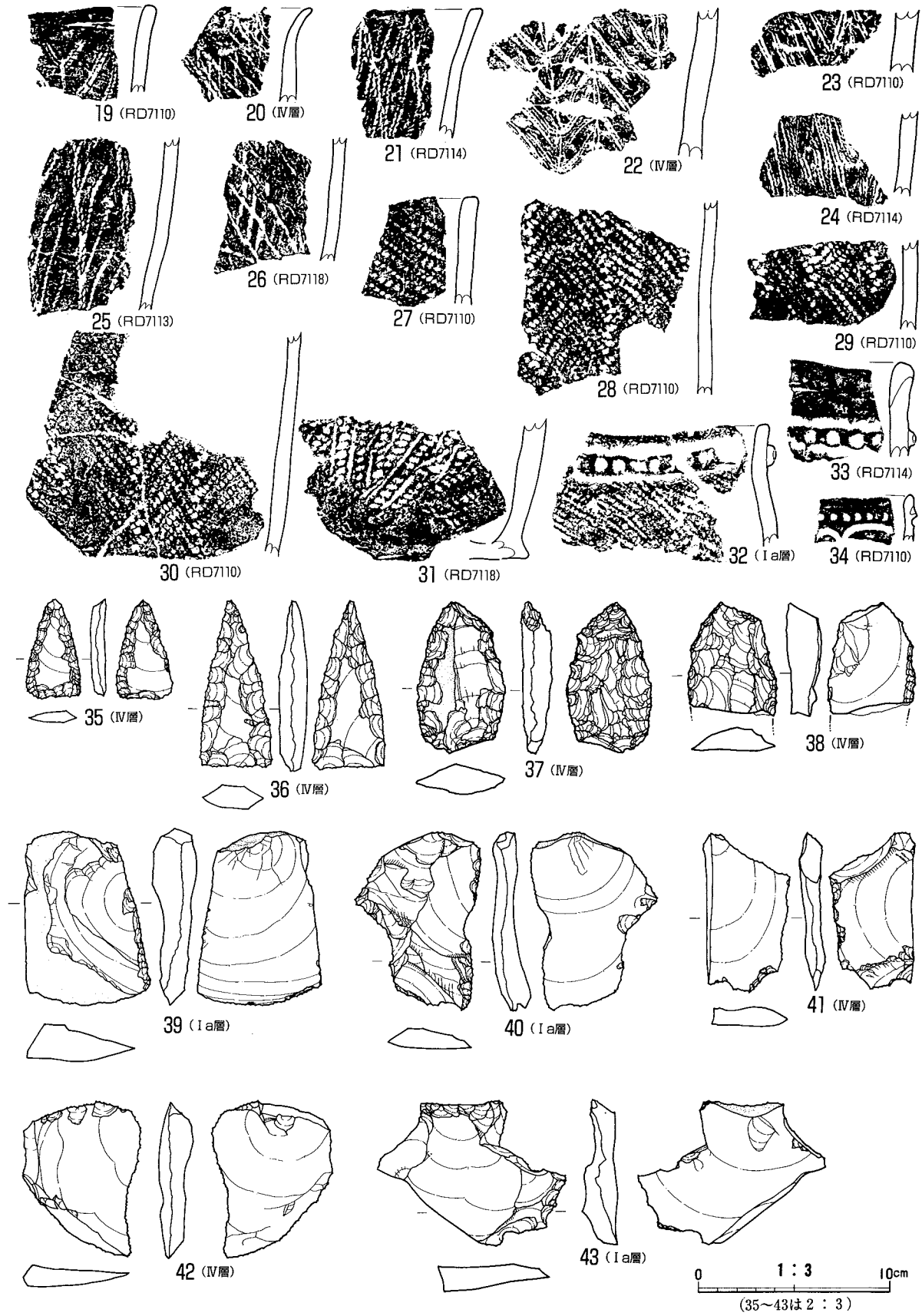
第19図19～26は木目状、網目状の捺糸文である。27～30は結節をもたない羽状縄文が施される。31は付加条縄文とみられる。32・33は口縁部～頸部に指頭圧痕をもつ隆帯が貼り付けられたものである。34は沈線と竹管による列点文が施される。

14次調査も9次調査の出土土器とほぼ同じ時期のものであるが、14次調査に繊維土器がやや多くみられる傾向にある。

第19図35・36は無柄平基の石鏃、37～43は削器である。37は両面を全周する調整が施され、38は腹面を大きく成形して、側縁に小さな調整剝離を加えたものである。39～41側縁の一部に短く連続する剝離を、42・43は不連続の剝離を施した削器である。



第18図 第14次調査遺物包含層出土遺物(1)



第19図 第14次調査遺物包含層出土遺物(2)

(2) 小屋塚遺跡北部

調査の概要

遺跡北部の調査は、5・8・10・11・12・13・17・18・19・20・21・23・24・25・26・27次調査を実施した。12次調査では、当初トレンチ調査で遺構の有無を確認してから敷地全体の調査に入った。調査区北半は以前の住宅基礎で攪乱が著しい。検出遺構は溝状陥し穴3基、フラスコ形貯蔵穴2基、その他の土坑2基（RD7103～7109）、柱穴8口である。地山は北から南に緩やかに傾斜しており、北部は削平されている。20次調査では平安時代の竪穴住居跡1棟（RA8714）、25次調査では縄文時代の土坑3基（RD7126～7128）と縄文時代後期を中心とする遺物包含層が確認された。

他の調査では遺構はみられず、遺物も僅少もしくは皆無の状況であった。

RD7103土坑（第21図）

検出遺構

12次調査区中央に位置する溝状のいわゆる陥し穴状土坑である。埋土はA層が黒褐色土、B層が黒色土である。

平面形規模は長軸方向N30°E、長軸上端3.35m、中端3.25m、下端3.25m、短軸上端0.55～0.65m、中端0.35m、下端0.25m、検出面から中端までの深さ0.3m、底面までの深さ0.85m

出土遺物

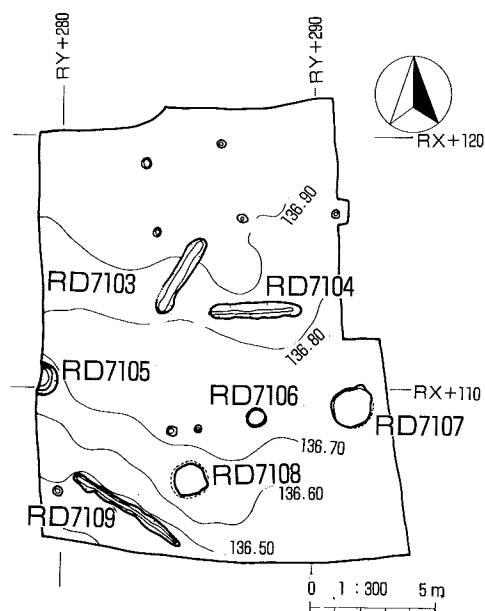
をはかり、中端以下が直壁に近い。出土遺物はみられない。

RD7104土坑（第21図）

検出遺構

RD7103の東に位置する溝状のいわゆる陥し穴状土坑である。埋土はA層が黒褐色土、B層が黒色土である。

平面形規模は長軸方向N87°E、長軸上端3.63m、中端3.35m、下端3.35m、短軸上端0.45～0.65m、中端0.18～0.3m、下端0.1m、検出面から中端までの深さ0.6m、底面までの深さ1.35mをはかり、中端以下がかなり細長に狭くなっている。出土遺物はみられない。



第20図 小屋塚遺跡北東部の遺構

RD7105土坑（第22図）

調査区西辺に位置するビーカー形土坑で、西半はさらに調査区西側へのびる。埋土は自然堆積で、2層に大別される。

A層は堅い黒色土で、B層は黒褐色土～暗褐色土である。平面形は円形で、規模は上端径1.27m、中端径1.44m、下端径0.7m、検出面からの中端までの深さ0.25m前後、底面

までの深さ0.95mをはかる。底面はほぼ平坦である。出土遺物はみられない。 出土遺物

RD7106土坑（第22図）

調査区南側に位置する小土坑で、埋土はA層がやや軟らかい黒褐色土、B層はやや堅い黒褐色土の柱穴埋土である。 検出遺構

平面形は円形で、規模は上端径0.7m、下端径0.65m、検出面からの底面までの深さ0.2mをはかる。底面中央に径0.25m、深さ0.18mの小柱穴がある。出土遺物はみられない。 出土遺物

RD7107土坑（第22図）

調査区南東部に位置するフラスコ形土坑である。埋土は自然堆積で、3層に大別される。A層は埋土上部を構成する黒褐色土、B層は壁の崩落によるもので凹レンズ状に堆積する褐色土、C層は壁崩壊前の中央部が盛り上がる片凸レンズの埋土で黒褐色土、D層は底面中央に残る柱痕跡の一部で、軟らかい黒褐色土である。 検出遺構

平面形は円形で、規模は上端径1.5～1.55m、中端径1.4m、下端径1.55～1.65m、検出面からの中端までの深さ0.35m前後、底面までの深さ0.9mをはかる。西壁が直壁に近く、底面はほぼ平坦で、中央やや東寄りに径0.25m、深さ0.07mの浅い柱穴が認められた。出土遺物はみられない。 出土遺物

RD7108土坑（第22図）

調査区南東側に位置するフラスコ形土坑である。埋土は自然堆積で、2層にわかれる。A層は壁の崩落土で、褐色土主体、B層は壁崩壊前の中央部が盛り上がる片凸レンズの埋土で黒色土主体の埋土である。 検出遺構

平面形は円形で、規模は上端径1.25～1.35m、下端径1.45～1.55m、検出面から底面までの深さ0.3mをはかる。底面はほぼ平坦である。出土遺物はみられない。 出土遺物

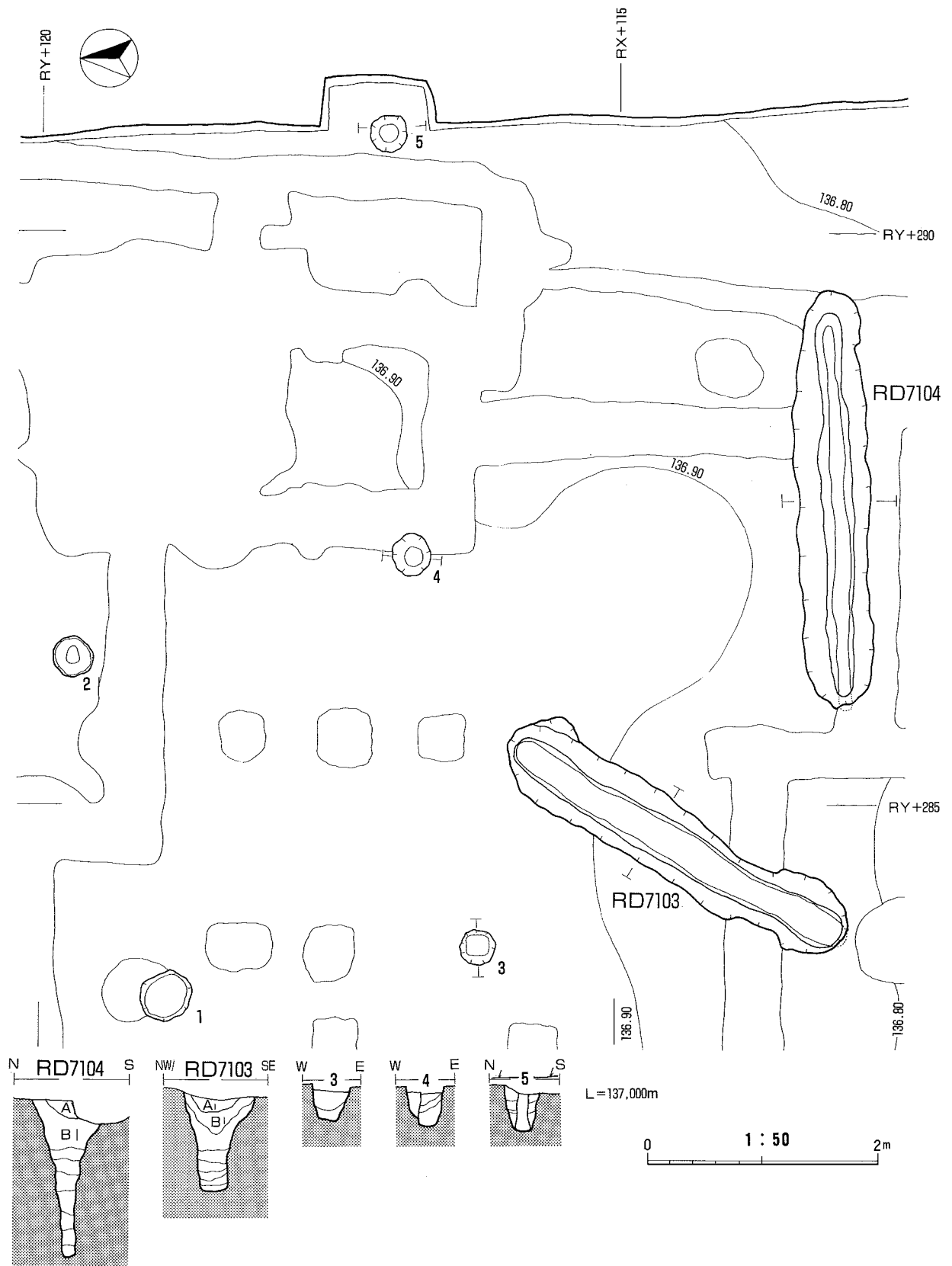
RD7109土坑（第22図）

調査区南側に位置する溝状のいわゆる陥し穴状土坑である。埋土はA層が黒褐色土、B層が黒色土主体である。 検出遺構

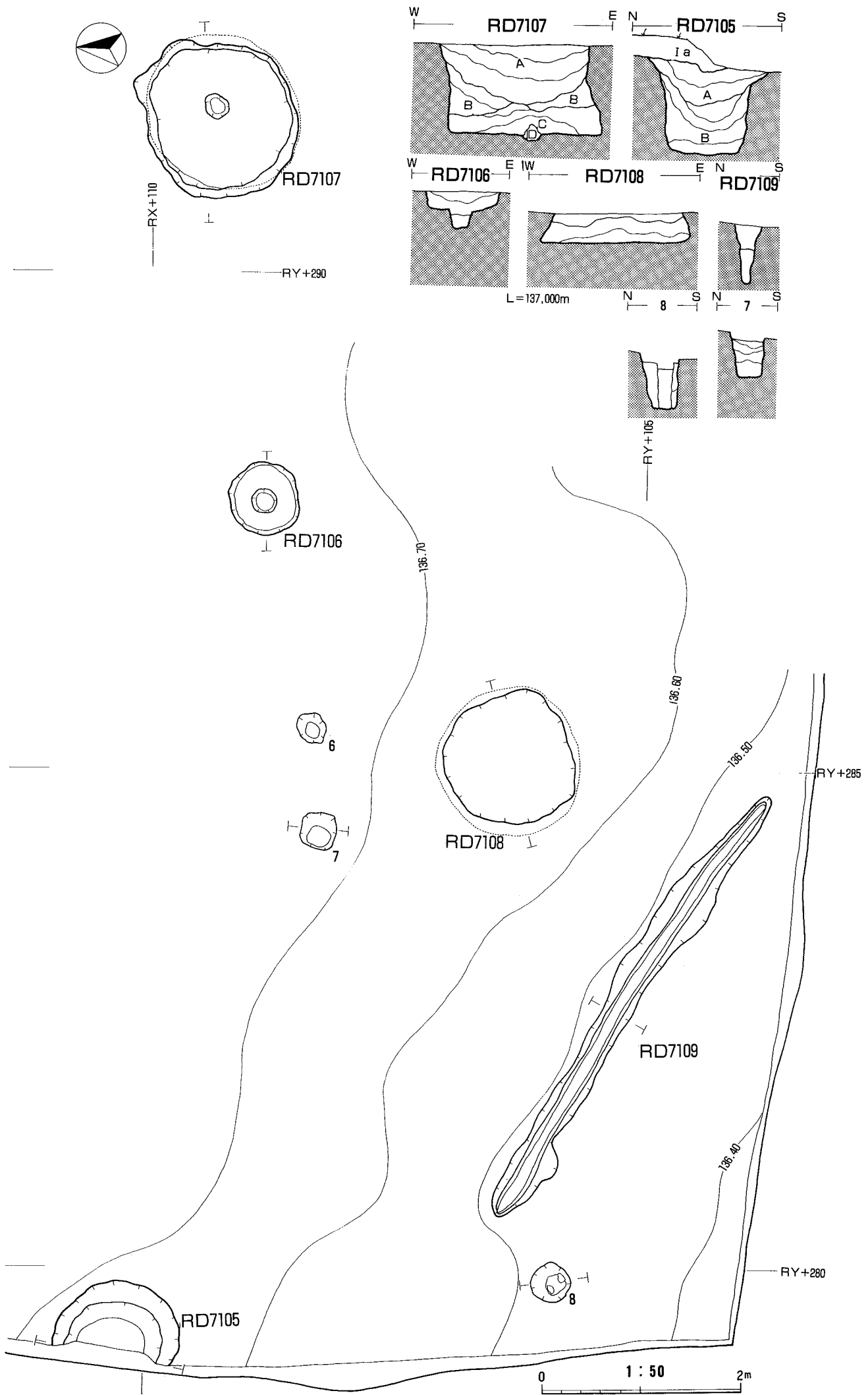
平面形規模は長軸方向N61°E、長軸上端5.02m、中端4.93m、下端4.9m、短軸上端0.27～0.45m、中端0.15m、下端0.1m、検出面から中端までの深さ0.2m、底面までの深さ0.6mをはかり、中端以下がかなり細長に狭くなっている。出土遺物はみられない。 出土遺物

ピット群

第12次調査区からピット8口が検出された。規模は1が径0.45m深さ0.1m、2が径0.35m深さ0.1m、3が径0.4m深さ0.3m、4が径0.35m深さ0.35m、5が径0.32m深さ0.4m、6が径0.35m深さ0.1m、7が径0.27～0.35m深さ0.45m、8が径0.4m深さ0.55mである。



第21図 RD7103・7104土塚



第22図 RD7105~7109土塚

RD7126土坑（第23・24図）

検出遺構

25次調査区南側に位置し、東側を攪乱される。埋土はA層が褐色土を含む黒色土、B層が褐色土を含む黒褐色土で、自然堆積である。

平面形はほぼ円形で、上端径1.5m、下端径1.2m、深さ0.4mの規模をはかる。壁面は外傾しながらたちあがり、底面は平坦でやや堅い。

出土遺物

出土遺物は、第24図1が単節縄文で、下端に結節をもち、底面は笹の葉状の圧痕が残る。2は沈線連続刺突文を入組文のように施している。3は貼付隆帯土を刺突したもの、4～9は平行沈線と磨消縄文を施し、10は口縁部平行の1条の原体圧痕をめぐらし、体部を単節縄文を施した粗製深鉢である。

11は有茎の石鏃、12は尖頭状の基部をもつ篋状石器、13は片面の一側縁に刃部をもつ削器である。14は片面に縄文施文の板状土製品、15～17は隅丸三角形の土製品で、湾曲する凸面側に沈線で施文しているが、凸面が剝落している。

RD7127土坑（第23・25図）

検出遺構

25次調査区南側に位置する。埋土は粒状に褐色土を含む黒褐色土で、自然堆積である。平面形はほぼ円形で、上端径1.1m、下端径0.8m、深さ0.3mの規模をはかる。壁面は外傾しながらたちあがり、底面はやや凹凸があり、あまり堅くなっていない。

出土遺物

出土遺物は、第25図1が口唇部と頸部に縄文施文の薄手の壺である。2～5は口縁部平行の沈線と口唇部縄文施文の一群で、3は縄文が細かく、沈線下は磨消される。6～11平行沈線、8は口唇部突起の内面に弧状の沈線を施す。12・13は直角や三角の沈線区画と磨消縄文である。14は口唇部にも縄文施文、15は口縁部下と頸部に原体圧痕、16は撚糸文、17・18は単節縄文が施され、19は無文、20は網代底である。

21は両面調整の削器、22は板状土偶の腹部である。

RD7128土坑（第23・25図）

検出遺構

25次調査区南側に位置するフラスコ形土坑である。埋土はA層が褐色土を含む黒色土、B層が褐色土を含む黒褐色土、C・D層が褐色土を含む暗褐色土で、自然堆積である。平面形はほぼ円形で、上端径1.3m、中端径0.9m、下端径1.1m、深さ0.6mの規模をはかる。壁面は外傾しながらたちあがり、底面は平坦で、やや堅い。

出土遺物

出土遺物は、第25図23が細い平行沈線、24は頸部に原体圧痕、25は無節縄文、26は口唇部突起をもち無文である。

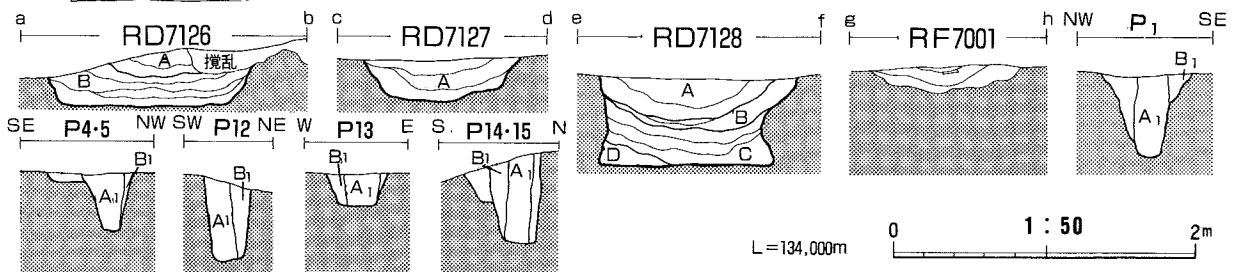
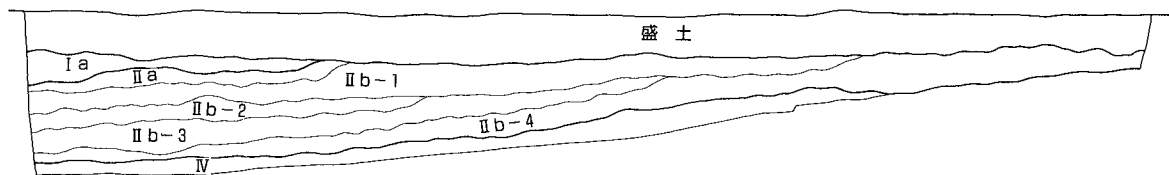
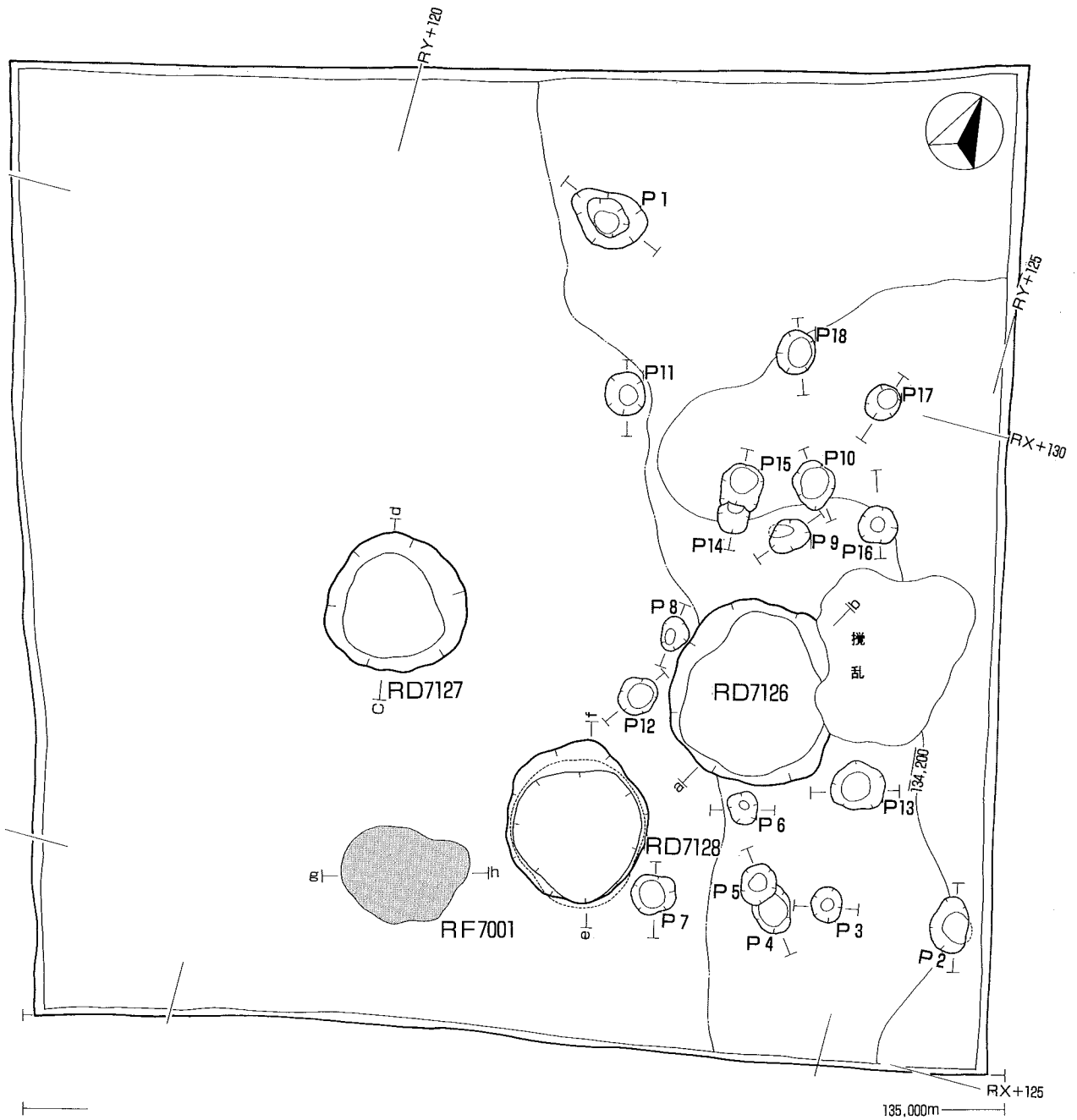
RF7001焼土遺構（第23・25図）

検出遺構

25次調査区南側、RD7128土坑の西に位置する。0.7～1.0mの不整楕円形の範囲が厚さ0.15mで堅く焼けている。

出土遺物

焼土中から第25図32の深鉢底部が出土している。底面は中央部に網代痕が残る。



第23図 小塚遺跡北西部の遺構

ピット群 (第23・25図)

25次調査区東半に集中する。黒色土(Ⅱa層)下で検出された。P1・5・12・15・17は径0.25~0.6m、深さ0.4~0.55mとやや深く、柱痕跡をもつものが多い。そのほかのピットは径0.25~0.4m、深さ0.1~0.2mと浅く、柱根跡も明確ではない。

出土遺物は、P7から第25図27の沈線と磨消縄文、P10からも沈線と磨消縄文施文の土器が出土している。

遺物包含層 (第23・26~33図)

遺物包含層

25次調査区では地山が東から西にかけて傾斜し、その斜面に縄文時代後期の遺物包含層が形成されている。

I 層—盛り土、旧表土

Ⅱa層—黒色土で、若干の砂と褐色土を含む。調査区西半に堆積している。

Ⅱb層—黒色土で、その層相から4分される。

Ⅳ層—黒色土で、やや堅くしまっている。Ⅳ層上面での東西端の比高差は0.8mである。

遺物はⅡa層からがもっとも多く、ついでⅡb-1層、Ⅱb-2層とつづき、Ⅱb-3層以下は遺物がほとんど確認されない。なお層の確認は調査区南壁でⅣ層上面まで行ったが、湧水のため、遺物包含層の掘り下げはⅡb層の途中までとした。第23図中の一点鎖線の西側がⅡb層中でとめた範囲である。

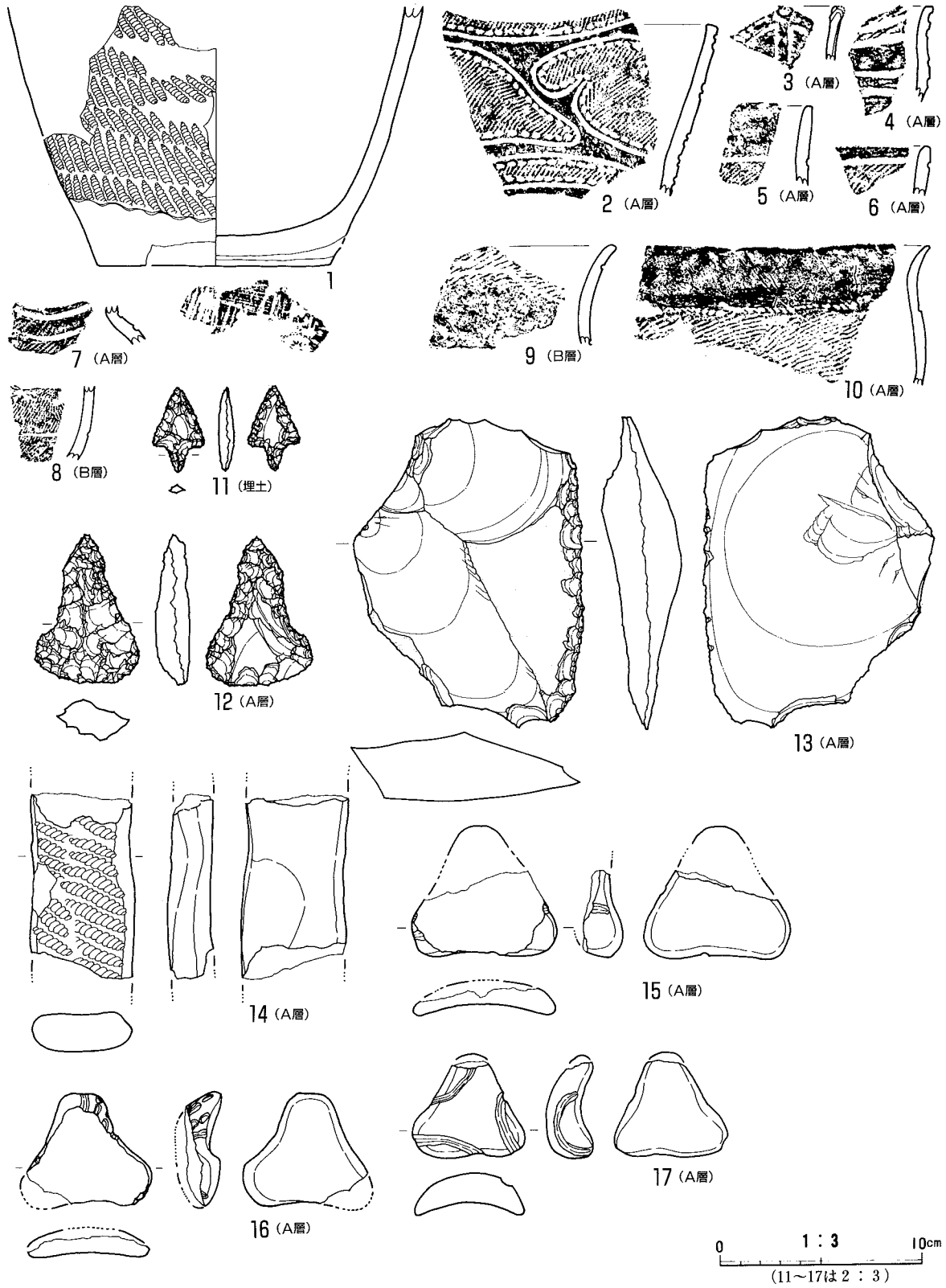
出土遺物

図示した出土土器は、概ね第26図がⅡb層、第27・28図がⅡa層、第29図がⅠ層出土である。第26図1は、口縁部に縄文を地文に逆C字とI字状の短沈線を施し、体部に無文にした浅鉢で、底面は木葉底である。2は無文の小形深鉢底部である。3~23は沈線と磨消縄文が施されるもので、波状口縁をもつ3~7・12・13は口縁部にそって波状に沈線を描く。8は沈線間に渦巻文を配する。11は鋭角的な波状口縁の内面に短い沈線を施す。19は沈線と平行に連続刺突文、20は刺突列を数段に施している。21・22は壺の体部上半である。23は直線的な口縁部で、大きく波状をなす平行沈線を施し、他に比し緻密な胎土である。

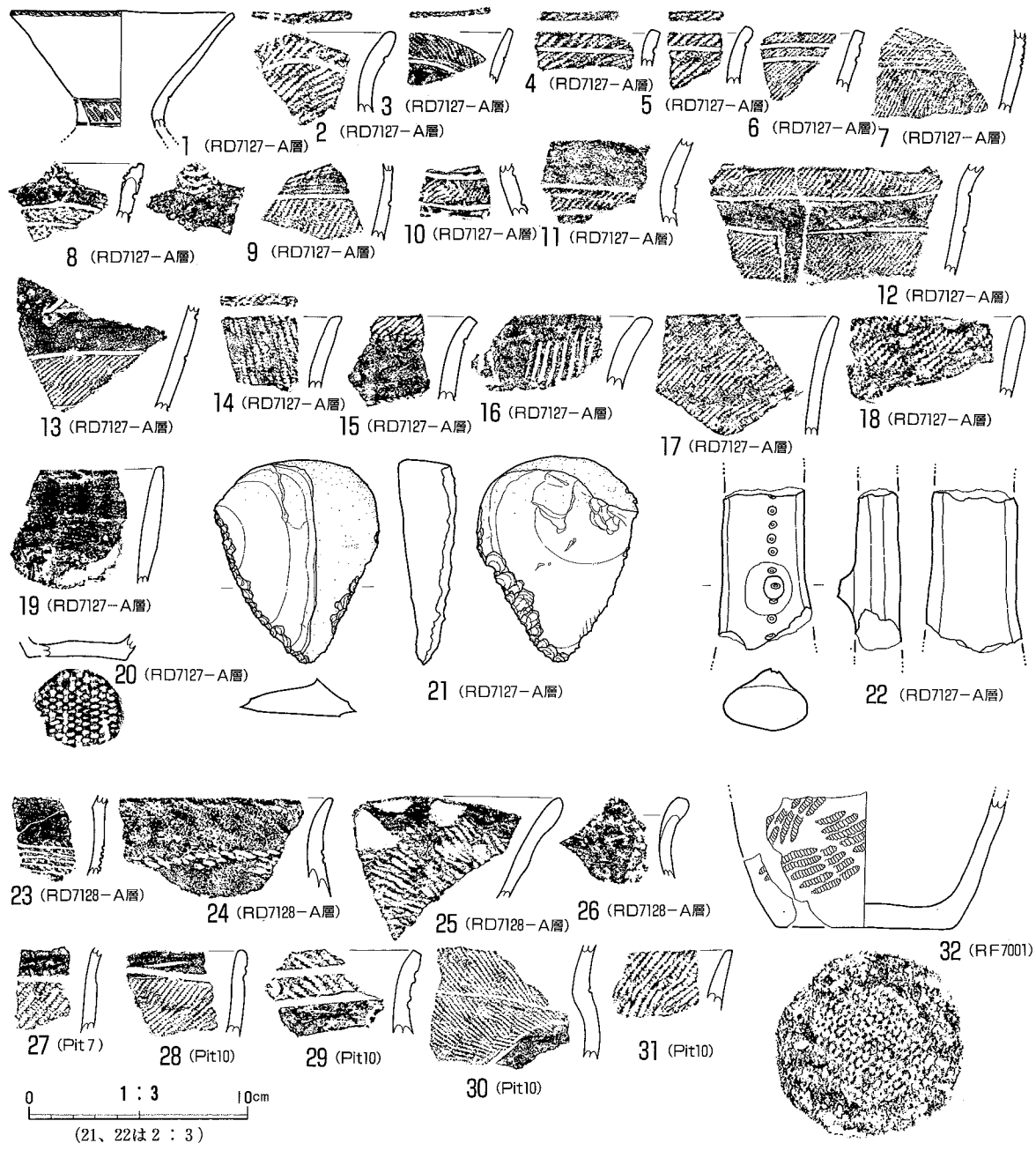
24・40は縄文中心の施文の口縁部である。24・25は口縁平行の1条の沈線を、25~35は口唇部にも縄文を施し、37・38は波状口縁部である。41は網代底である。

第27図42は4個の頂部をもち、大きく外反する波状口縁で、体部に平行沈線で区画し磨消縄文を施す。43~47・57・61~64も平行沈線と磨消縄文が施されるが、45や47は短沈線や刺突文が加えられている。48~56・58・59は数条の平行沈線が施される。65~74は数段の刺突列が口縁部などにみられる。75~第28図101は細い沈線で区画するもので、曲線を描く86~90は充填縄文が区画内に施される。102以下は縄文中心の施文のもので、106~112は口縁部無文、106~108が頸部に原体圧痕、116が沈線をめぐらし、108~111・114・115は口唇部にも縄文施文される。119は細い撚糸文である。

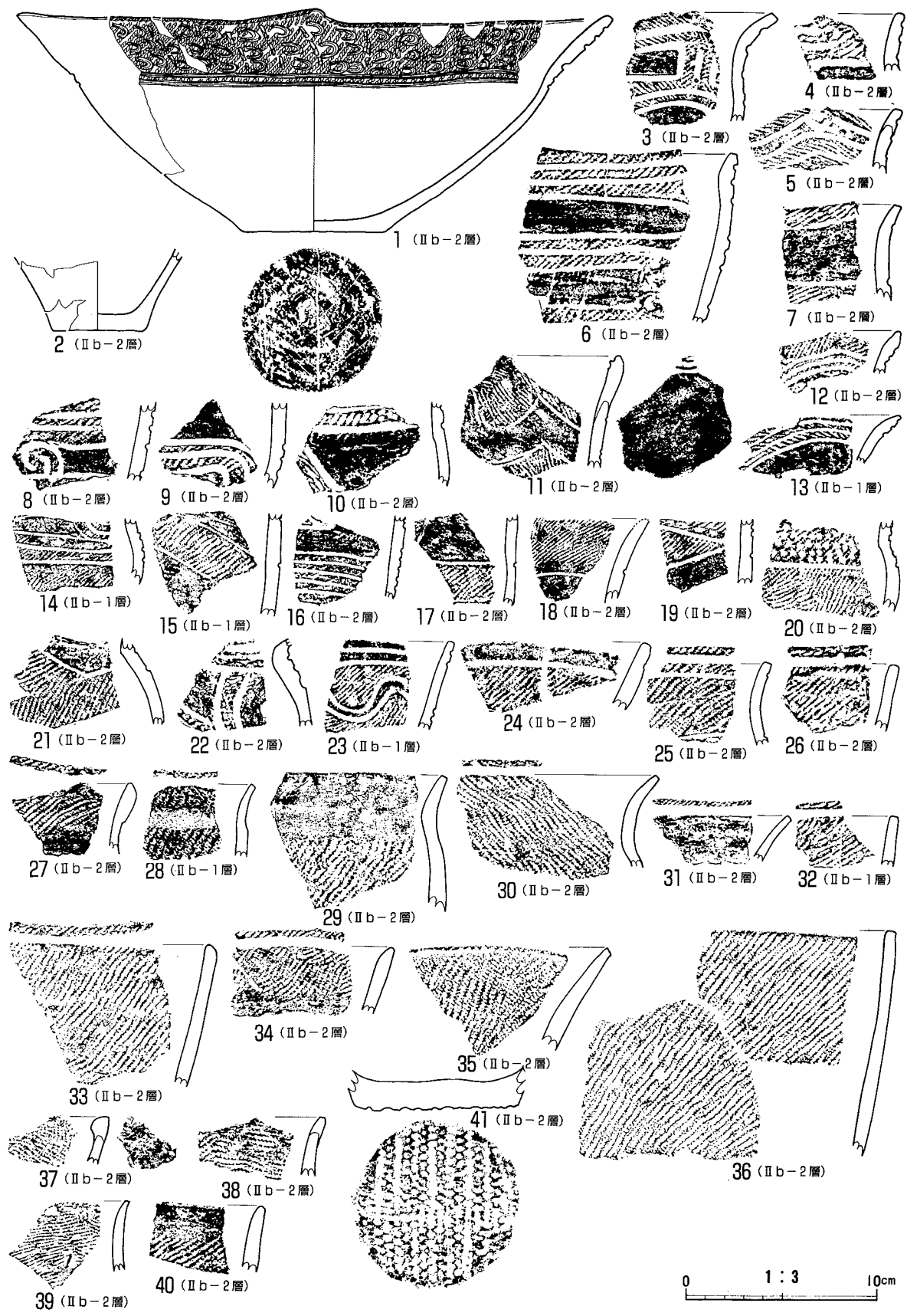
121~123は無文の小形土器で、122は揚底、123は壺である。



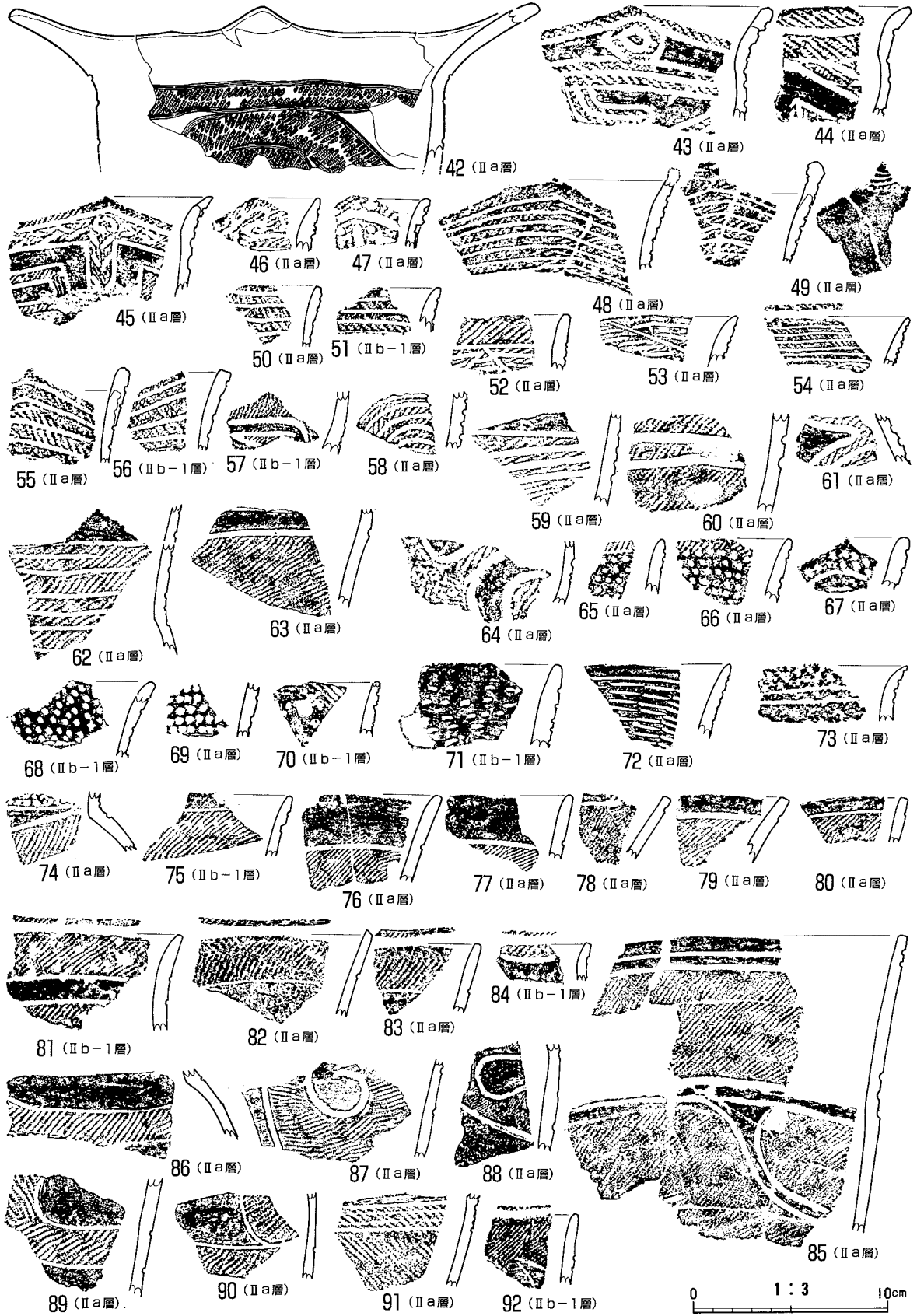
第24図 RD7126土坑出土遺物



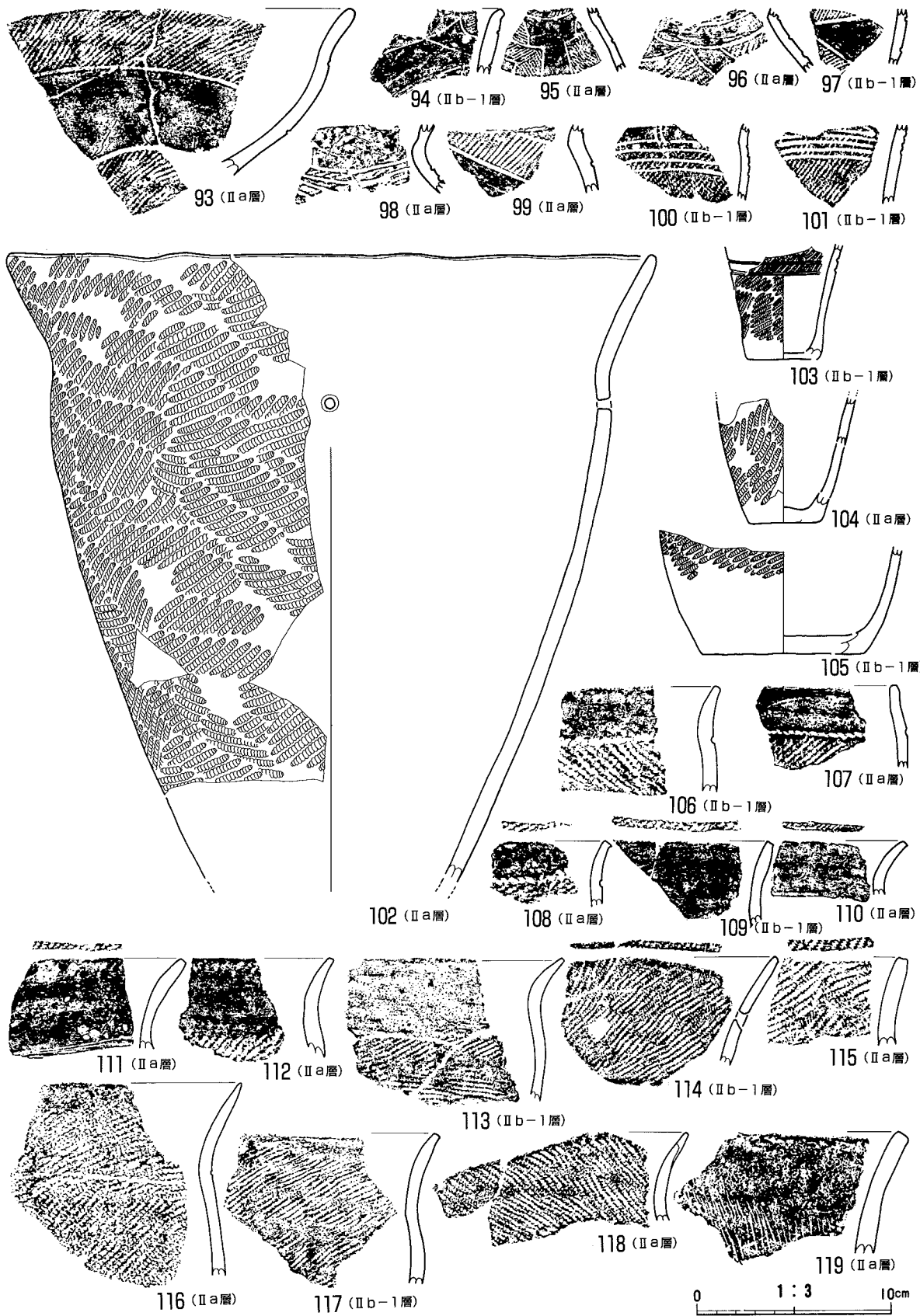
第25図 RD7127土坑・ピット群出土遺物



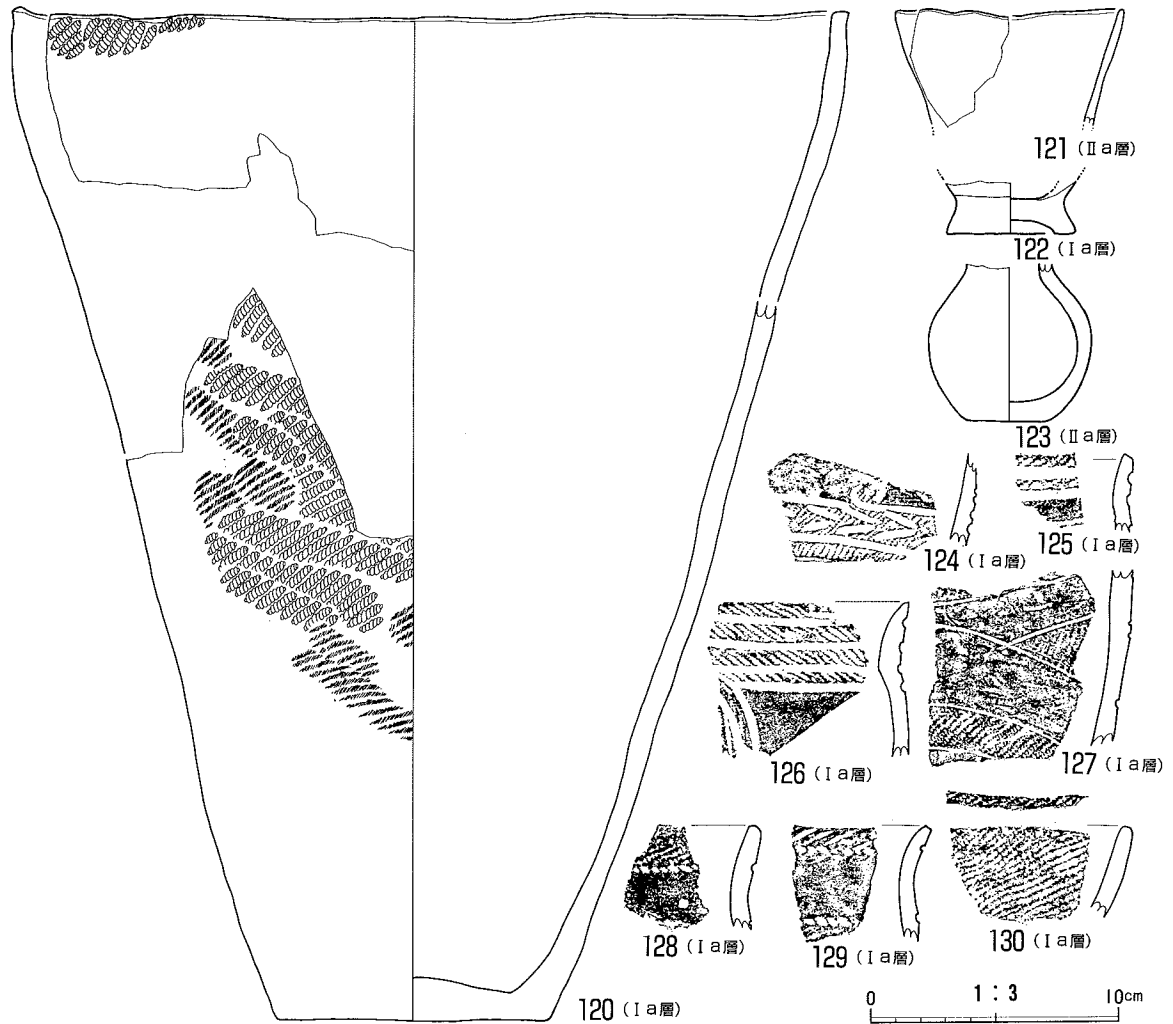
第26図 第25次調査遺物包含層出土遺物(1)



第27図 第25次調査遺物包含層出土遺物(2)



第28図 第25次調査遺物包含層出土遺物③

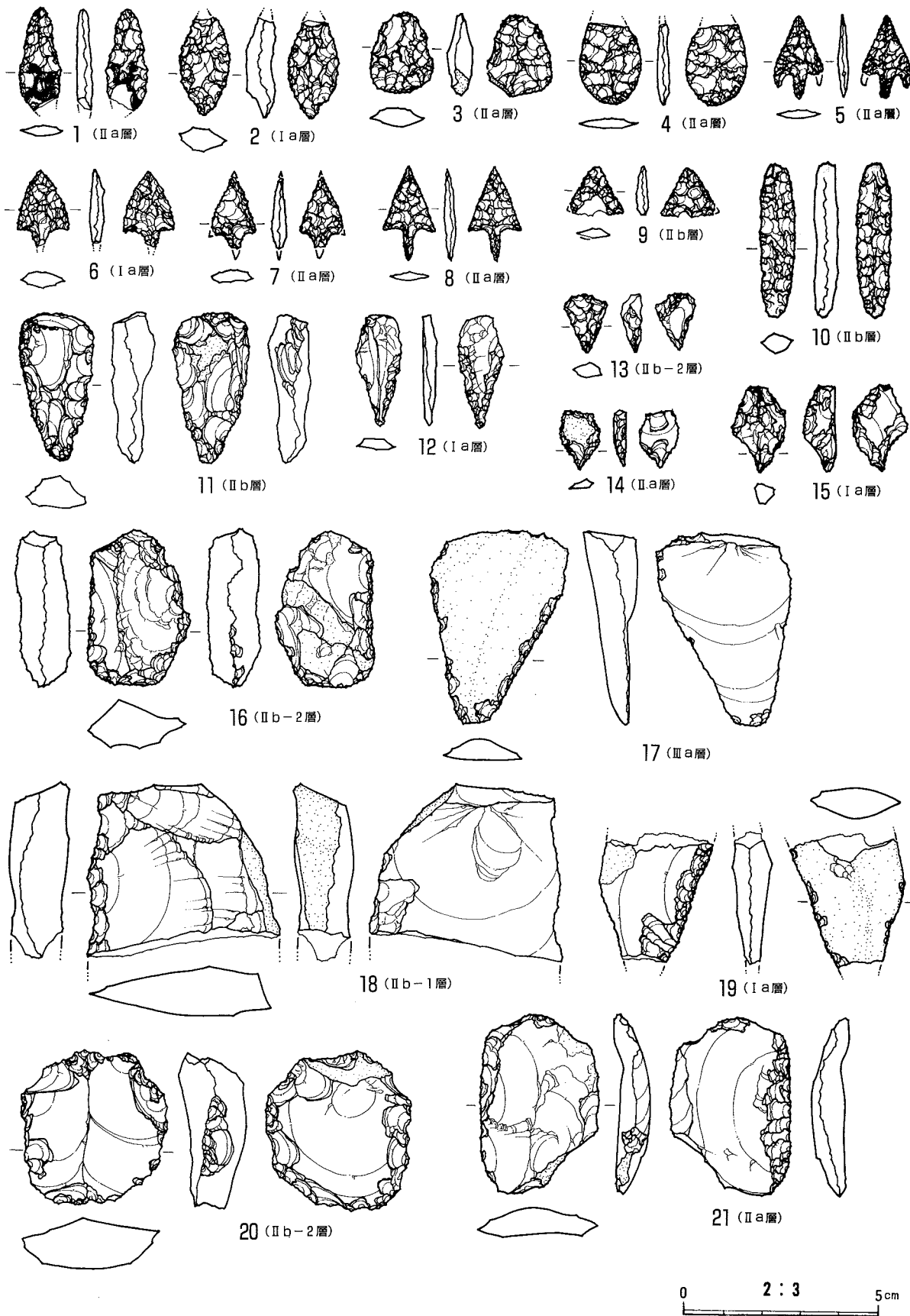


第29図 第25次調査遺物包含層出土遺物(4)

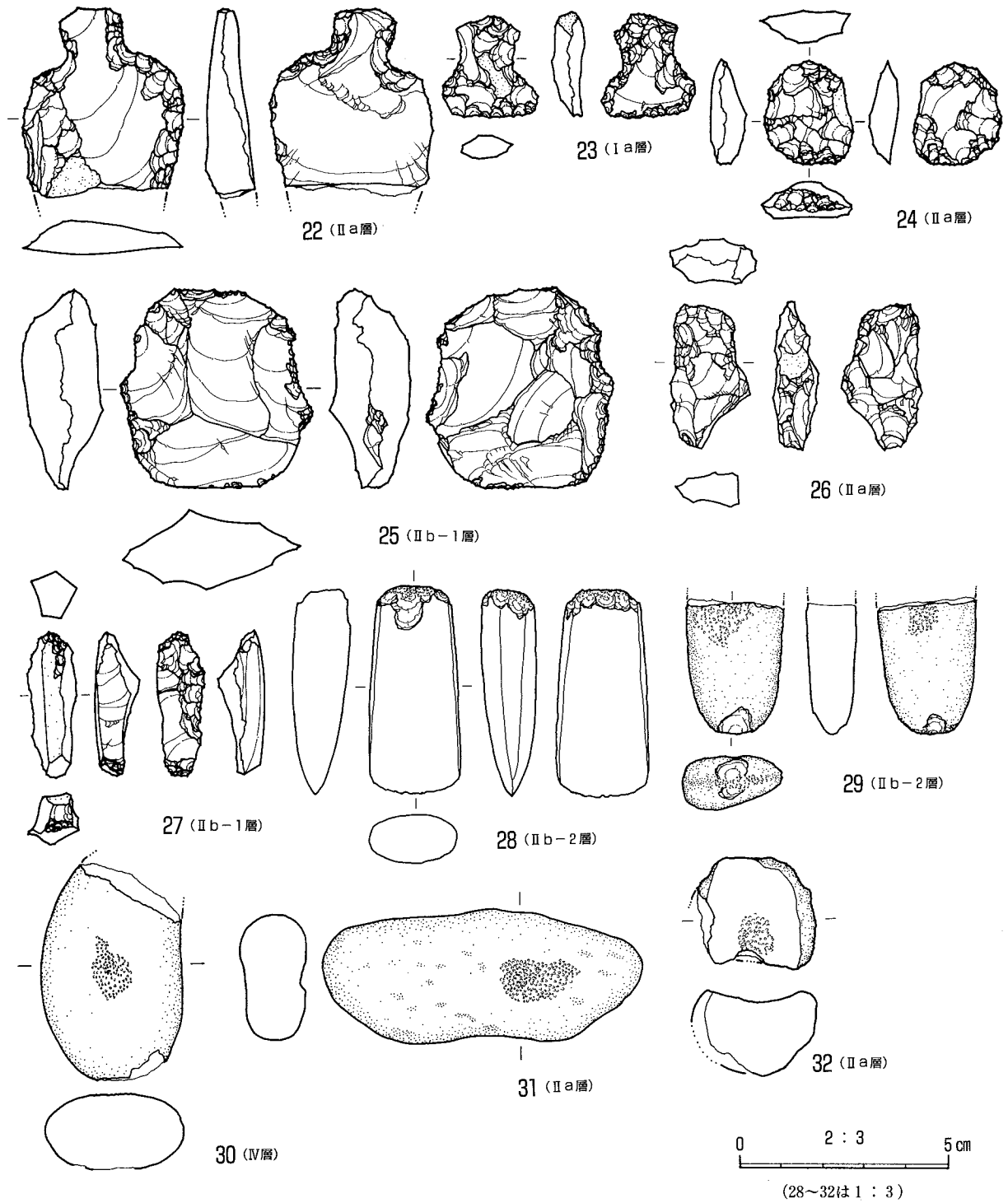
石器は、第30図1～9は石鏃で、1～4は有柄凸基、5は有柄凹基、6～9は有柄平基である。1の基部にはアスファルトが付着している。10～15は石錐で、10は棒状で両端に摩滅痕が認められる。11～15は板状のものである。16～21は削器で、16は片面の一側縁に不揃いの、また両面の同一側縁に細かな調整を施す。17～19は背面側の一側縁を調整し、20・21は腹面側を調整するものである。

第31図22は縦形の石匙、23は小形の横形石匙である。24は拇指状搔器か。25・26は両面調整石器で、25の側縁に細かな薄利が並ぶが、削器のような鋭利さはない。27は楔形石器（ピエス＝エスキーユ）である。28は磨製石斧で、頭部には敲打痕がみられる。29～31は、台石、32は砥石で、凹面に敲打痕がある。

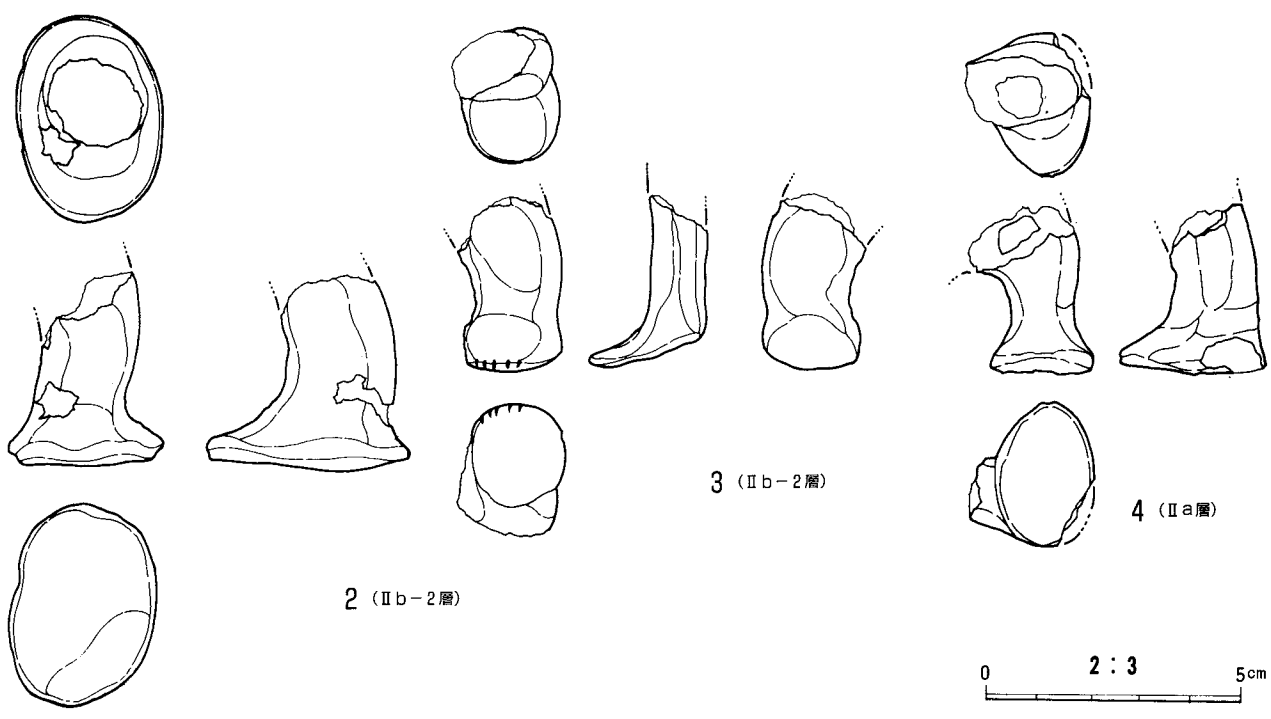
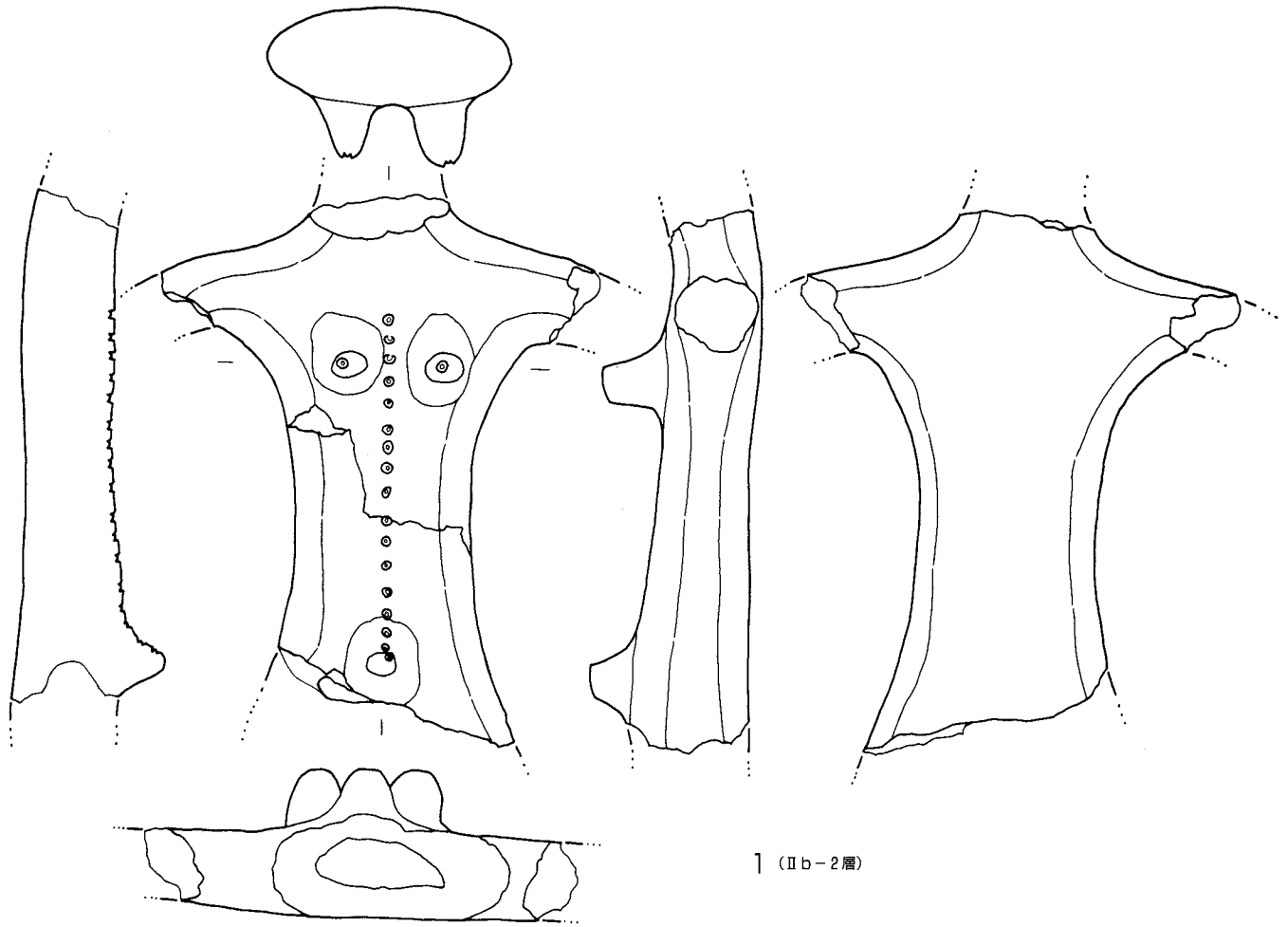
土製品は、第32図1は頭部と四肢を欠く土偶で、乳房と臍が高く盛り上がり、胸部から腹部にかけて細い竹管刺突が一直線に配される。2～4は土偶の脚部で、短くO脚、3は指を示すか細かな刻みが施される。第33図5は釘頭状の土偶頭部で、上面に不整な貼付がみられる。6・7は土器片の側縁を打ち欠き整形した土製円盤である。8・9は小形の土製円盤で、8は側縁2カ所に、9は平坦な片面にくぼみをつけている。10は耳栓で、無文である。11～14はミニチュア土器で、11・12は平底、13・14は丸底で、ほとんど無文である。



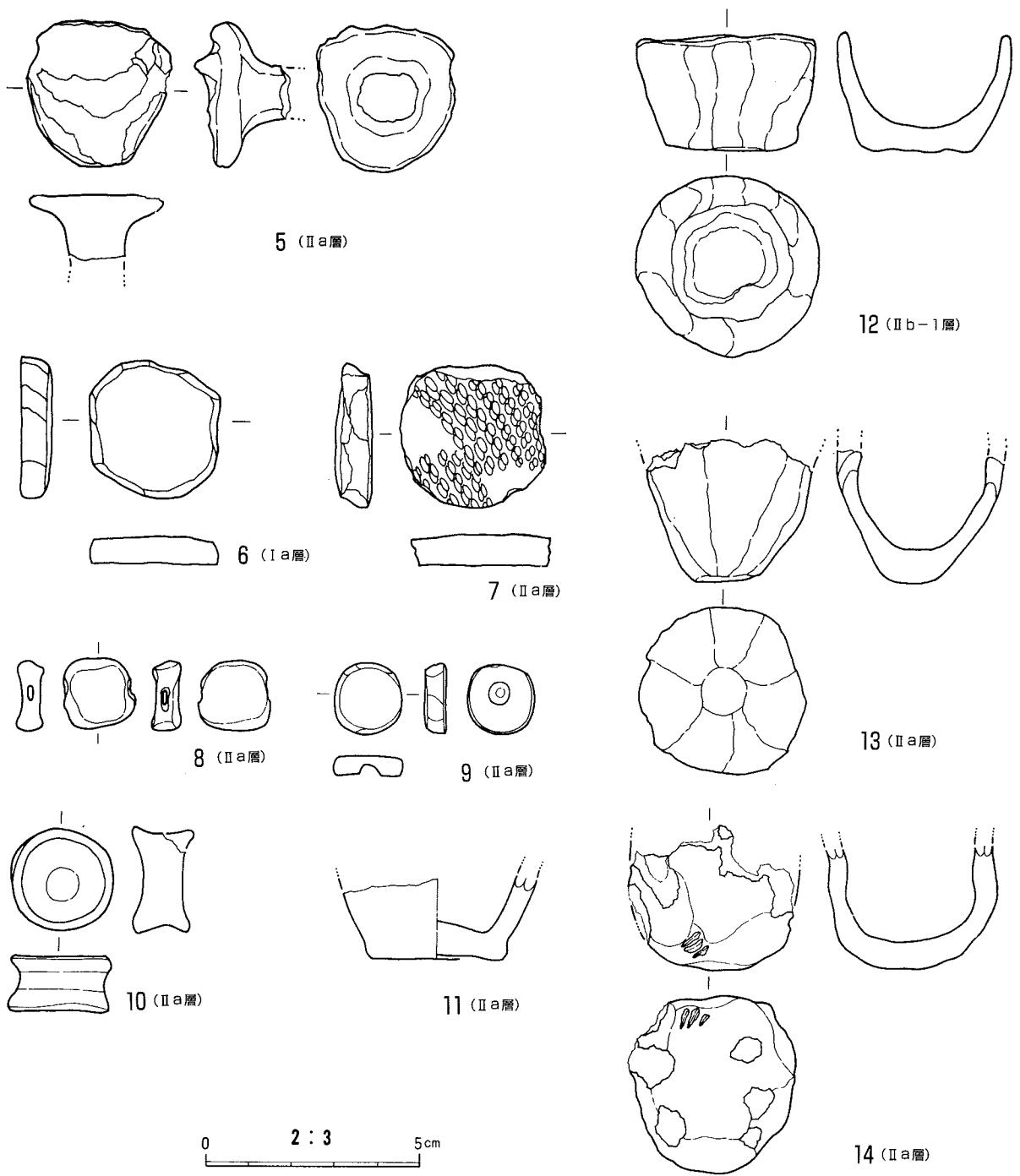
第30図 第25次調査遺物包含層出土遺物(5)



第31図 第25次調査遺物包含層出土遺物(6)



第32図 第25次調査遺物包含層出土遺物(7)



第33図 第25次調査遺物包含層出土遺物(8)

2 古墳～平安時代の遺構と遺物

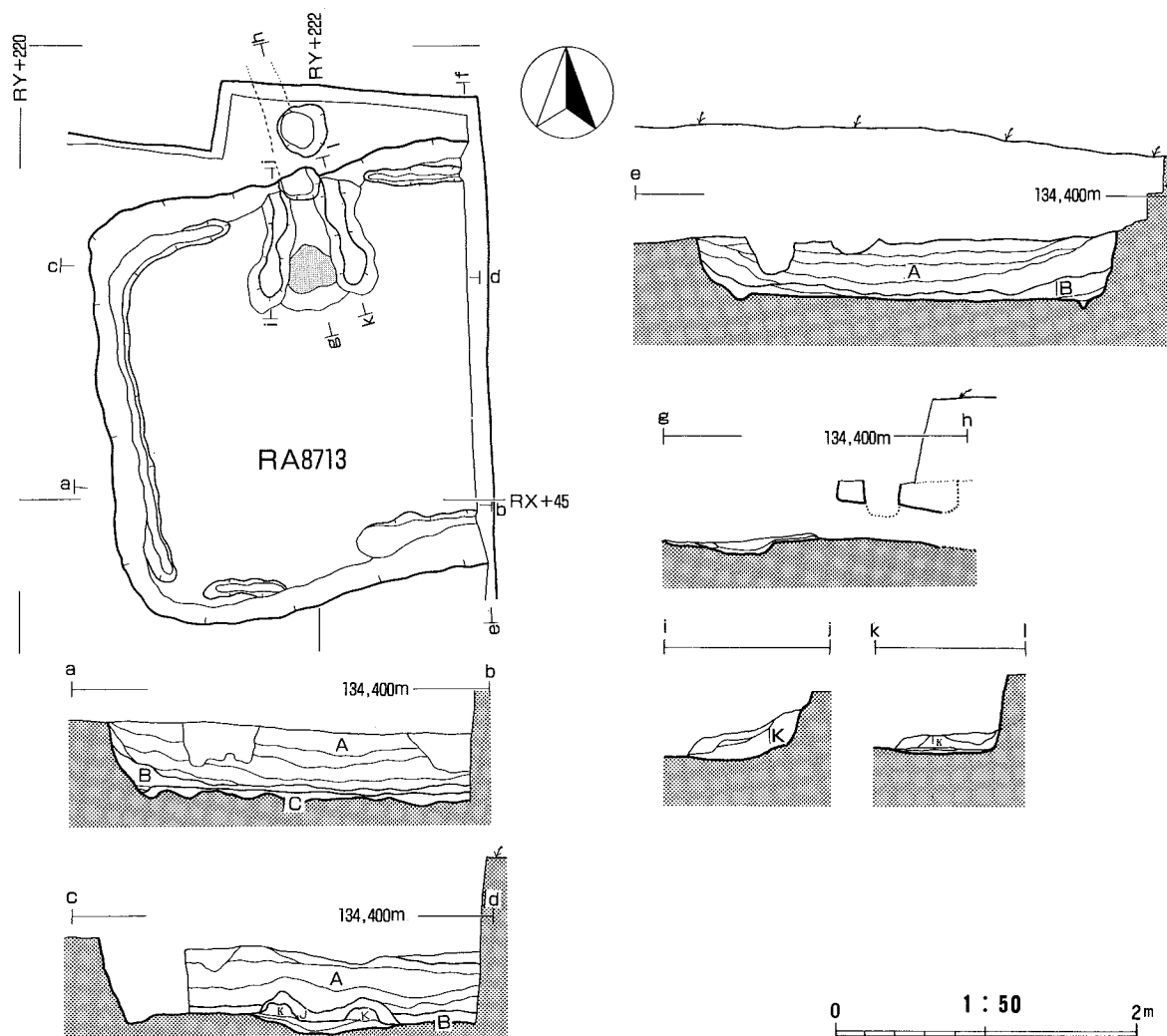
(1) 小屋塚遺跡

古墳時代から平安時代にかけての遺構は、小屋塚遺跡および隣接の大新町・大館町遺跡で散発的であるが、15棟の竪穴住居跡が検出されている。小屋塚遺跡では9次調査のRA8713、20次調査のRA8714の2棟、大新町遺跡では3棟、大館町遺跡では10棟が確認されている。

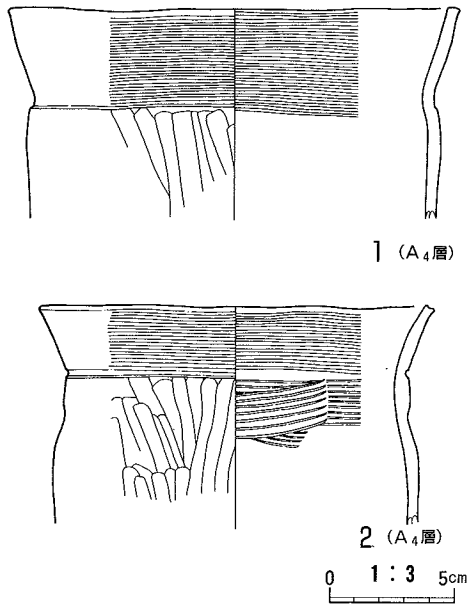
このうち報告済みの7棟をのぞく8棟について記述をすすめる。

RA8713 竪穴住居跡 (第34・35図)

小屋塚遺跡9次調査東端で検出され、かまど煙出がさらに北に延び、東壁も調査区外に延びる。縄文時代の遺物包含層、RD7102土壇を切り、新旧は確認できなかったが煙道と小ピットが重複する。表土および攪乱土下で検出された。埋土は大きく2層の分かれ、A層は黒色土主体の層で、床面近くに堆積するB層は焼土を部分的に層状に含む黒褐色土主体の層であ



第34図 RA8713竪穴住居跡



第35図 RA8713竪穴住居跡出土遺物

る。また床面構築土C層は黒色土と黄褐色土と混合土で、床はあまり堅くなく、直下に0.01mのほどの厚さの貼床がある。

平面形は隅がやや丸くなる方形を呈する。主軸方向はN15°W、規模は南北2.8m、東西もほぼ同規模であろう。床面までの深さはI層下から0.42m、構築土下まで0.5mである。壁下に幅0.1m、深さ0.05m前後の周溝が部分的にめぐる。柱穴や床面施設はみられない。

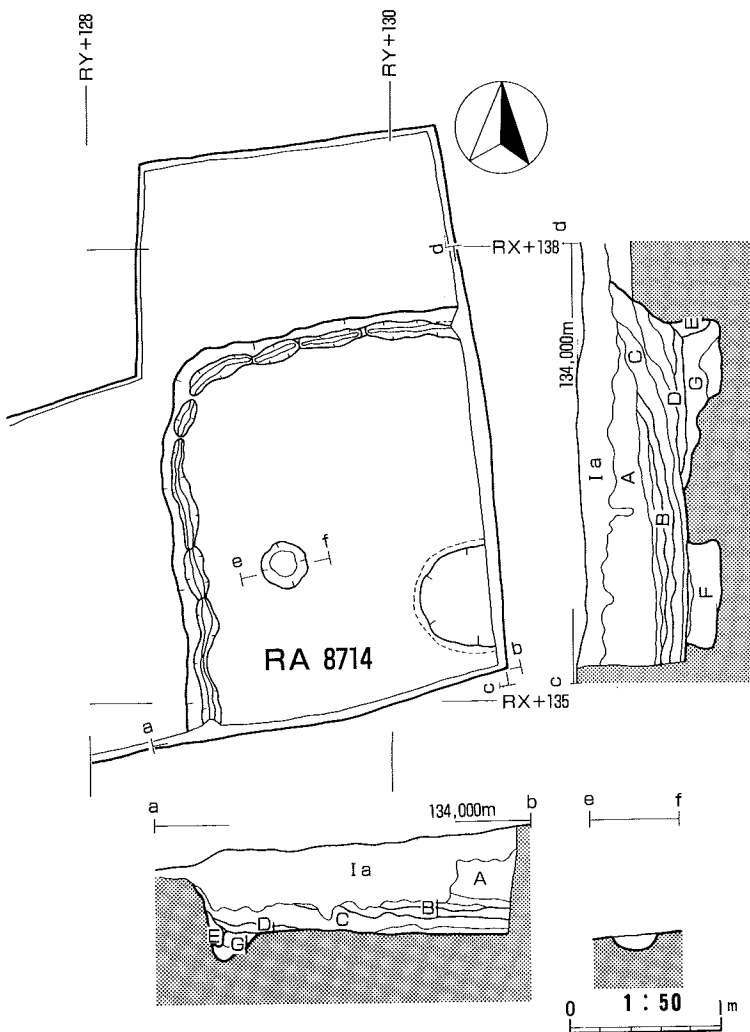
かまどは北壁中央にあり、そではほぼ直線的で、長さが壁から0.8m、焚き口幅0.3m、残存する高さ0.15m内外、火床部は手前にあり、よく焼けており、火床浸透層は0.07mである。煙道は火床面とほぼ同じ高さであるが、煙出側でやや低くなるようである。煙出は調査区外にあり、未確認である。

出土遺物は第35図1・2がロクロ未使用の土師器甕である。口唇部が平坦で角張る特徴をもち、頸部に明瞭な段～沈線を有する。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面を幅広のヘラミガキ、2の体部内面をハケメ調整するものである。坏類の出土はみられない。

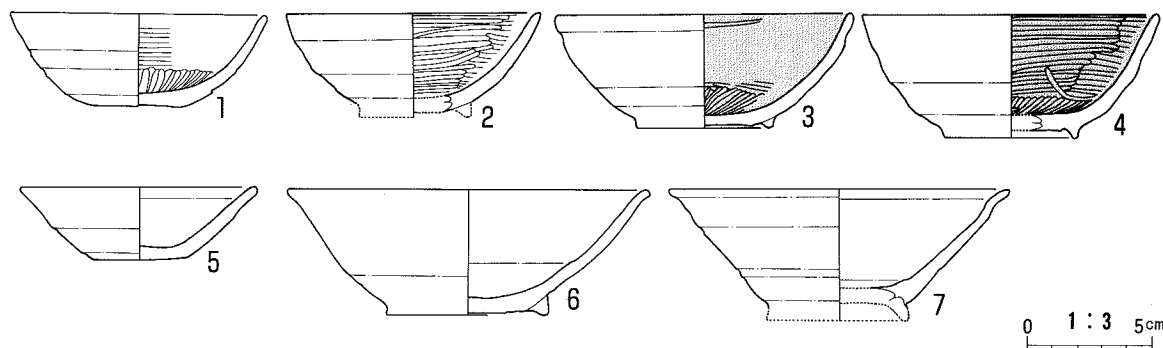
RA8714竪穴住居跡 (第36・37図)

小屋塚遺跡北西部の第20次調査区東端で検出された。住居跡の北西部だけの確認で、規模等は不明である。埋土は自然堆積で、A層が黒色土主体、B層がやや細かい粉状パミス粒～塊状を含む黒褐色土、C層は黒褐色～暗褐色土で、地山の褐色土を塊状に多く含んでいる。D層は赤褐色焼土層で壁際の床面直上に堆積しており、E層は周溝埋土の軟らかい黒褐色土、F層は床面構築土で、黒色土と地山褐色土との混合土である。

床面はやや堅くなっている。壁下に幅0.1m、深さが0.1～0.2m前後の周溝をもつ。西壁寄りに径0.3m、深さ0.1mの小ピットがある。また中央部に上端径0.65m、下端径



第36図 RA8714竪穴住居跡



第37図 RA8714竪穴住居跡出土遺物

0.75m、深さ0.25mのフラスコ状のピットがあり、埋土は床面下の構築土は壁際にみられ、0.2～0.25mの厚さで、構築土下は不整である。

なお床面下に径0.65m、深さ0.2mの円形の土壇がみられ、暗赤褐色の焼土を多く含む暗褐色土で埋められていた。本住居にともなうものかはっきりしなかった。

出土遺物は第37図に示した坏類がある。1は小形の土師器坏で、内面がヘラミガキ調整されており、黒色は残らないが内黒処理されていたものであろう。底面は糸切無調整である。2～4は低い高台をもつ高台付坏で、内面がヘラミガキ調整、底面が糸切で内黒処理される。2は内黒がとんでいる。2・3の高台は体部下端に、4は底部周縁に貼りつけられている。5は赤焼土器小形坏、6・7は高台付坏で、6は体部下端、7は底部周縁に高台が付けられている。

このほかロクロ成形の甕の破片1点がみられた。

(2) 大館町遺跡

大館町遺跡ではこれまで10棟の古代の竪穴住居跡が検出されている。このうち未報告は6棟であり、これについて記述をすすめる。

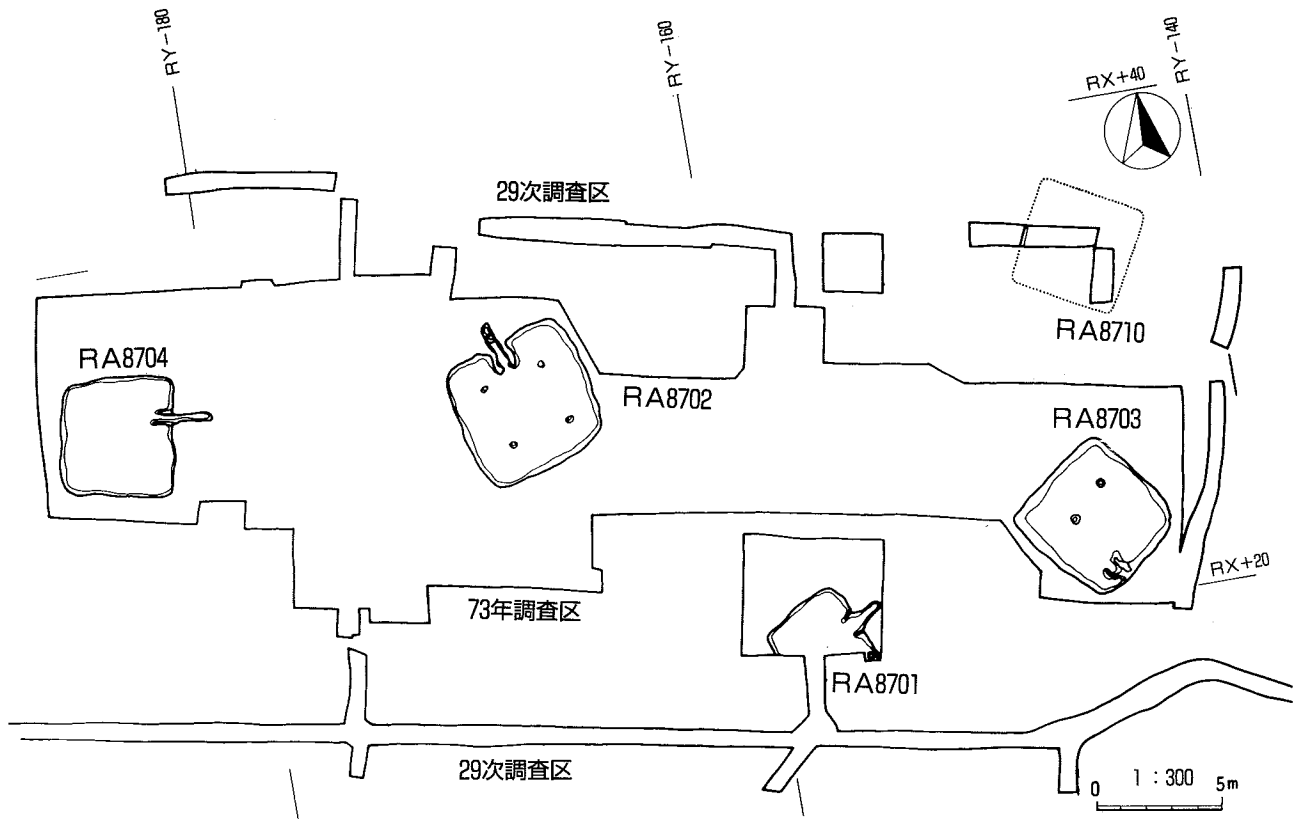
RA8701竪穴住居跡 (第37図)

共同住宅建築にともなう1973年調査区南東部にある。北半を検出し、南半は調査区外にのびるが、下水道敷設にともなう1988年の第29次調査では既に削平され、南半は確認されなかった。

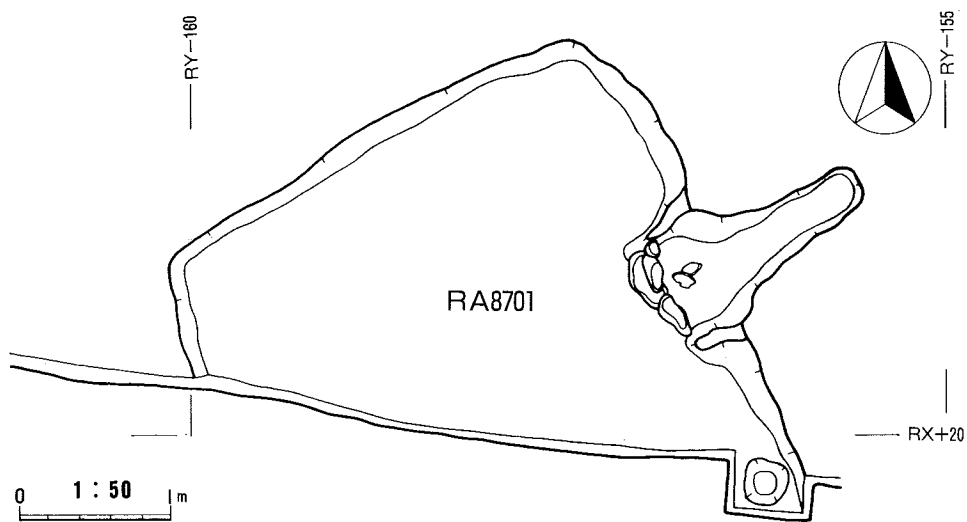
平面形は方形で、主軸方向はE31°N、規模は北東-南西3.5m、北西-南東もほぼ同規模であろう。床面までの深さは検出面から0.25mである。南東隅の壁下に径0.3m、深さ0.4mの小ピットがあるが、この住居にともなうものか不明である。

かまどは北東壁中央にあり、そでの長さが壁から0.4～0.55m、焚き口幅0.6mで、長磔が焚き口に横に2個ならんでいる。煙道は火床面とほぼ同じ高さで、長さは1.1m、煙出側でやや低くなるようである。遺物はロクロ未使用の甕と坏が出土している。

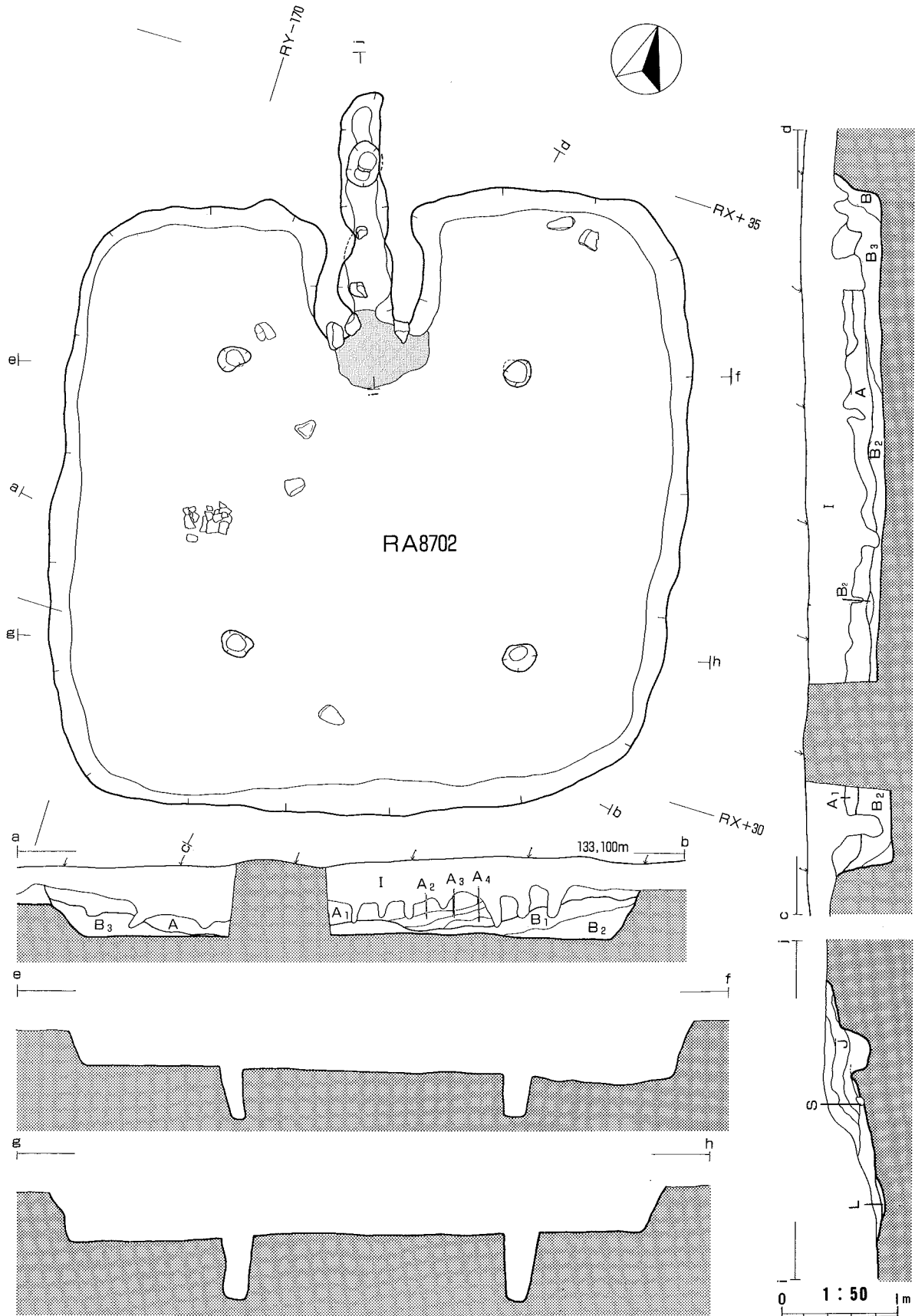
検出遺構
出土遺物



第38図 大館町遺跡の古代遺構



第39図 RA8701竪穴住居跡



第40图 RA8702竖穴住居跡

RA8702 竪穴住居跡 (第40・41図)

検出遺構

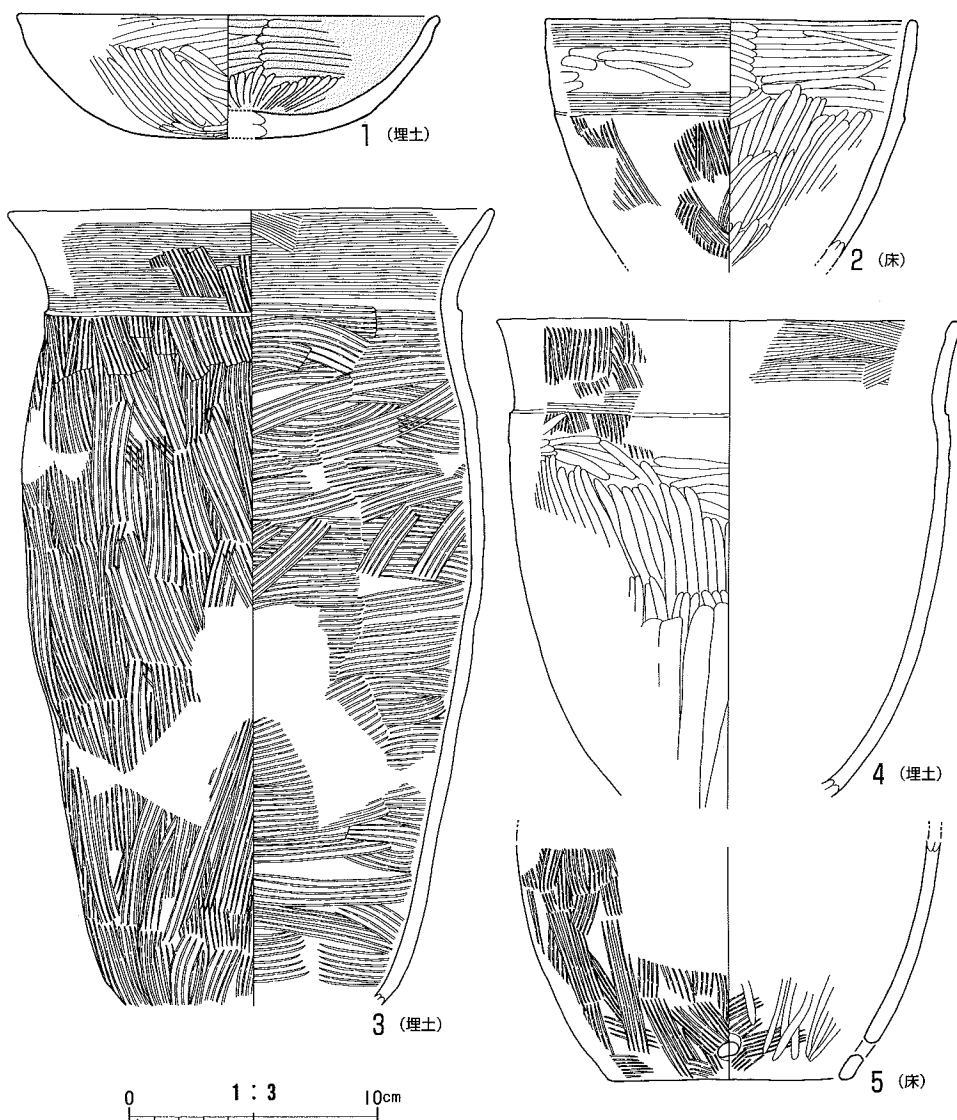
1973年調査区中央部にある。表土下で検出された。埋土は大きく2層に分かれ、A層は黒色～黒褐色土主体B₁層は褐色土粒を含み、B₂層は木炭粒を多く含む黒色土である。

平面形は隅がやや丸くなる方形で、主軸方向はN18° W、規模は南北5.3m、東西5.35m、床面までの深さは0.3～0.5mである。壁下に幅0.1m、深さ0.05m前後の周溝が部分的にめぐる。柱穴は対角線上に配置される4本で、それぞれ2.5m等間の柱間寸法をもち、深さは0.4～0.6mをはかる。

かまどは北壁中央にあり、そではほぼ直線的で、長さが壁から1～1.2m、焚き口幅0.3m、残存する高さ0.4m内外、火床部は手前にあり、よく焼けており、火床部の熱浸透層は0.07mである。煙道は火床面から徐々に高くなり、途中に小ピットがあり、煙出部分はかなり高くなっている。

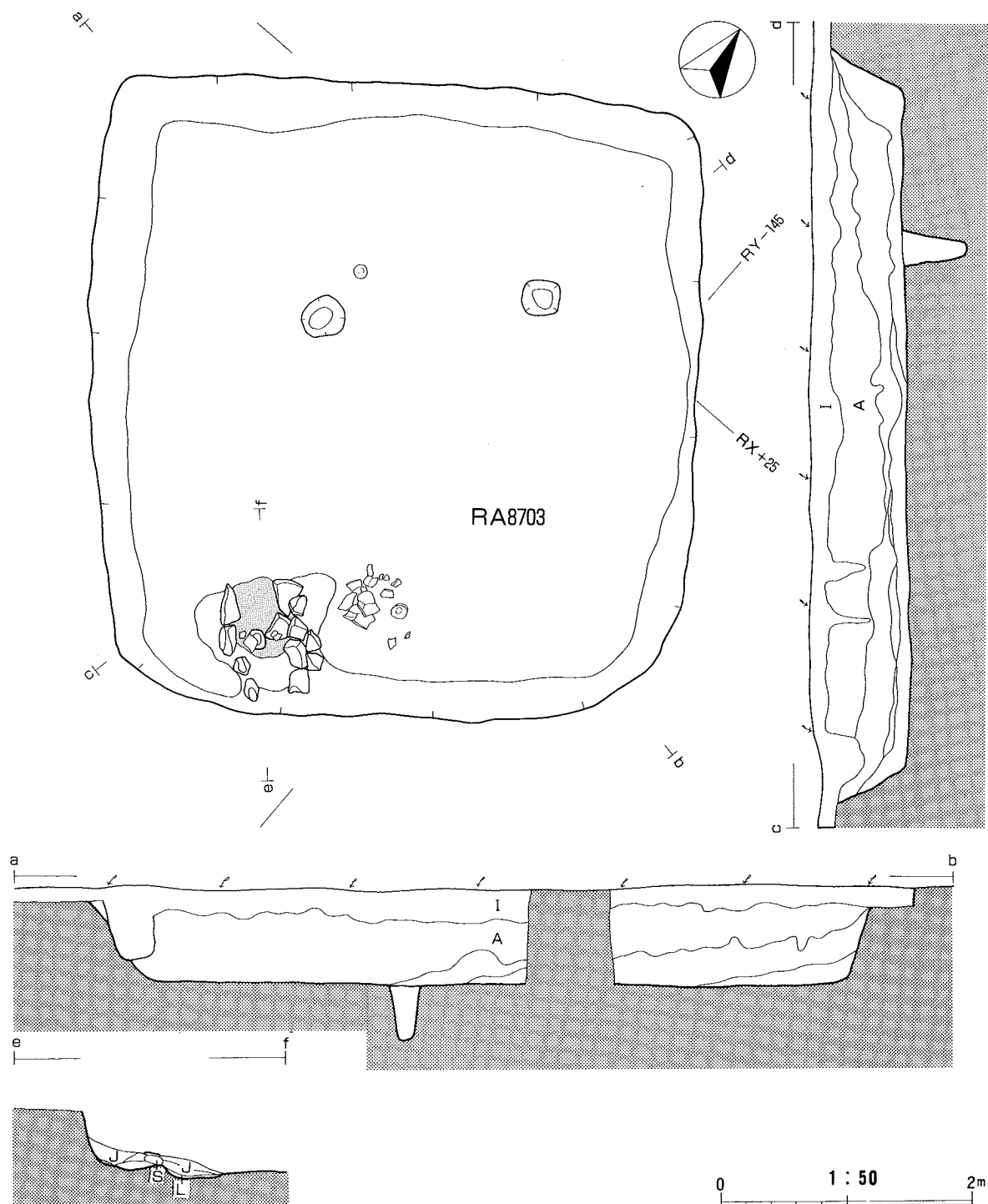
出土遺物

出土遺物は第41図1が土師器坏で、ロクロを使用せず、内外面をヘラミガキ調整し、丸底を呈する。2は土師器鉢で、口縁部直下にわずかな段をもち、口縁部外面がヨコナデとヘラミガキ、体部がハケメ、内面は口縁部から体部にかけてヘラミガキ調整される。3・4は土



第41図 RA8702竪穴住居跡出土遺物

師器甕で、3は頸部に段をもち、内外面とも口縁部がヨコナデ、体部がハケメ調整される。
 4も頸部に段を有するが、口縁部外面にハケメ、内面にヨコナデ、体部外面上半にヘラミガキ、
 下半にヘラケズリ調整を施している。5は土師器甕で、体部下半のみの残存であるが、体部
 下端におそらく4個の孔をもち、底部はつくられない。外面がハケメ、内面がハケメとヘラ
 ミガキ調整されている。



第42図 RA8703竪穴住居跡

RA8703 竪穴住居跡 (第42・43図)

検出遺構

1973年調査区東端部にある。表土下で検出された。埋土は大きく1層で、A層は黒色～黒褐色土主体で、床面直上には炭化材が多く含まれている。

平面形は方形を呈し、主軸方向はS40° E、規模は南北5.0m、東西4.8m、床面までの深さは0.6mである。床面中央北寄りに2個の柱穴が配置される。間隔は1.75m、深さは0.45～0.5mである。

かまどは南壁西寄りにあり、そでは礫を芯材にしたもので、長さが壁から1m前後、焚き口幅0.3m、床部は手前にあり、火床浸透層は0.05mである。煙道はない。

出土遺物

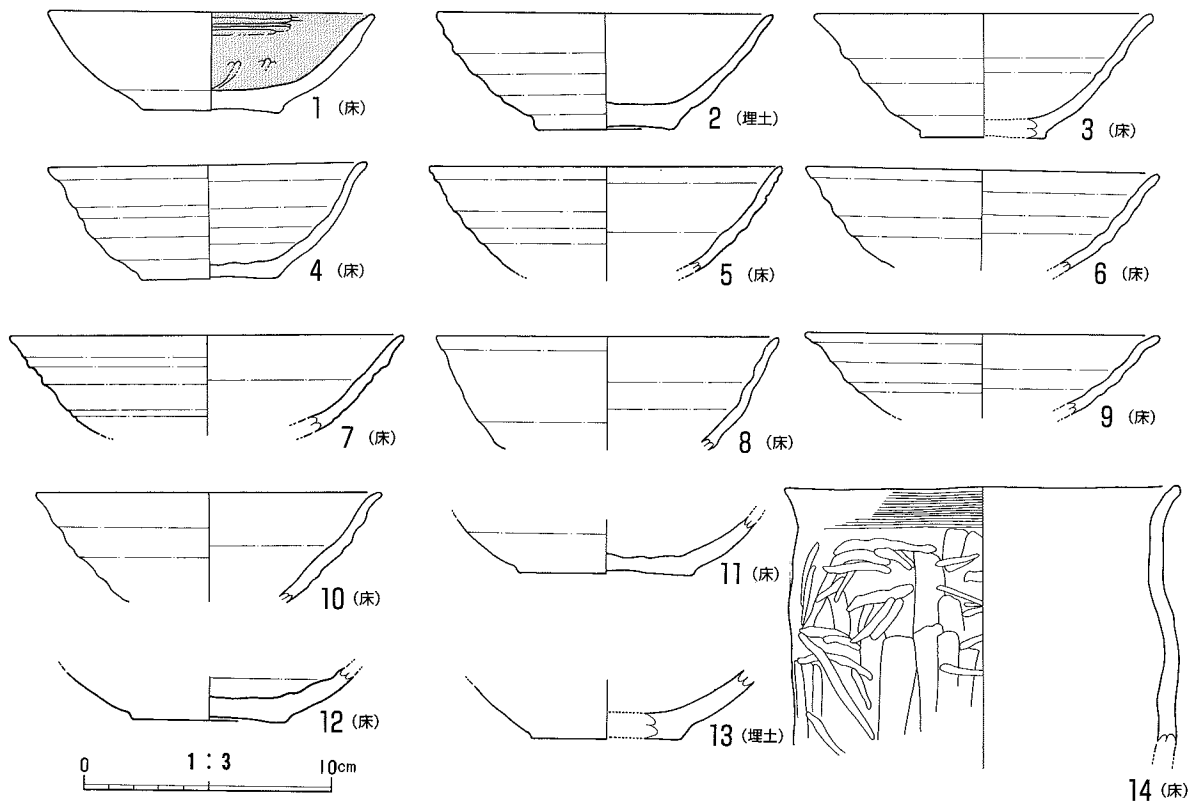
出土遺物は第43図1が土師器坏で、ロクロ成形で底面は糸切り無調整、内面をヘラミガキ調整する。2～13は赤焼土器坏で、すべて糸切り無調整である。14は土師器甕で、口縁部が大きく屈曲しない形状で、口縁部をヨコナデ、体部を不定方向のヘラミガキと下方向へのヘラケズリをおこなっている。

RA8704 竪穴住居跡 (第44・45図)

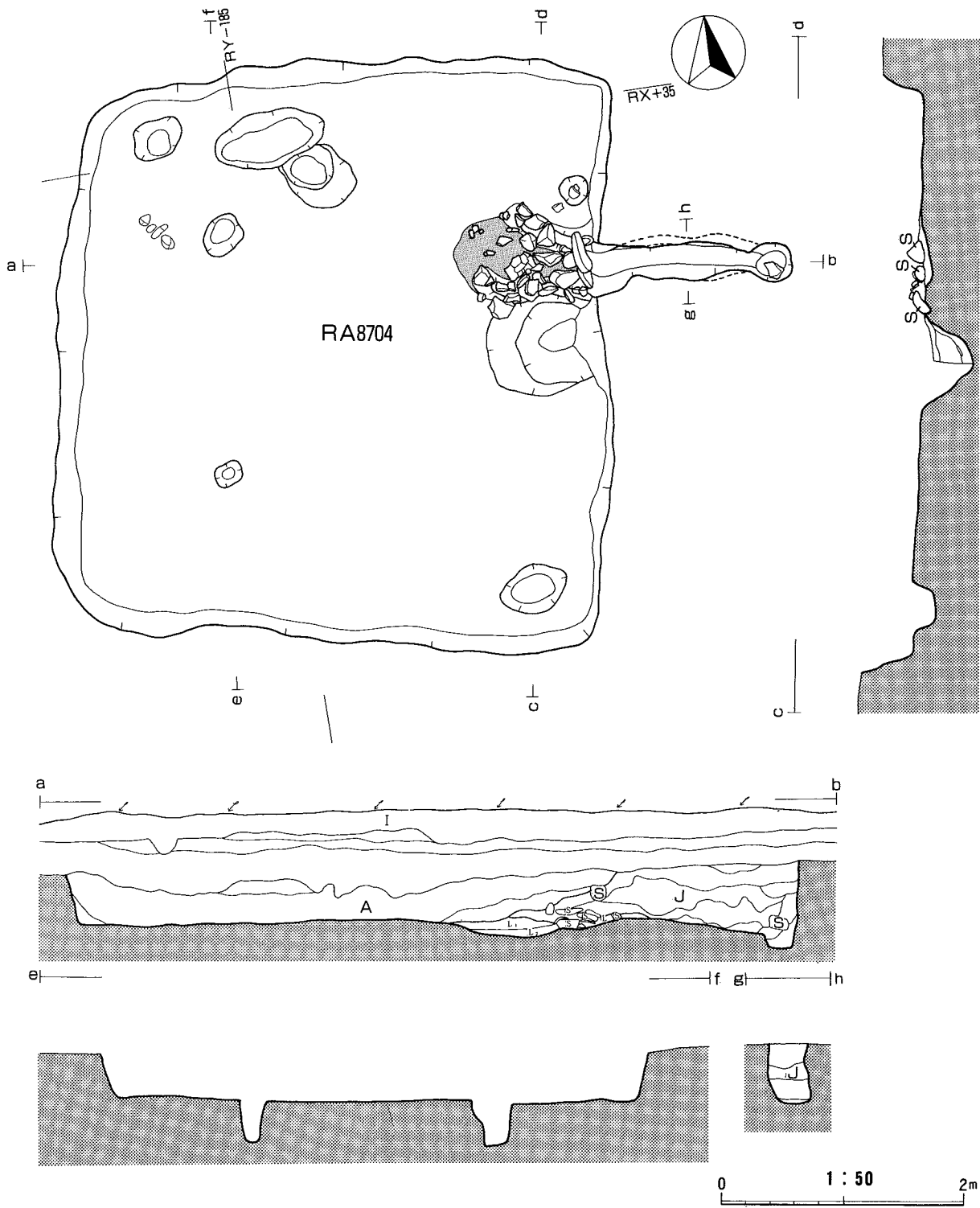
検出遺構

1973年調査区西端部にある。埋土は大きく1層で、A層は黒色～黒褐色土である。J層はかまどと煙道の崩壊土であるが、焼土はあまり含まれていない。L層はかまど火床部の焼土層である。

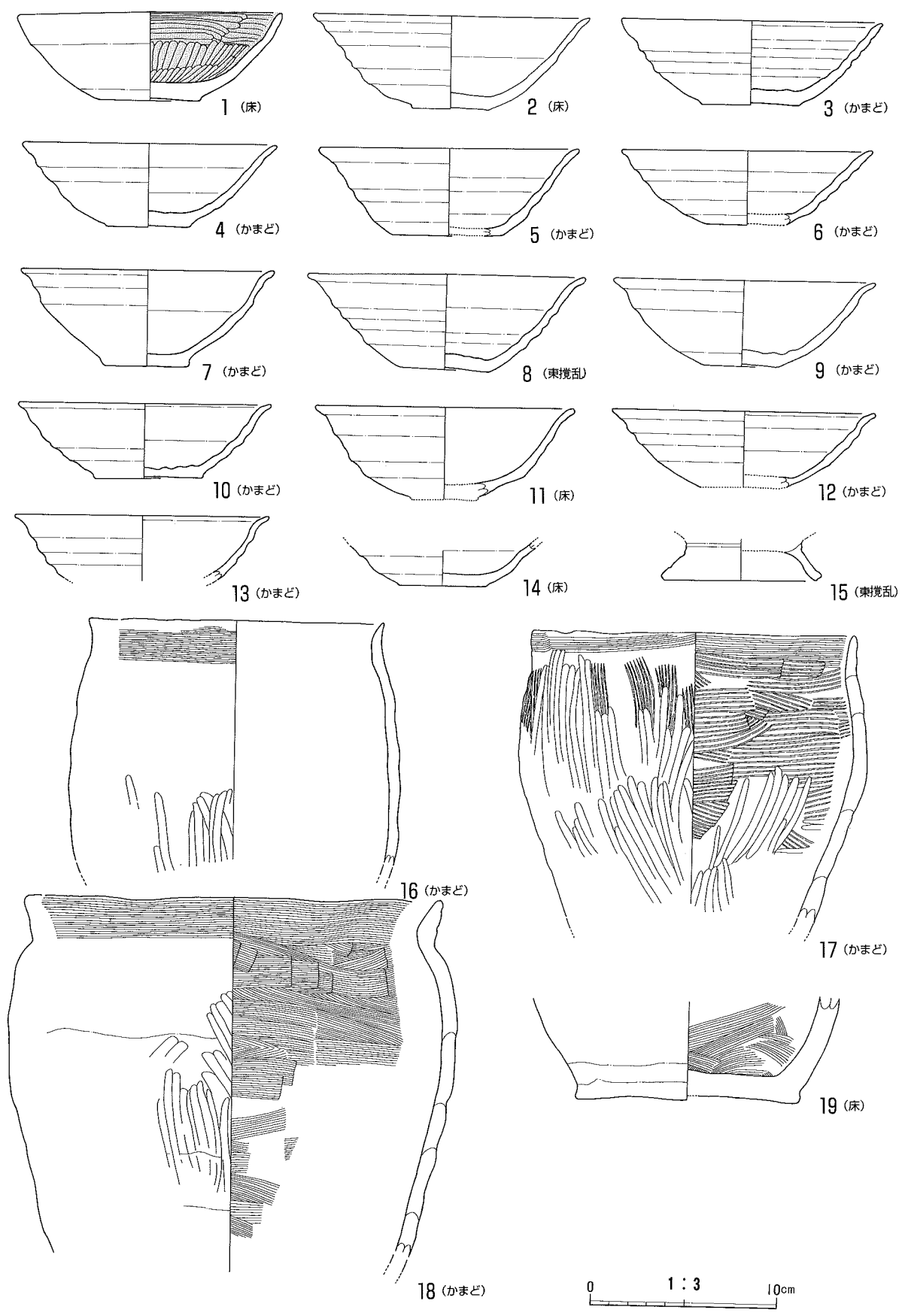
平面形は東壁が直線的であるが、南北壁の西側が丸みをもつほぼ方形を呈する。主軸方向



第43図 RA8703竪穴住居跡出土遺物



第44図 RA8704竪穴住居跡



第45図 RA8704竪穴住居跡出土遺物

はE 9°S、規模は東壁が4.7m、西壁が4.3m、北壁4.3m、南壁4.5m、床面までの深さは0.4～0.45mである。柱穴は西寄りに2個あり、2.0mの柱間寸法をもつ。柱穴の径は0.2～0.35m、深さは0.35mである。また南東隅に径0.4～0.57m、深さ0.18mのピットが、北東隅に径0.25m、深さ0.1m、さらに北西隅に径0.35～0.45m、深さ0.15mのピットがある。その東側に深さ0.24mの不整の落ち込みがみられる。

かまどは東壁中央やや北寄りにあり、かまど上面には多数の礫が散乱して崩れ落ちており、そでや上部に礫が芯材として使われたものと思われる。そではほぼ直線的で、長さが壁から0.8～1.0m、焚き口幅0.4m、火床部は手前にある。煙道は火床面とほぼ同じ高さで、徐々に低くなり、煙出がピット状に深くなっている。かまどの南側に径0.8m、深さ0.43mの円錐状のピットがある。

出土遺物は第45図1が土師器坏で、ロクロ成形で、内面をヘラミガキ調整し、糸切り無調整である。2～14は赤焼土器坏で、すべて糸切り無調整、口縁部が強く外反するものが多い。15は赤焼土器高台坏の高台部で、ハ字状に外側に外傾する。16～19は土師器甕で、口縁部が短く外半もしくは直口気味にたちあがるものである。16は口縁部がヨコナデ、体部がヘラミガキ、17は口縁部が内外ともヨコナデ、体部外面が縦方向のハケメとヘラミガキ、内面が横方向のハケメと縦方向のヘラミガキ調整が施される。18は口縁部ヨコナデ、体部外面がヘラミガキ、内面がヘラナデされ、外面に成形時の巻き上げ痕が残っている。19は甕の底部である。

出土遺物

RA 8 7 1 1 竪穴住居跡 (第46～48図)

第37次調査区中央西寄りにあり、表土直下で検出された。かまど付近を中心に耕作による攪乱が著しい。埋土は自然堆積で、A層は黒色～黒褐色土であるが、A₂層は焼土粒が多く混入する。壁際に堆積するB層は地山の黄褐色土を含む黒褐色土主体である。C層は床構築土で、明黄褐色土を含む暗褐色土である。かまど前面にはかまど崩壊土J層が堆積している。

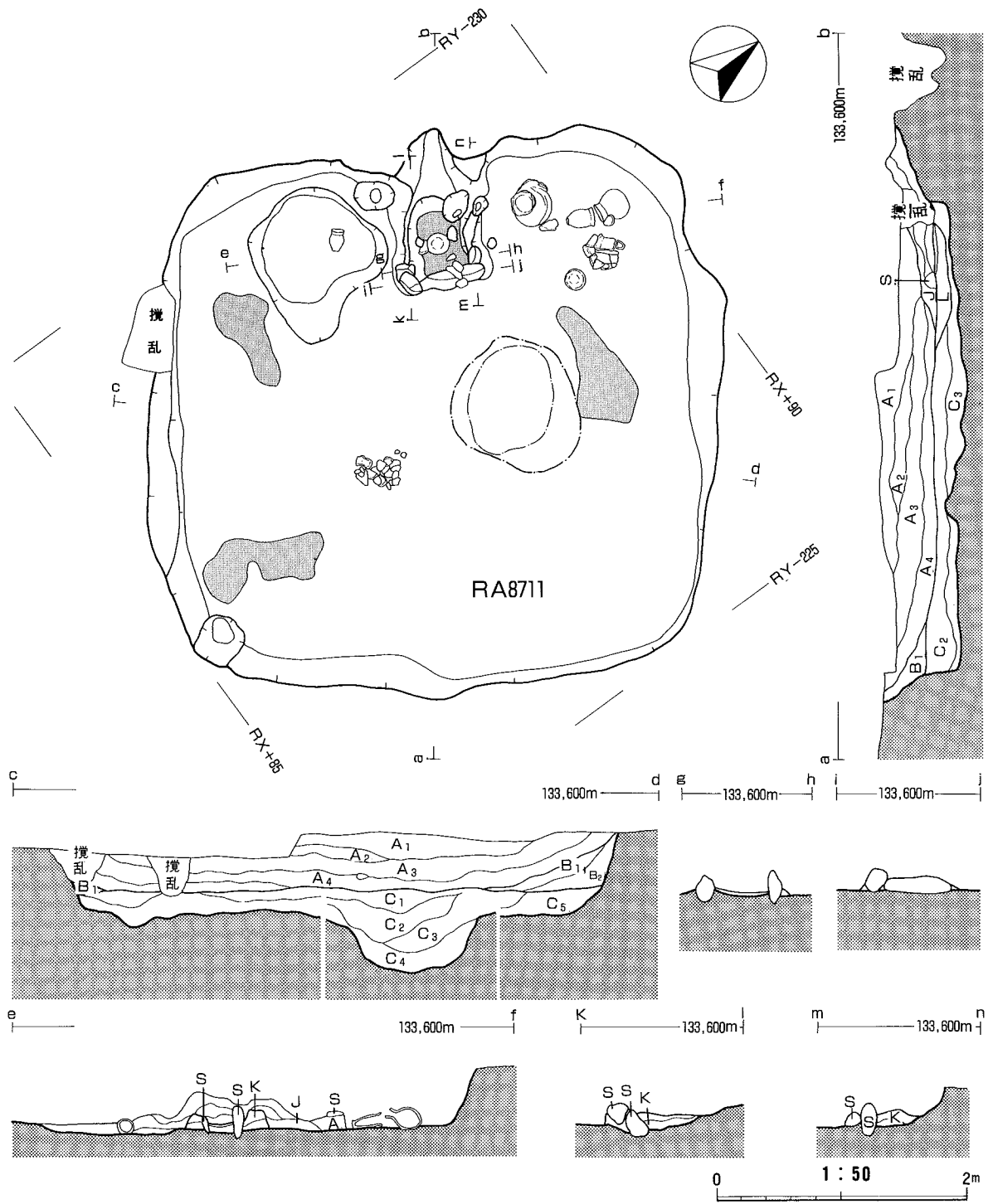
検出遺構

平面形は隅がやや丸くなる方形を呈する。主軸方向はN33°W、規模は北西～南東4.2～4.3m、北東～南西4.55m、検出面から床面までの深さは0.32～0.45mであるが、南西壁際が浅くなっている。床面はほぼ平坦で、全体に堅くなっている。かまどの西側には計0.9～1.0m、深さ0.06～0.1mの浅い掘り込みがある。床面の3カ所が焼けて赤変する部分があり、垂木のような炭化材も南西部に認められ、焼失した可能性が高い。柱穴はみられない。

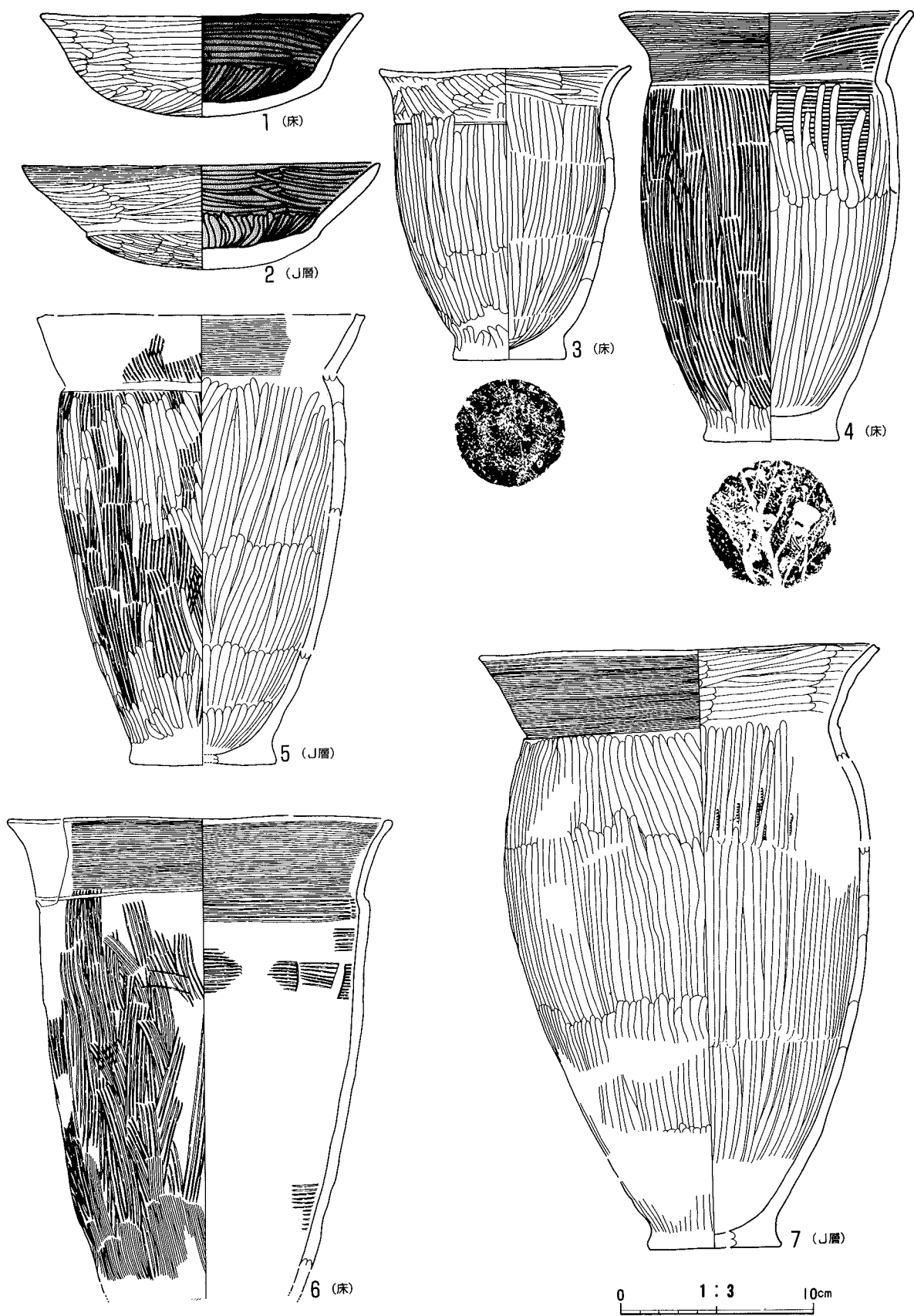
かまどは北西壁中央に位置する。煙道部は攪乱で失われている。かまど袖は基部が残存するが、焚き口部に川原石を芯材に用いており、細長い天井石が落下している。焚き口から燃焼部の長さは0.7m、幅は0.38m、火床面は0.3～0.4mの範囲である。火床面の左右に支脚の石が一对設置されている。

遺物はかまど周辺に集中してみられた。出土遺物は第47図1・2がロクロ未使用の土師器坏である。1は丸底で、体部下半が強く屈曲し、口縁部が外反し、内外面をヘラミガキ調整し、2も丸底で、体部下半の内外に明瞭な段を有し、直線的に外傾する器形で、口縁部外面がヨコナデされるほか内外面ともヘラミガキされている。3は土師器小形甕、4～7は長胴甕、第48図8～10は球胴形の甕である。3は頸部に1条の細い沈線をめぐらし、体部下端を肉厚に直立させる一方底部内面が丸くする特徴を有している。内外面ともていねいなヘラミガキ

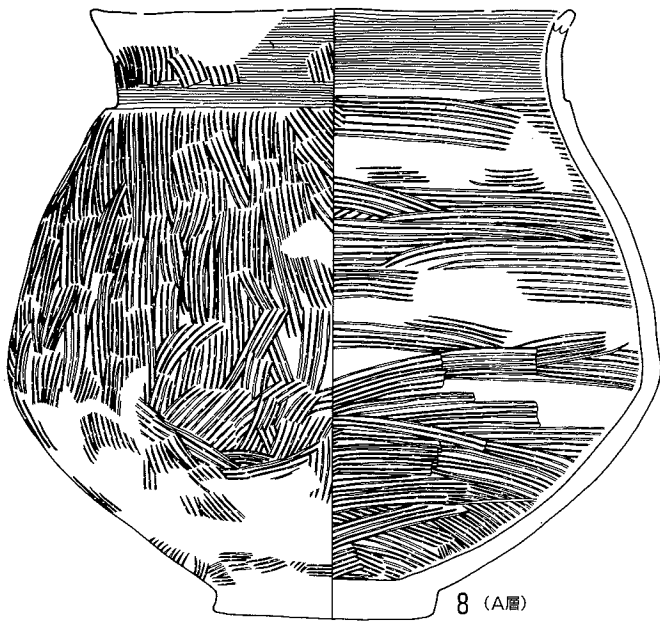
出土遺物



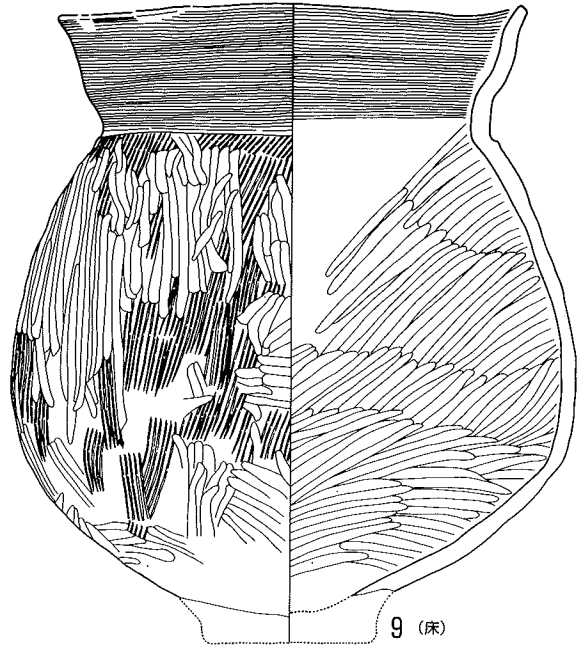
第46图 RA8711竖穴住居跡



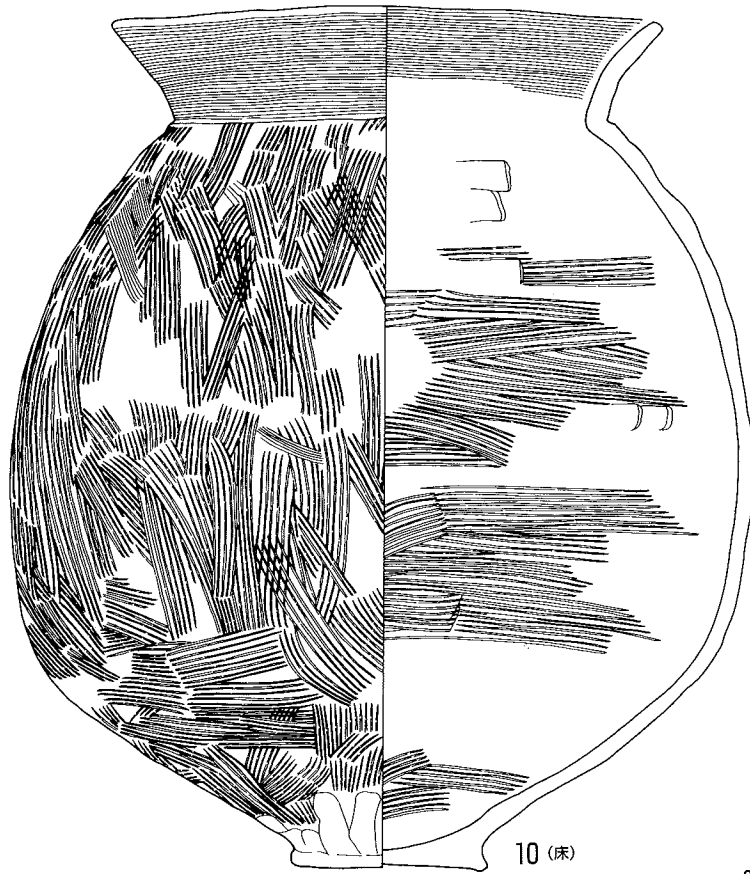
第47图 RA8711竖穴住居跡出土遺物(1)



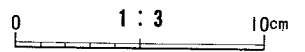
8 (A層)



9 (床)



10 (床)



第48図 RA8711竪穴住居跡出土遺物(2)

調整される。4～7も体部下端の肉厚直立し、底部内面の丸みは3と共通するが、頸部が段となること、口唇部が平坦からくぼむようになるなどの特徴がみられる。器面調整は4が口縁部ヨコナデで、内面の一部にハケメ、体部外面は縦方向のハケメ、下端にヘラミガキ、内面は横方向のハケメのあと縦方向のヘラミガキが施され、底部は木葉底である。5は外面が縦方向のハケメとヘラミガキ、内面が口縁部ヨコナデと体部ヘラミガキ、6は口縁部内外ともヨコナデ、体部外面が縦のハケメ、内面が横のハケメ、7は口縁部外面がヨコナデ、内面が横方向のヘラミガキ、体部は縦方向のヘラミガキで、内面の一部にハケメ痕が残っている。底面は木葉底である。

8～10は最大径が体部下半にある下ぶくれの甕で、頸部に段をもち、底部を円板状に貼り付け、底部内面に丸みを有する。8・10は口縁部がヨコナデ、体部外面が縦のハケメ、内面が横のハケメであるが、9は体部外面にハケメのあと縦方向のヘラケズリ、内面に斜め方向のヘラミガキが施されている。

RA 8 7 1 2 竪穴住居跡（第49～51図）

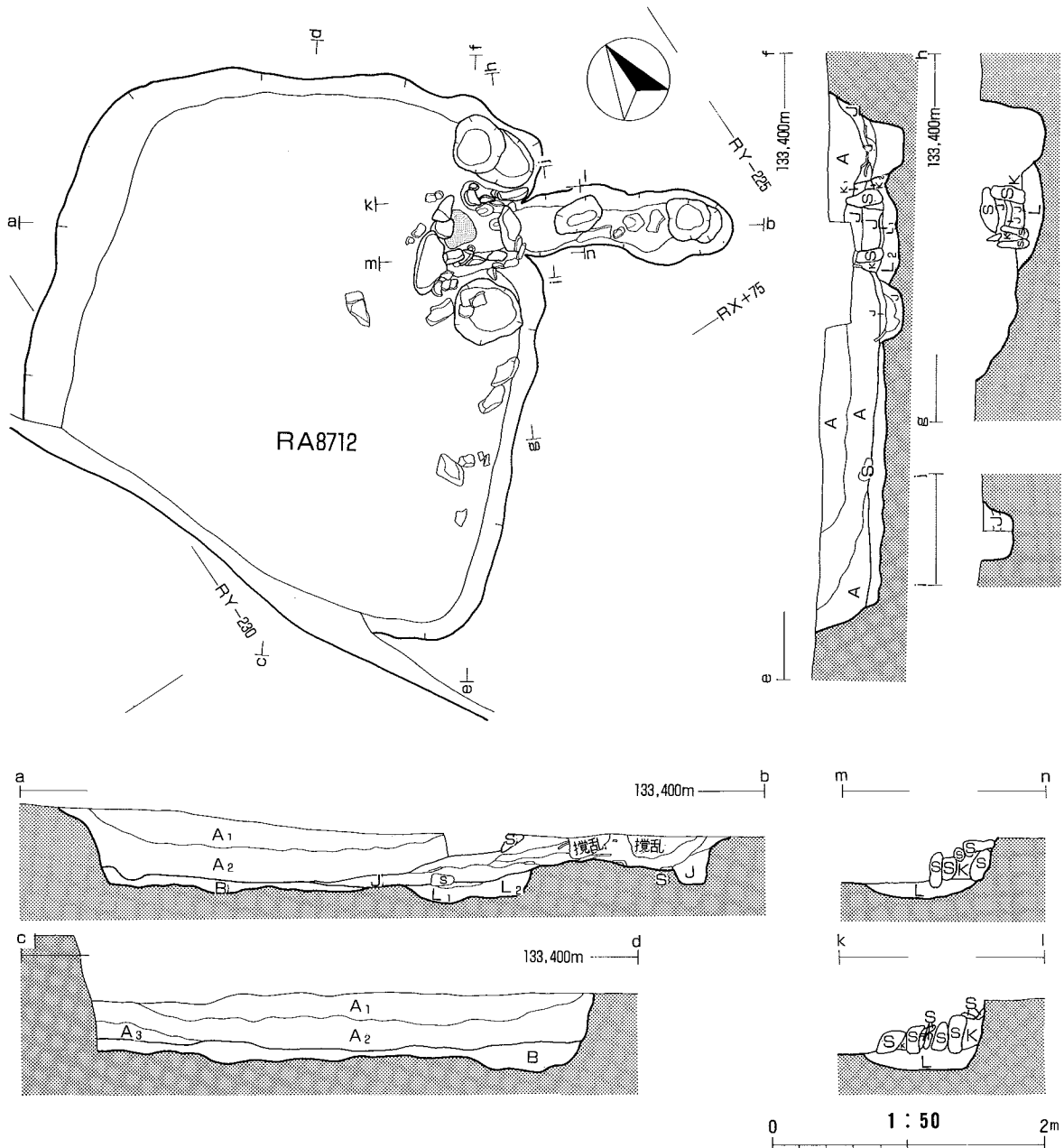
第37次調査区南東隅で検出され、南隅が調査区外へ延びる。埋土はA層が黒色土と黒褐色土との混合土で、床構築土B層が黄褐色土を含む黒褐色土である。 **検出遺構**

平面形は、かまどのある南東壁が長く、北西壁が短い隅丸台形を呈し、特に北隅の丸みが強い。主軸方向はE34° S、規模は南東壁3.8m、北東壁3.15mで、住居中央の北西－南東方向では3.65mである。

かまどは南東壁東寄りに構築されている。かまど周辺の崩壊土中には大小の礫や土師器甕などが多く混入し、かまどの芯材に礫が使用されていたものとみられる。かまどの袖は焚き口にむかってハの字形に開き、4～6個の川原石をたてて芯材としている。天井石は燃烧部奥のものは原位置を保っているが、焚き口部のものは前面に落下している。火床面は径0.3m内外の円形で、その奥に支脚と見られる石がおかれている。かまどの全長は2.2m、煙道の長さは1.55mあり、煙道底面は燃烧部より一段高くなるが、煙出へむかい次第に低くなり、煙出部で、径0.48m、深さ0.37mの円形ピットとなっている。

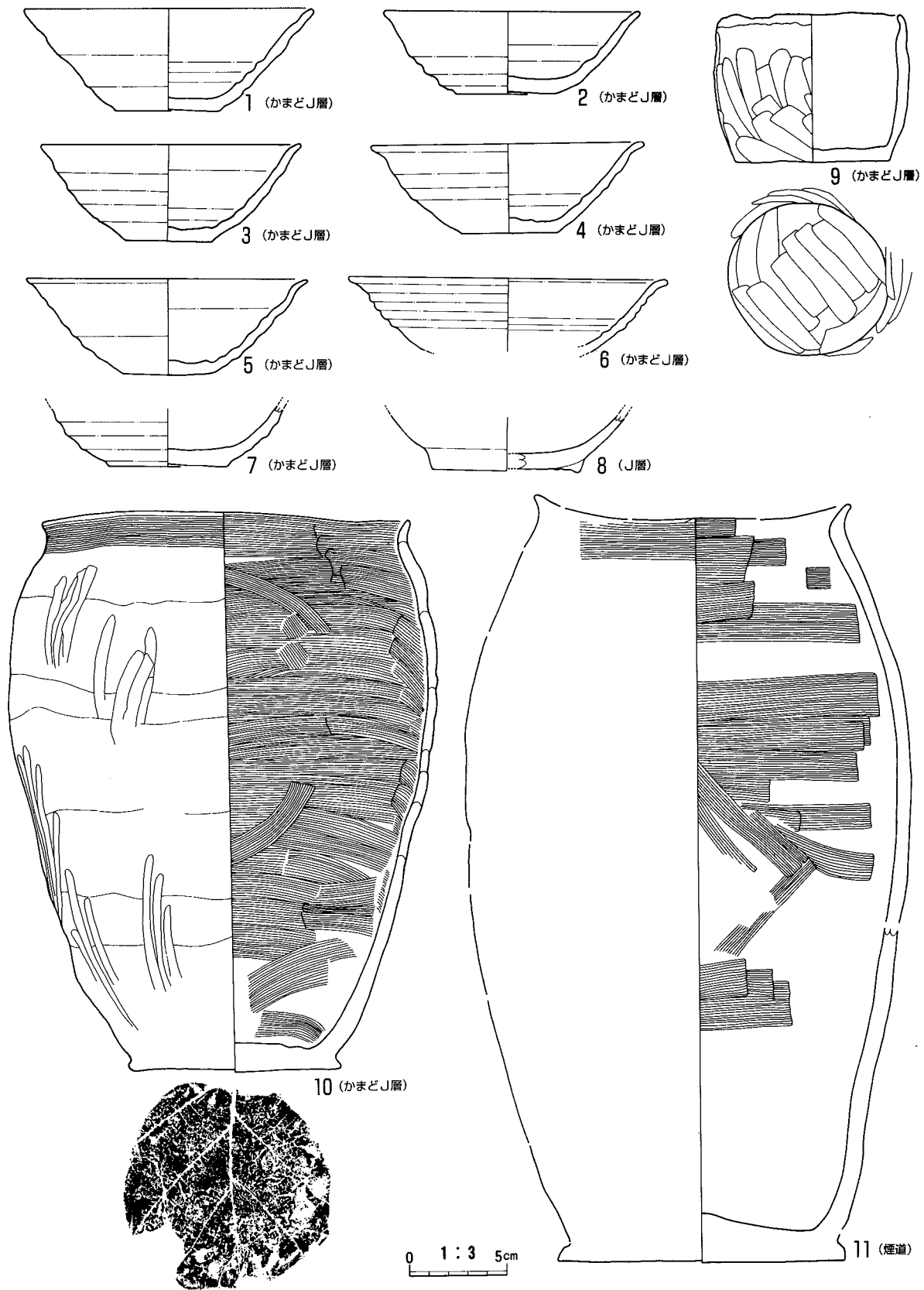
かまどの左右両脇には、径0.4～0.5m、深さ0.17mの浅いピットがみられ、かまど崩壊土が堆積している。

出土土器のほとんどはかまど崩壊土中から出土している。第50図1～7が赤焼土器坏で、**出土遺物** ロクロ成形、底部糸切り無調整である。8は赤焼土器高台坏で、体部下端に低い高台が付けられている。9は土師器小形鉢で、ロクロを使用せず、体部から口縁部にかけて直立し、口縁部がわずかに内湾する器形で、体部と底面がヘラケズリされる。10・11は土師器甕で、最大径は口縁部でなく体部上半にあり、口縁部が短く外反し、体部下端が外に張り出す。口縁部外面はヨコナデ、内面は体部にかけてヘラナデが施される。10は部分的にヘラミガキされるが、巻き上げ痕が明瞭に残っており、木葉底である。11は体部全面がヘラケズリされており、胎土内の砂の移動が認められるが、ケズリの単位は確認できない。第51図12はロクロ成形の赤焼土器甕で、頸部のくびれがほとんどなく、また口縁部の外反もゆるやかである。成形後縦方向のヘラケズリが施される。

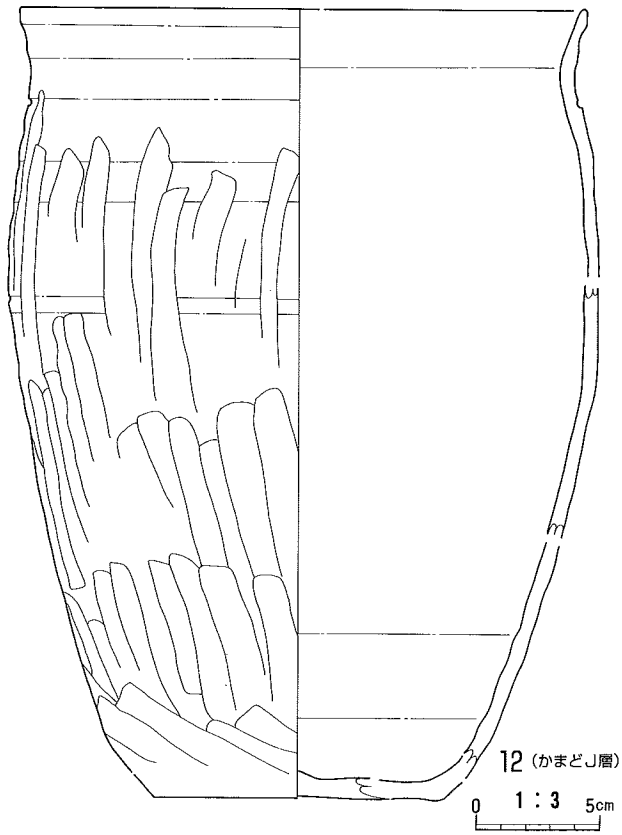


第49図 RA8712竪穴住居跡

既報告の住居跡 大新町遺跡では4次調査のRA8707・8708・RE8701、大館町遺跡1973年調査のRA8701～8704、1次調査のRA8705、2次調査のRA8706、23次調査のRA8709、29次調査のRA8710、37次調査のRA8711・8712、計13棟の住居跡が確認されている。このうち大新町遺跡RA8707・8708・RE8701(1982年度)、大館町遺跡RA8705(1980年度)・8706(1981・1983年度)・8709(1987年度)・8710(1988年度)は各年度の大館遺跡群発掘調査概報で報告している。



第50図 RA8712竪穴住居跡出土遺物(1)



第51図 RA8712竪穴住居跡出土遺物(2)

IV 調査のまとめ

1 縄文時代の遺構と集落

(1) 小屋塚遺跡の様相

小屋塚遺跡の調査はほとんど住宅建築にともなうもので、面積も狭く、個々の調査だけでは遺跡の範囲や性格を考えることは困難であったが、調査を重ねるうちに次第に遺跡の様相が明らかになってきた。

台地南半の頂部は縄文時代中期の遺構が密集しており、特に大形のフラスコ形土壇が1968年や14次調査区で集中して検出された。フラスコ形土壇は上端径が1.65～3.05m、底面径が1.6～2.95m、深さが1.35～2.2mで大形のものである。時期はほとんど出土遺物が少なくはつきりしないが、1基は大木8b式期である。

これと同じ規模のフラスコ形土壇は前九年遺跡でも確認されている。前九年では、上端径が1.9～2.5m、底面径が2.25～2.75m、深さが1.6～2.15mとほぼ同じ規模である。また径1m前後のピーカー形土壇もみられる。ともに貯蔵穴として使用されたことはほぼ定説化している。大形のフラスコ形土壇は当然ながらその容量は大きく、小形のは容量が小さい。これが時期差なのか出土遺物が僅少ではつきりしないが、その用途や貯蔵量の寡多による社会的背景が存在するものと予想される。隣接する大新町や大館町遺跡では、深さや底面径が1m前後のフラスコ形土壇が一般的で、小屋塚や前九年のような大量の貯蔵を必要とされなかったものであり、両遺跡が貯蔵空間として位置付けられていた可能性も考えられる。

竪穴住居跡は68年調査分も合わせ2棟が確認されており、重複するほどの密度ではないようである。出土遺物から1棟は大木8b式と確認される。フラスコ形土壇と大きな時間差は認められない。

南半頂部の東側は緩やかな傾斜で東に落ち込み、その傾斜面に遺物包含層（IV層）が形成されている。包含層底面（地山）の東西の比高差は3mほどである。時期は大木7a式の縄文時代中期前葉を中心とする。遺構は散発的で、溝状陥し穴や不整形な土壇がみられるだけである。この包含層は南東の9次調査区付近で最も遺物を包含している。これを形成させた人々の生活の場については、これまでのところ頂部に当該期の遺構はまだ確認されていない。

また頂部西側の斜面には縄文時代後期前半の遺物包含層（II層）が形成されているが遺構もやはり散発的で、土壇はみられるも住居跡などは検出されていない。この後期の包含層はさらに西に広がり、大新町遺跡の東側にも形成されている。大新町では後期の遺構は、竪穴住居跡1棟、径1.2m前後の断面がすり鉢形を呈する土壇30基ほどが検出されている。小屋

塚遺跡側での遺構のあり方はまだ不明であるが、大新町側からの遺物の投棄または両遺跡からの投棄が想定される。

北半の状況 次に北半の状況をみると、遺構等は散発的になり、北東部の12次調査区で溝状の陥し穴状土壇3基、フラスコ形土壇2基、ピーカー形土壇1基などとなっている。遺物も散発的で、遺構の時期が明確なものはない。北西部の25次調査区では土壇3基のほか前述のような後期の遺物包含層が形成されている。

このように小屋塚遺跡は、その主体が南半にあり、縄文時代中期前葉～後期前葉にかけての遺跡である。中期前葉は南東部緩斜面に遺物包含層を形成させ、中期中葉には台地頂部に竪穴住居や大形のフラスコ形土壇を配置させ、さらに後期前葉に西側斜面に遺物包含層を形成させているのである。

(2) 縄文時代中期遺跡の類型

小屋塚遺跡では縄文時代中期の竪穴住居跡やフラスコ形土壇が検出されたが、中期の遺構は隣接する遺跡でも竪穴住居跡等が確認されている。

大館遺跡群 小屋塚の東側にある前九年遺跡では縄文時代中期大木9式期の竪穴住居跡1棟、前期～中期のフラスコ形土壇や陥し穴状土壇数基が調査されている。また小屋塚の西の大新町遺跡では中期大木8b式期前後の竪穴住居跡5棟が散発的にみられる。

その西の大館町遺跡は中期の竪穴住居跡が数百棟検出されている。集落の形態は南側に開口部をもつ馬蹄形に竪穴住居群が配置され、中心部は遺構が希薄となっている。開口部に大量の土器が投棄されている。時期は大木7a～9式で、竪穴住居跡は8a～8b式に集中しているが、それ以前の土器が遺物包含層に多量にみられ、古い住居も多数存在していたものとみられる。さらにその西の大館堤遺跡では調査面積が小さく全体像は明らかではないが、縄文時代中期の竪穴住居跡が1棟確認されており、希薄ながらも集落遺跡ととらえられる。

このようにほぼ同時期に異なった集落形態があり、大館町遺跡を中心とし、周辺に小規模な集落が配されているのである。

長期拠点集落 中心となる大館町遺跡は、土器型式が数型式にまたがり数百年にわたる存続期間で、繰り返し占地されている。こういった集落を「長期拠点集落」と呼ぶこととしたい。なお近年大木8a～9式の細分が進んで、それぞれの竪穴住居跡の時期決定の単位も細かくなってきているが、たとえば大木8b-3式期の竪穴住居跡が重複する例も少なくなく、竪穴住居そのものの存続はあまり長くなかったものと考えられる。

派生集落 これに対し、前九年・小屋塚・大新町・大館堤遺跡は土器型式1型式程度で、数カ月～数十年程度と短期で、散発的な集落形態であり、「派生集落」と呼んでおきたい。その中でも小屋塚のように大形のフラスコ形土壇を有する集落があり、機能分担があった可能性も指摘できる。

繫遺跡群 こういった拠点・派生集落の関係は、繫遺跡周辺にも確認される。繫V遺跡は雫石川南岸の段丘上にあり、北側を開口部とする馬蹄形集落と考えられている。多数の竪穴住居跡が配置され、開口部に大量の遺物が投棄されている。時期は大木7a～10式で、7b～8b式の遺

構が多く、包含層にはそれ以前の土器が多く、大館町遺跡と類似する拠点集落である。

繫Ⅶ遺跡では調査が全域に及んでいないが、大木9～10式の大形のフラスコ形土壇など59基と竪穴住居跡8棟が斜面に検出されている。また繫Ⅴの北東の繫Ⅲ遺跡ではほぼ全掘された段丘縁辺に大木8a式期4棟、大木10式期36棟の竪穴住居跡が確認されており、段丘縁辺の塊状集落である。さらに繫Ⅲ遺跡の対岸にあたる堂ヶ沢遺跡でもほぼ集落全体を調査しており、大木9式期の竪穴住居跡12棟が緩斜面の東西に分かれて偶蹄形の配置が確認されている。

繫Ⅴの西2kmの塩ヶ森遺跡では前期初頭1棟、大形住居を含む大木7a～7b式の竪穴住居跡41棟、8b式1棟、9式1棟、そしてフラスコ形土壇115基が住居域と重複するように検出された。住居域の外側の段丘緩斜面には多量の遺物包含層が形成されている。このほか繫Ⅴ遺跡の北にある南の又遺跡や堂ヶ沢遺跡の西の新城館遺跡で大木9式の竪穴住居跡数棟が確認されている。

繫Ⅴ遺跡の拠点集落に対し、大木8a式期の繫Ⅲ遺跡や大木8b式期の塩ヶ森遺跡を派生集落と位置付けることができよう。

ただし繫Ⅴ遺跡だけが常に拠点集落であった訳でなく、塩ヶ森→繫Ⅴ→堂ヶ沢→繫Ⅲ遺跡と、繫周辺の主体的な集落は変遷している。塩ヶ森の大木7a～7b式と繫Ⅴの7a～7b式とは主体となる時期に時間差があり、また大木9～10式期以降にも繫Ⅴから離れて、繫Ⅲや堂ヶ沢遺跡のように土器型式1型式単位の塊状～偶蹄状の集落に変質していく。その意味で大館遺跡群の集落群とは異なった様相となっている。これらを「短期拠点集落」とよぶこととしたい。それでも繫Ⅶ遺跡のように多数のフラスコ形土壇をもつ重複しない程度の住居で構成される集落や、南の又や新城館のように数棟単位の派生集落も近隣地域にもつなど集落間の格差は残されている。

短期拠点集落

さらに拠点集落と考えられる縄文時代中期の遺跡をみると、小山・川目C遺跡をあげることができる。小山遺跡の集落形態はほとんど未調査ではっきりしないが、大木8a～8b式の竪穴住居跡の重複は大館町に匹敵し、中期前～中葉の土器が多く出土している。周辺ではフラスコ形土壇を多数検出している仁反田遺跡、大木7a式の大形住居が確認されている砂溜遺跡などがあり、繫遺跡群と類似した集落関係と理解される。

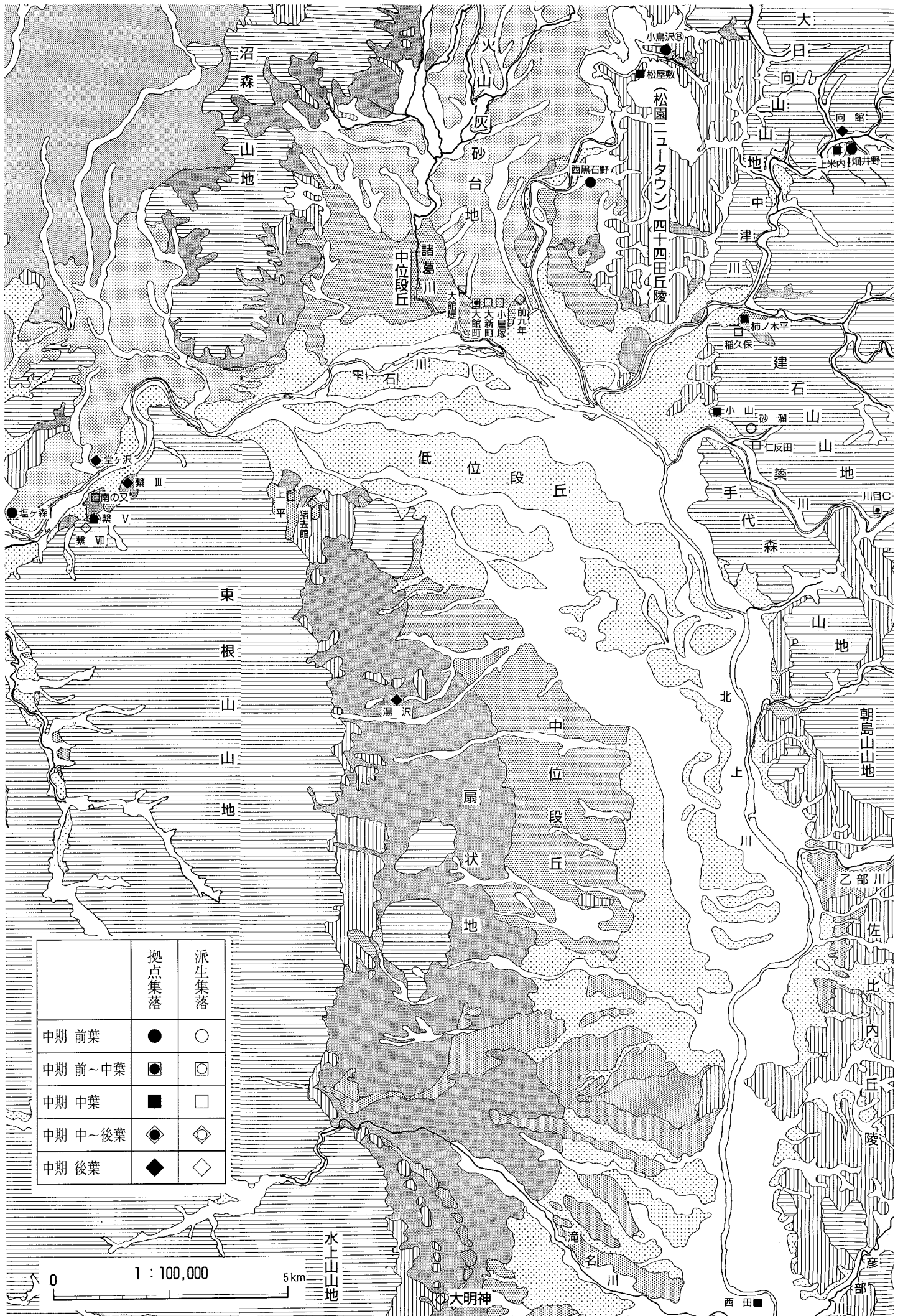
小山・川目
遺跡群

川目C遺跡は大木7a～8b式の集落で、多数の竪穴住居跡と大形のフラスコ形土壇は7b～8b式が多く、包含層に7a～7b式の土器が投棄されている。集落形態は現在調査中であるが、長期拠点集落と位置付けることができそうである。周辺の遺跡は未調査のため不明である。

柿の木平遺跡は大木8b式を中心とし、遺構密度が高い集落であるが、時期的には短期間であり、短期拠点集落である。周辺遺跡として稲久保遺跡がある。

このようにみると短期拠点集落は大木7a～7b式や大木9～10式に多く、長期拠点集落は大木7a式から営まれ、大木7b～8b式に盛期をむかえる集落が多いといえる。それぞれに数棟単位の派生集落を周辺にもっていることも特徴のひとつである。

小屋塚遺跡は、縄文時代中期集落の類型でいえば、「派生集落」に位置づけられるが、大形のフラスコ形貯蔵穴をもち、周辺集落の貯蔵空間としての意味が大きかったものと考えられる。また遺跡周辺に形成される中期前葉や後期の遺物包含層から該期の生活遺構もあったとみられ、今後の課題のひとつである。



第52図 盛岡周辺の縄文時代中期の主要遺跡

2 古墳～平安時代の住居跡と土器

(1) 竪穴住居跡の特徴

小屋塚・大新町・大館町遺跡で古墳時代～平安時代にかけて竪穴住居跡が15棟検出された。比較的調査の進んでいる大館町遺跡に多くみられる傾向があるが、特に偏在的なあり方ではないようである。密度はあまり高くはなく、また広範囲に広がる集落と位置付けられよう。集落の範囲はまだはっきりしないが、これらを1集落とみておきたい。以下この集落遺跡を大館遺跡群と呼ぶ。 広範囲の集落

これらの時期は7～8世紀代9棟、9～10世紀代6棟である。時期細分は次項で述べるが、7世紀中葉から始まり、8世紀後葉に最も多く、10世紀後葉まで続いている。7世紀の竪穴住居跡は規模が一辺3～5mと小～中形で、北壁中央にかまどを有している。 7世紀

遺跡	次数	住居跡	主軸	規模	かまど位置	柱穴	備考(時期)
大館町	73年	RA8701	E31° N	3.4×3.4	北東壁中央	なし	8C後葉?
大館町	73年	RA8702	N18° W	5.3×5.3	北壁中央	4本	8C中葉
大館町	73年	RA8703	S40° E	5.0×4.8	南東壁中央	2本	10C前葉
大館町	73年	RA8704	E9° S	4.4×4.5	東壁北寄り	2本	10C前葉
大館町	1次	RA8705	N39° W	7.5×7.6	(未検出)	4本	8C後葉
大館町	2次	RA8706	N35° W	8.3×8.4	北西壁中央	4本	8C後葉
大新町	4次	RA8707	N44° W	3.4×3.4	北西壁中央	なし	8C後葉
大新町	4次	RA8708	N44° W	3.7×4.0	北西壁中央	なし	8C後葉
大新町	4次	RE8701	—	なし	なし	なし	10C後葉
大館町	23次	RA8709	(不明)	?×5.0	(未検出)	(未検出)	7C中葉
大館町	29次	RA8710	(不明)	(不明)	(未検出)	(未検出)	9C後葉
大館町	37次	RA8711	N33° W	4.2×4.5	北西壁中央	なし	7C前葉
大館町	37次	RA8712	E34° S	3.6×3.8	南東壁北寄り	なし	10C前葉
小屋塚	9次	RA8713	N15° W	2.8×?	北壁中央	なし	7C中葉
小屋塚	20次	RA8714	(不明)	(不明)	(未検出)	(未検出)	10C後葉

8世紀 8世紀になると一辺3.5～4m前後の中形と7.5～8.5mの大形のものが見られる。大形のものには4本柱で北壁中央にかまどをもつ。中形のものも北壁中央にかまどをもつが、柱はない。ともに埋土の上部に粉状パミスを堆積させている。

9～10世紀 9世紀後葉～10世紀中葉の竪穴住居跡は一辺3.5～5mと中形で、かまどの位置は東壁～南壁に移る。柱はないかもしくは2本となる。

10世紀後葉の2棟は、1棟が部分調査でかまどは未確認であるが、1棟はかまどが見られず、この時期にはかまどが消滅していたことをうかがわせる。

火山灰 ところで灰白色火山灰（いわゆる粉状パミス）は7世紀代および9世紀後葉～10世紀中葉の竪穴住居跡には堆積しておらず、8世紀後葉と10世紀後葉の埋土に堆積している。このことから2時期にわたる降灰と理解される。古いものは十和田a火山灰、新しいものは白頭山火山灰に比定できるであろう。

(2) 古墳～平安時代の土器様相

15棟の竪穴住居跡から出土した土師器のうちロクロ未使用期のもはR A 8701・8702・8705・8706・8707・8708・8709・8711・8713、ロクロ使用期のもはR A 8703・8704・8710・8712・8714・R E 8701（原報告ではR E 701）である。またR E 8701関連資料としてR D 8702（原報告ではR D 702）もあげられる。結論を先に述べると、これまでの先学の編年作業から次のように大まかに変遷するものと考えられる。

R A 8711・8709・8713→8701?・8702・8705・8706・8707・8708

R A 8703・8704・8710・8712→8714・R E 8701・R D 8702

ロクロ未使用期 まずR A 8711出土土師器は坏が丸底で、体部下半の内外に明瞭な段を有し、口縁部が直線的に外反し、内外面をヘラミガキ調整されている。土師器小形甕、長胴甕は頸部に1条の細い沈線をめぐらすか段をつくり、口縁部は外湾気味に外反し、体部下端を肉厚に直立させる一方底部内面が丸くなる特徴を有している。口唇部がまるくなるものや平坦からくぼむものがある。器面調整は口縁部はほとんどヨコナデで、体部外面は縦方向のハケメまたはヘラミガキ、内面は縦方向のヘラミガキが施される。球胴形の甕は最大径が体部下半にある下ぶくれが特徴で、頸部に段をもち、底部を円板状に貼り付け、底部内面に丸みを有する。口縁部がヨコナデ、体部内外面が縦のハケメまたはヘラミガキが施されている。

R A 8709は球胴形の甕のみであるが、口縁部に段を有しやや外反が弱く、最大径が体部上半にあがり、体部下端を肉厚に直立させ、底部内面が丸くなる。調整は口縁部～体部外面が縦のハケメ、内面が横のヘラミガキとハケメである。この器形はR A 8711の下ぶくれの甕とは異なるが、時間差については、相伴土器がなく明らかにできない。またR A 8713は全体器形のわかるものはないが、口縁部の外反が弱く直線的で、口唇部が平坦からくぼんでおり、R A 8711やR A 8709とほぼ同時期であろう。

R A 8702出土土師器は坏が内外面をヘラミガキ調整し、平底に近い丸底を呈する。鉢は口縁部直下にわずかな段をもち、口縁部外面がヨコナデとヘラミガキ、体部がハケメ、内面は口縁部から体部にかけてヘラミガキ調整される。長胴の甕は頸部に段をもち、口縁部内面が

ヨコナデ、体部がハケメ調整され、外面は口縁部からかけてハケメを施しており、上半にヘラミガキ、下半にヘラケズリ調整を施すものもある。底部内面は平底と考えられる。坏が丸底風を呈するも段をもたないことから R A 8711 とは明らかに時間差があり、また甕が口唇部が平坦とならず、底部内面が平底と推定され、R A 8709 や R A 8713 とは連続性が認められない。R A 8706 は土師器坏が丸底風の平底となり、高坏内面不明瞭で外面明瞭な段を有する。甕や甕は口縁部にわずかの段を持ち、口縁部から体部にかけて外面縦方向の、内面横方向のハケメが連続し、その後ヘラミガキ調整が加えられる。口縁部から体部にかけての連続的な調整は R A 8709 から R A 8702 にみられる特徴である。

R A 8707 は坏が明確な平底で、内外面から底部に至るまでヘラミガキされる。甕は口縁部に沈線または段をもち、口縁部ヨコナデで、体部外面がヘラミガキ、内面がヘラナデされる。平底の坏や甕の口縁部と体部の調整の分離は R A 8706 とは異なった要素である。

以上のことから、R A 8711・8709・8713 を最も古く位置付け、その後時間的空隙において R A 8702・8706、さらに 8707 と続くものと考えられる。なお遺物の出土が少ないものの R A 8701・8705・8708 は 8702 や 8706 または 8707 に近いものであろう。

R A 8711 出土土器は滝沢村高柳 Dh63 住居跡の内外有段の坏、底内面の丸い甕など特徴に共通する。近接する滝沢村諸葛川 AJ33 住居跡は内面無段の坏が主体となり、甕の底内面の丸みが平板化することから、後出するものと考えられる。ともに宮城県の栗罎式に比定され、R A 8711 は栗罎式の前半に位置づけられよう。

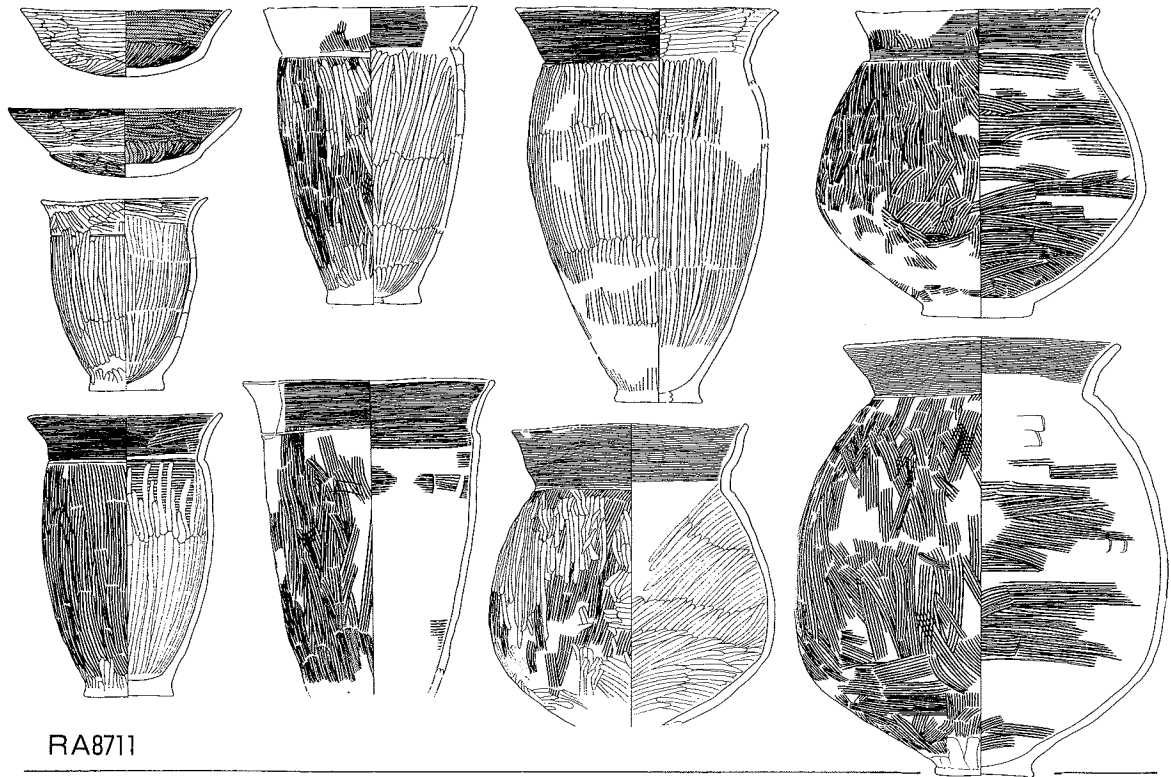
R A 8702・8706 は国分寺下層式に比定されるが、坏が小形で内外の段がなく、平底化することから、その後半に位置づけられる。R A 8707 は明確な平底となり、最終末になろう。

次にロクロ使用期の土器は、その製作技法及び焼成方法により、土師器・須恵器・赤焼土器に大別される。坏類に限定するとすべてロクロ成形で、土師器は内面（一部外面も）をヘラミガキし、黒色処理を施す酸化炎焼成のものである。須恵器は還元炎焼成、赤焼土器はロクロ成形し、内面処理（ヘラミガキや黒色処理）を施さない酸化炎焼成のものである。なお大館遺跡群では須恵器はほとんど出土していない。また甕類ではロクロ成形とロクロ非使用のものがあり、前者は坏類と同じように赤焼土器、後者を土師器の範疇として扱う。

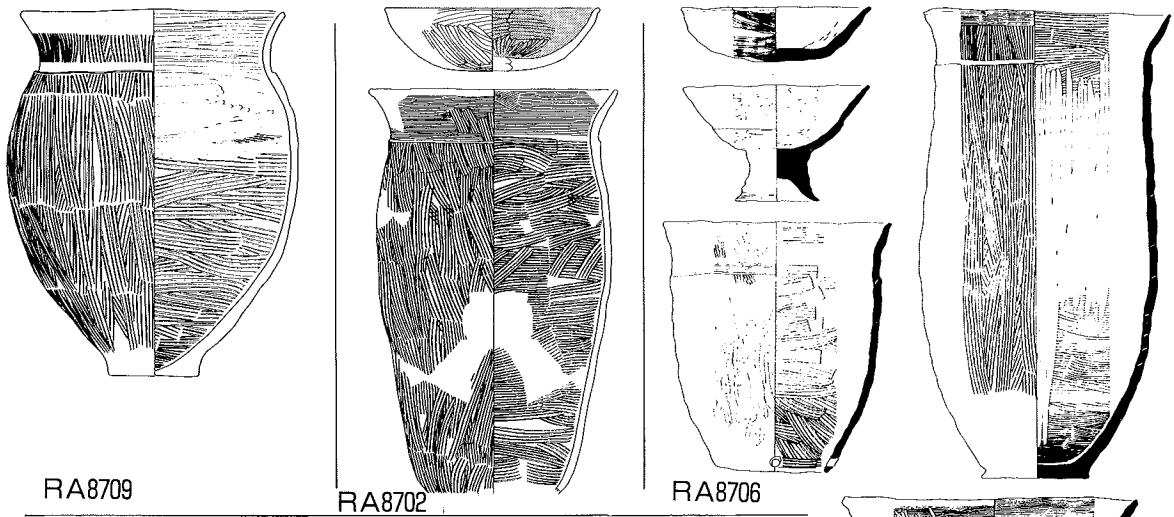
ロクロ使用期

まず R A 8710 はロクロ成形で回転糸切りの赤焼土器坏とともにロクロ非使用の甕がともなう。甕は口縁部が短く外反し、口縁部がヨコナデ、体部がヘラミガキされる。R A 8703 出土土器は土師器坏がロクロ成形で底面は糸切り無調整、内面をヘラミガキ調整する。赤焼土器坏はすべて糸切り無調整である。土師器甕は口縁部が大きく屈曲しない形状で、口縁部をヨコナデ、体部を不定方向のヘラミガキと下方向へのヘラケズリをおこなっている。R A 8704 の土器は、土師器坏がロクロ成形で、内面をヘラミガキ調整し、糸切り無調整である。赤焼土器坏はすべて糸切り無調整、口縁部が強く外反するものが多い。赤焼土器高台坏は高台部がハ字状に外側に外傾する。土師器甕は口縁部が短く外半もしくは直口気味にたちあがる。口縁部がヨコナデ、体部が外面がヘラミガキ、内面がヘラミガキやヘラナデされる。

R A 8712 出土遺物は、赤焼土器坏がロクロ成形、底部糸切り無調整である。低い高台をもつ赤焼土器高台坏がみられるが、坏のほとんどがかまど崩壊土中であるのに対し、高台坏だけが埋土出土であり、セット関係が明確でない。土師器小形鉢は、ロクロを使用せず、体部



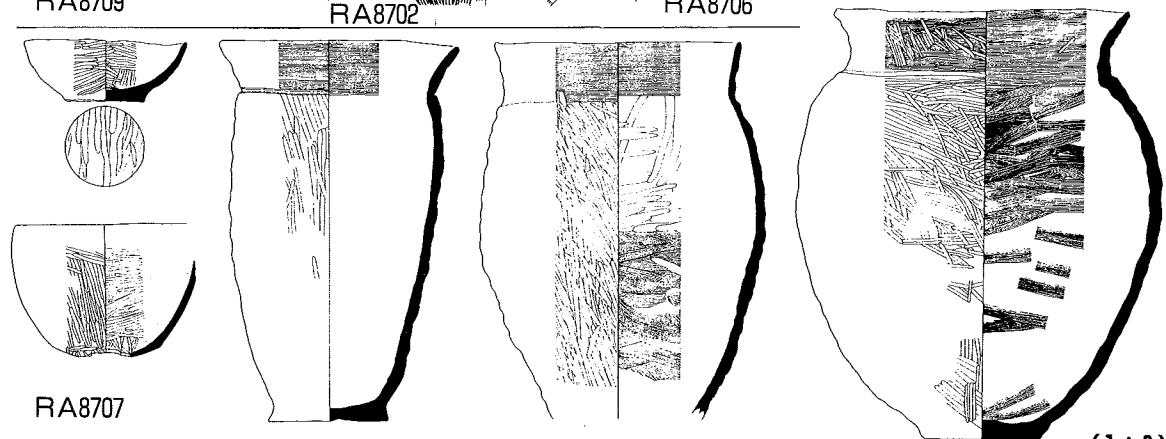
RA8711



RA8709

RA8702

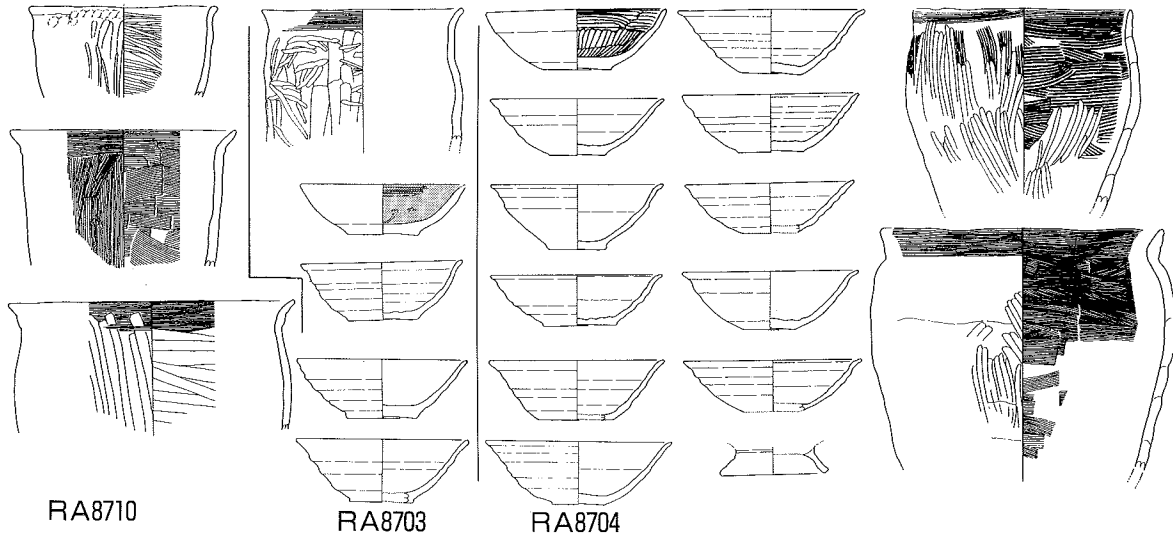
RA8706



RA8707

(1:6)

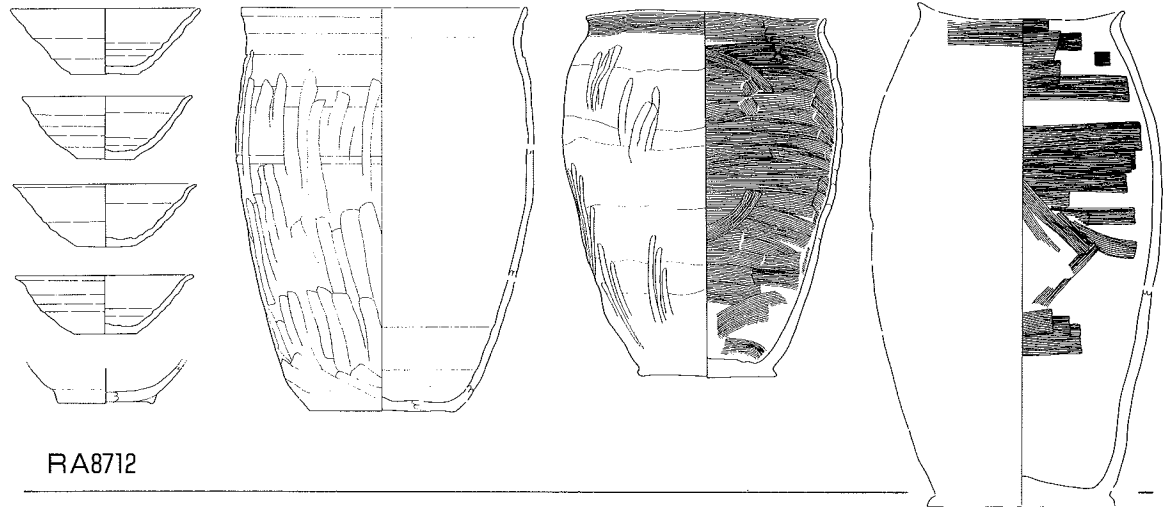
第53図 大館遺跡群の土師器(1)



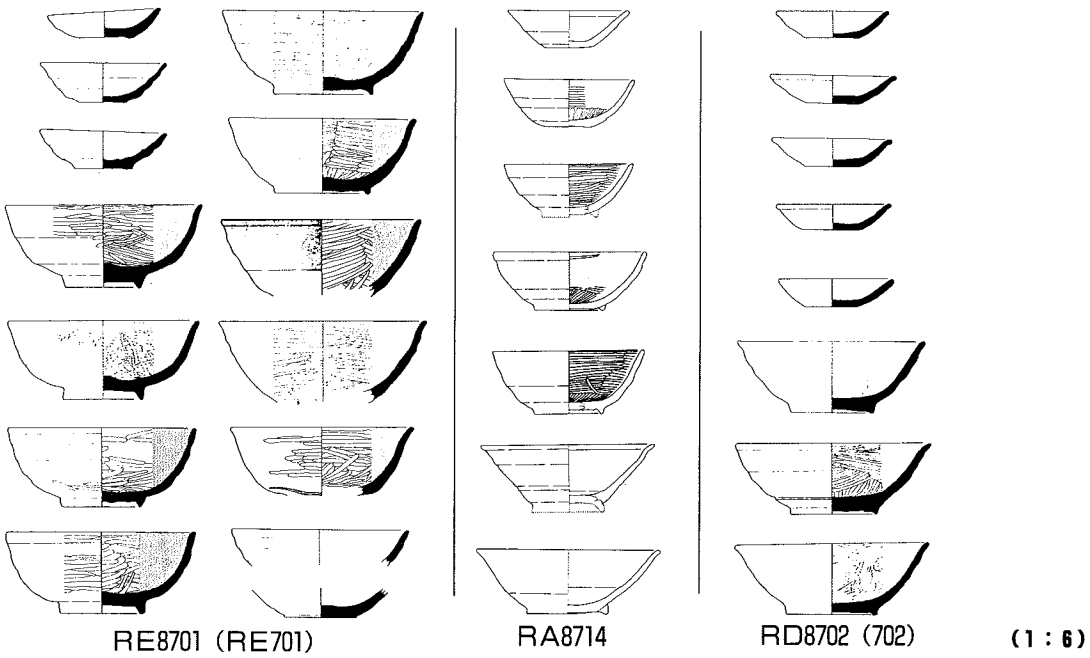
RA8710

RA8703

RA8704



RA8712



RE8701 (RE701)

RA8714

RD8702 (702)

(1 : 6)

第54図 大館遺跡群の土師器(2)

から口縁部にかけて直立し、口縁部がわずかに内湾する器形で、体部と底面がヘラケズリされる。土師器甕は、最大径が口縁部でなく体部上半にあり、口縁部が短く外反し、体部下端が外に張り出す。口縁部外面はヨコナデ、内面は体部にかけてヘラナデ、外面は部分的にヘラミガキされるや全面のヘラケズリが施される。ロクロ成形の赤焼土器甕は、頸部のくびれがほとんどなく、また口縁部の外反もゆるやかである。成形後縦方向のヘラケズリが施される。

坏類は糸切り無調整、底径平均が5.0cm、口径／底径比が2.90、また甕類は口縁部が短く外反し、ヘラナデやヘラミガキ調整されるなど、共通点が多く、これらの土器群はほぼ同時期と考えられる。なおロクロ未使用段階とは大きな時間的空隙があり、また以後の小皿をともない、低い高台をもつ土師器高台付坏の一群とも型式差が明瞭である。

小皿出現期

R A 8714出土遺物は小皿と小形坏、高台付坏がある。小皿は赤焼土器で、糸切り無調整、口径9.5cm、底径3.5cm、器高2.9cmで、内面底部から体部への移行はややなめらかである。小形坏は内面がヘラミガキ調整され、黒色は残らないが内黒処理されていた土師器で、底面は糸切無調整である。低い高台をもつ土師器高台付坏で、内面がヘラミガキ調整、底面が糸切で内黒処理される。高台は体部下端または底部周縁に貼りつけられている。赤焼土器高台付坏は体部下端や底部周縁に高台が付けられている。

R E 8701（原報告701）は小皿と高台付塊とからなる。小皿は口径9.8cm、底径4.3cm、器高2.8cmで、内面の底面から体部への移行はなめらかである。高台付塊は体部下半に丸みを有し、直立する高台を底部周縁につける。内外面にヘラミガキ、内黒処理が施される。R D 8702（原報告702）は小皿と高台坏があり、小皿は、口径9.4cm、底径4.4cm、器高2.1cmで、内面の底部から体部への移行はやや明瞭となる。高台付坏は口縁部直口し、体部はやや丸みをもつも直線的で、底部との境はやや明瞭、高台は体部下端に貼り付けられて低く、断面三角形を呈する。これらにはロクロ成形の甕の破片がみられることもあるが、ほとんど例外的である。

R E 8701とR D 8702は、小皿の形状から前者が先行するものと考えられ、R A 8714の小皿は器高が高くR E 8701に近いものである。高台付坏は体部下端から底面周縁に貼り付けられ、8701と8702の中間形態となっている。

遺構の年代

以上をまとめ、絶対年代を加えた変遷は次のとおりとなる。

7世紀前～中葉－R A 8711・8709・8713

8世紀中～後葉－R A 8701?・8702・8706

8世紀末葉－R A 8705・8707・8708

10世紀前葉－R A 8703・8704・8710・8712

10世紀後葉－R A 8714・R E 8701→R D 8702

付 章

『盛岡市下厨川小屋塚遺跡調査略報』

草 間 俊 一

I 調査に至るまでの経過

昭和43年5月7日岩手大学4年久保泰君が研究室を訪れ、次の如き報告をした。「厨川にアルバイトの作業に行ったところ、道路脇の断面に本年春3月北上市樺山で調査した竪穴住居跡の断面らしいものがでていた」

そこで、同月10日久保君に案内されて、現地をみたが、樺山の如き竪穴の断面か、後世厨川柵関係のピットの断面か判断に迷った。その続きの畑を同月14日に久保君が3年生の鈴木隆英君と試掘したところ、類似の円形の竪穴らしい輪郭のある部分を発見、その部分を少し掘り下げると、土器が出土したので、樺山と同じ竪穴住居跡であるとの確信をもって、小生に報告した。

5月14日直ちに、盛岡市公民館吉田義昭主事に連絡、市教育委員会と共催して発掘調査の手続きをとるよう依頼した。一方調査時期の関係もあるので、5月18日(土)考古学実習を兼ねて調査し、更に5月25日(土)5月26日(日)の両日も現地調査を行った。

市教育委員会からは中村係長を通じて、共催願と発掘届を提出して欲しいとの連絡を受けたので、5月25日付けで発掘調査共催願、5月30日付けで埋蔵文化財発掘届を提出した。その後、地主が多く、承諾書を得るのに手間どったので、実際の届出は若干おくれた。

II 発掘調査の計画と実施

1 発掘主催者

岩手大学教養部長 関 文香
盛岡市教育委員会教育長 中村 圭六

2 発掘担当者

草間 俊一 岩手大学教授 岩手県文化財専門委員
吉田 義昭 盛岡市公民館主事 日本考古学協会員

3 発掘協力者

盛岡市城西中学校 及川 二男
盛岡郵便局 武田 良夫
岩手大学文部技官 高橋 哲郎

岩手大学教育学部日本史研究室所属学生

4年生 久保 泰 菊池 忠昭 川又 正則 加藤 邦忠 斉藤 哲 熊坂 覚

3年生 鈴木 隆英 有住 保 佐藤 徳子 伊藤 幸子 小島 里子 桐生美佐子

2年生 四井 謙吉 吉田 洋

岩手県盛岡第三高等学校社会科研究部員

盛岡市立城西中学校社会科研究部員

4 発掘調査予定地及地主名

盛岡市下厨川字小屋塚20番地11号

地主名 岩手地所K.K. 野中 賢幸 大関 重雄 高橋 和徳 菊池 国夫 西川 善三
小成 薫 吉田 勝蔵 藤原 安三 藤原 英典 千葉 平治 (順序不同)

5 発掘予定地の現状と面積

畑として耕作されていた土地で有るが、宅地予定地となって荒地となっていた。面積約25アールのところ10アールほどの面積を調査予定地とする。

6 発掘調査の期間

届出では6月15日～7月7日まで、土・日を主として行うことにしたが、準備も遅れたので、実際には試掘した5月14日より7月31日まで、土・日を主とし、7月20日以後31日までは連日調査した。調査の一部は8月まで残り、調査した。

III 調査の経過

このような畑に多数の竪穴住居跡の所在するものを調査する場合、調査を予定した10アール全体の地表面を40～50cmの厚さで、ベルトコンベアなどを使って除去し、竪穴住居跡の分布状態を調査して、一つ一つの竪穴の精細な調査を行うのが正式な調査方法であるが、調査経費その他の事情もありトレンチと小ピットによって竪穴の所在を確かめ、それを順次調査する方法をとった。従って竪穴分布の全貌はこれを明らかにすることは出来なかった。

しかし、10の竪穴住居跡と道路の断面に発見された6つの竪穴(第1図A～F)とを発見することが出来た。恐らく、この25アールほどの畑には30以上の竪穴が所在すると推定された。

次に、調査した9つの竪穴について、調査した順に1・2・3と番号を付けて述べる。

IV 竪穴住居跡の状況

(1) 第1号竪穴住居跡

小さいフラスコ形ピットと云われる竪穴の形をしたもので第2図は第1号跡をもとに典型的な形を示したものである。

地表面を60cmの厚さで除去すると竪穴の輪郭が発見される。それまでは黒土層ではっきり出ない。穴の大きさは東西1.65m、南北1.3mの楕円形であった。竪穴の深さははっきりした穴の淵より1.7mあり、地表面からは2.3mの深さがある。

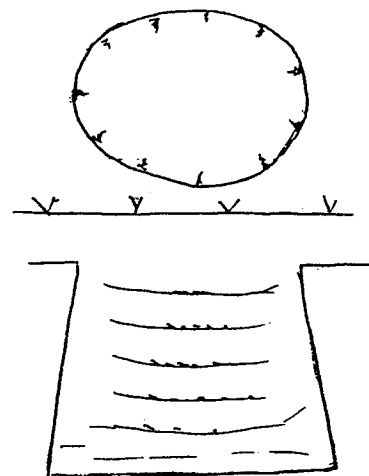
この小さいが、深い竪穴の埋没状態は何層にも文化層が認められるが、時期的に殆ど差異が認められない。

この第1号跡からは形のとれる土器が発見されている。

(2) 第2号竪穴住居跡

東西2.2m×南北2.4mの竪穴で、表土より60cmの厚さのところ、輪郭があらわれた。深さ2.1mで、竪穴の床面は地表面より2.7mも下にある。

竪穴は淵より1.1mほど下がった中央から大木8bの完形土器が出土した。



第2図 竪穴略図

(3) 第3号竪穴住居跡

地表面から55cmのところ、竪穴の輪郭が発見された。穴の大きさは東西2.1m×南北1.5mで、深さは1.55mあった。竪穴の上部から石匙1と石篋1とが発見されている。

(4) 第4号竪穴住居跡

地表面より60cmのところ、竪穴の輪郭が発見された。東西1.05m×南北1.1mで、深さは1.2mであった。

(5) 第5号竪穴住居跡

地表面より50cmのところ、竪穴の輪郭が発見された。東西1.9m×南北1.7mで、深さは1.45mであった。竪穴の部分より石匙2及び土器片発見。

(6) 第6号竪穴住居跡

地表面より55cmのところ、竪穴の輪郭が発見された。径2.1mの円形、深さ2mであった。竪穴の部分から磨製石斧・敲石・土器片出土。

(7) 第7号竪穴住居跡

北半分だけ調査したものであるが、径2mほどで、深さ1.6mあり、表土は50cm。遺物無し。

(8) 第8号竪穴住居跡

これだけは別形式の竪穴住居跡であった。地表面より80cmのところ、竪穴の床面発見。大きさ東西4.7m×南北4.5mの円形の竪穴で、中央より北西よりに石囲いの炉があった。炉は四角に囲った炉であった。

その炉の発見された床面から復原可能土器2点・石皿1点が発見された。

なお床面には都合26ヵ所柱穴らしきところが発見された。

(9) 第9号竪穴住居跡

第8号住居跡の床面に、中央東よりに径2mの円形の竪穴の輪郭が確認された。深さ1.3mあった。

これは第1～7号までの住居跡と同種のものと考えられた。なおそれにつづいた東側にも竪穴らしいものがあり、これを第10号跡と考えられたが精細な調査は行わなかった。

V まとめ

以上、今度の調査の概要であるが、竪穴は当初予想したフラスコ状の小ピットの外、第8号竪穴のような竪穴住居跡も発見された。この第8号竪穴住居跡は縄文時代の普通の竪穴住居跡である。厨川地区では形のはっきりしたものとして最初のもので、県内でも特色ある竪穴住居跡の一つとして注目に値する。

その他、第1号跡～第7号跡と第9号跡の小ピット形の竪穴は、最近各地に発見されて、その用途について種々の論議があるようである。私はこれについて寒い季節にねぐらとして用いた竪穴住居跡で、日常に生活していたところではないとの確信をもっているが、その精細な論拠について稿を改めて述べることを予定しているの、ここでは触れない。この種の竪穴は盛岡市では山岸永福寺山と東中野小山県営住宅地、県内では江釣子村新平と北上市樺山で発見されている。胆沢郡宮沢原遺跡の竪穴もこの一種である。縄文時代前期末から後期初頭までつくられ、使用されている。本遺跡は縄文時代中期後半のものである。

本調査にあたって種々の連絡に当たられた市教育委員会中村和蔵係長、調査の実施にあたっては久保泰・菊池忠昭両君の外岩大日本史研究室の学生一同、城西中学校及川教諭と社会科研究部の生徒、第三高等学校社会科研究部田代耕作君などに大変世話になったことを書き添え厚く感謝の意を表する。

1968.11.6

(昭和43年11月8日 岩手大学歴史学研究室 盛岡市上田三丁目岩手大学教養部)

報 告 書 抄 録

ふりがな こやづかいせき								
書名 小屋塚遺跡								
副書名 第1～27次発掘調査報告								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名 八木光則・室野秀文・三浦陽一ほか								
編集機関 盛岡市教育委員会								
所在地 〒020 岩手県盛岡市津志田14-37-2 TEL 0196-51-4111								
発行年月日 1995年11月30日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	番号					
こやづかいせき 小屋塚遺跡	いわてけん もりおかし 岩手県盛岡市 だいしんちよう 大新町	03201	—	39° 42′ 40″	141° 6′ 40″	1984.05.09 ～ 1994.10.12	1,634㎡	住宅建築および道路整備に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
こやづかいせき 小屋塚遺跡	集落	縄文時代中期	竪穴住居跡	2棟	土器			
			土壇	42基	石器			
		縄文時代後期	遺物包含層		土器 石器 土製品			
		古墳～平安時代	竪穴住居跡	8棟	土師器 (栗罎式～10世紀)			

写真図版

第9次調査



調査区全景
(西から)



RA8713
(南から)



RD7102
(南から)



調査区北半
(北西から)



調査区南半
(北西から)



左 RD7103
RD7104
(西から)



右 RD7107
(南西から)

第14次調査



調査区南半
(南から)



RA7101
(南から)



RA7101
埋設土器

第14次調査



RD 7117
(南から)



RD 7119
(東から)



RD 7117
土層断面
(南から)

第15・16次調査



第15次調査
(西から)



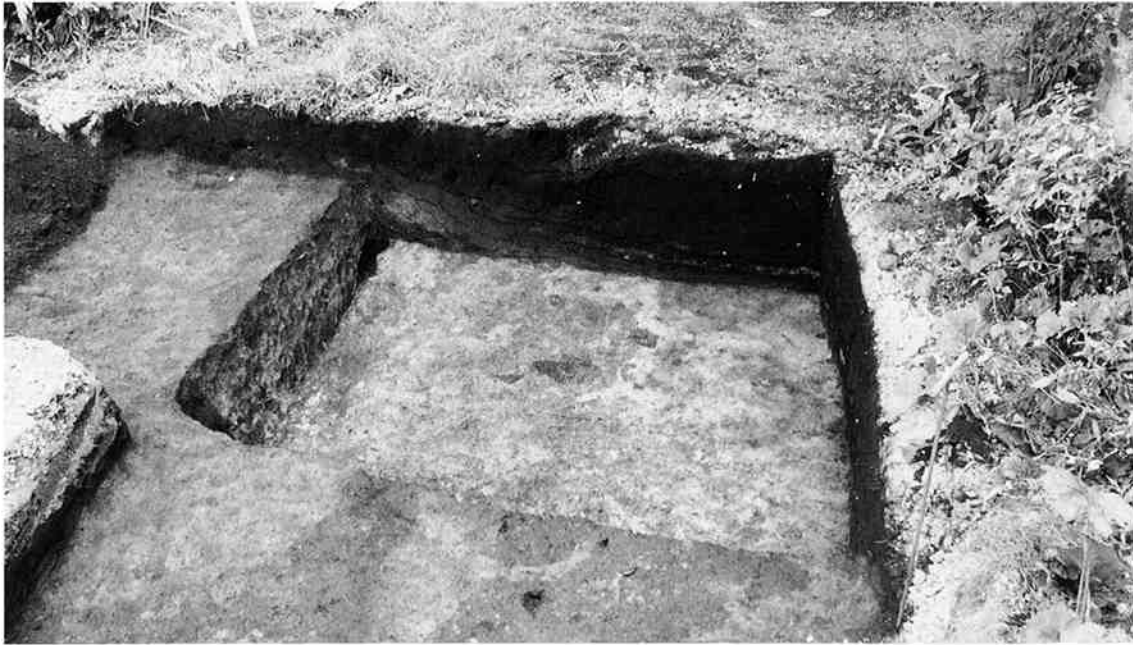
左 第16次調査
(西から)



右 第16次調査
(東から)



RD7125
(南から)



第20・22次調査

第20次調査
RA8714
(西から)



RA8714
下部ピット
(西から)

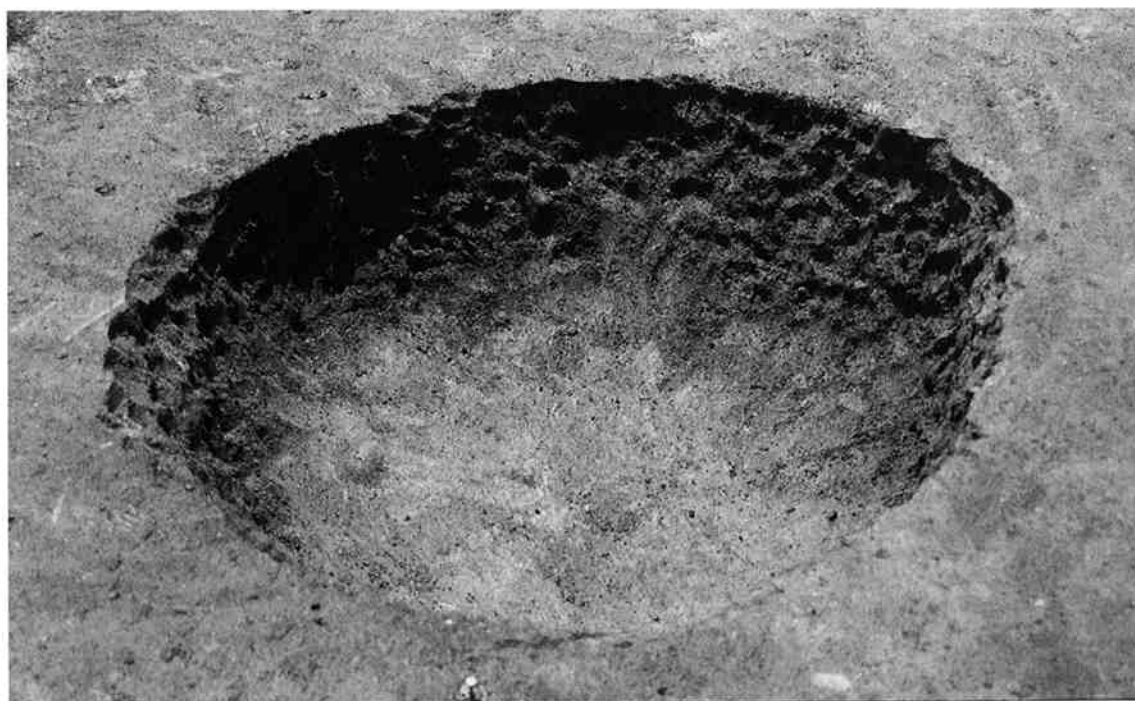


第22次調査

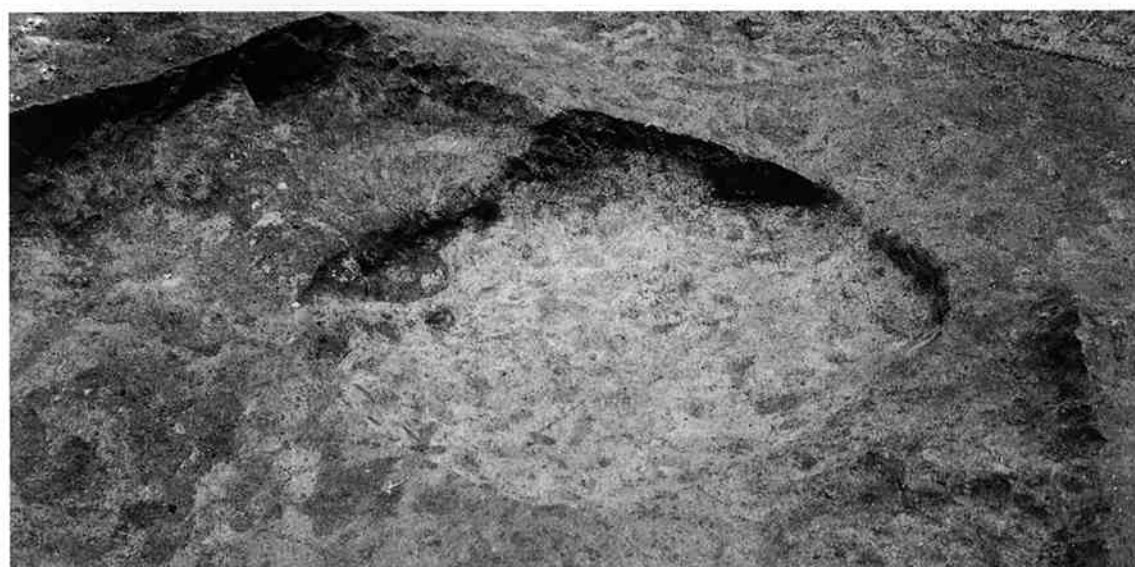
第25次調査



調査区全景
(東から)

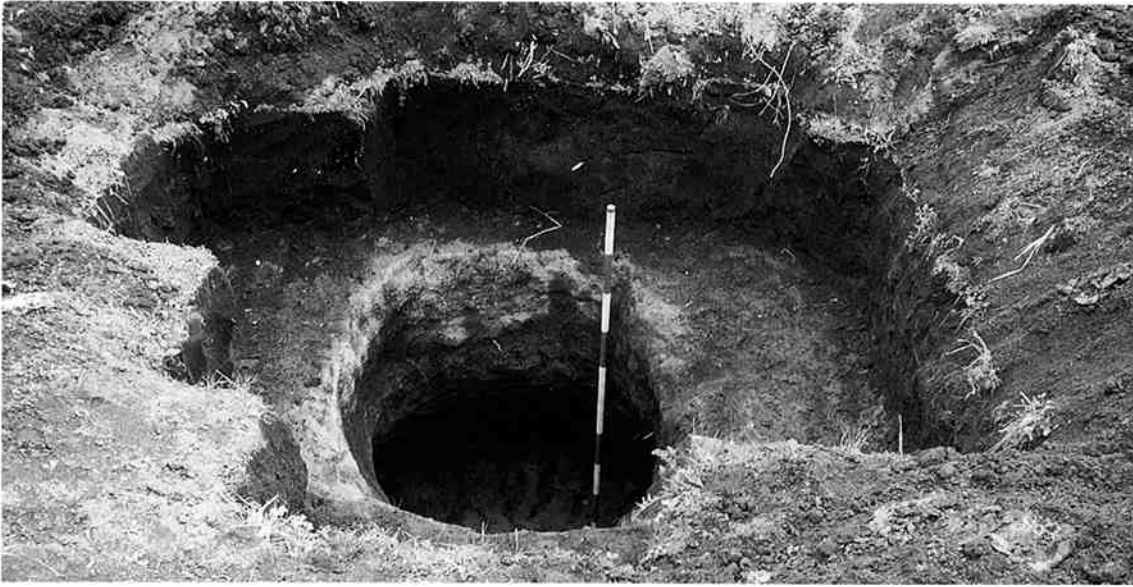


RD7127
(東から)



RD7126
(西から)

1968年調査



第1号竖穴全景



第2号竖穴完形土器
出土状況



第8号竖穴住居跡と
第9号竖穴の輪郭

小屋塚遺跡

—第1～27次調査発掘調査報告書—

発行日 平成7年11月30日

発行所 盛岡市教育委員会

〒020 盛岡市津志田14-37-2

印刷所 小松孔版印刷所

〒020 盛岡市鉾屋町15-4